福　岡　市

有田・小田部 41

福岡市埋蔵文化財調査報告書第870集

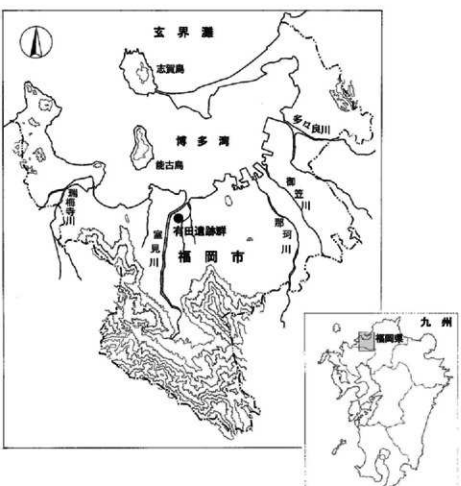
2006

福岡市教育委員会

福岡市早良区

有田・小田部 41

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第870集



調査番号（遺跡略号-次数）

7823（ART-9）・7824（ART-10）・7825（ART-11）・7826（ART-12）・7827（ART-13）
7828（ART-14）・7830（ART-16）・9301（ART-171）・9634（ART-183）・9847（ART-191）
0020（ART-198）・0036（ART-199）・0038（ART-200）・0301（ART-206）・0417（ART-210）
0466（ART-215）

平成18年

福岡市教育委員会

序

アジアの拠点都市として発展を続けている福岡市は、古来から海外の新しい文物や刺激を受容し、独自の文化や風土を作り上げてきました。

市内には大陸との交流を示す遺跡が数多く残されています。特に本市の西南部に位置する早良平野には、弥生時代のクニの成立を物語る吉武高木遺跡、弥生時代後期の環溝集落である野方遺跡など国史跡が点在しています。

本書で報告する有田遺跡群は、早良平野の北部に位置する標高約13mの台地に展開する遺跡です。昭和42年に区画整理事業に伴い九州大学文学部考古学研究室が発掘調査を実施し、昭和48年度からは福岡市教育委員会が発掘調査を実施しています。平成17年度末までに223次に及ぶ発掘調査を行いました。旧石器時代から現代に至る複合遺跡で、特に弥生時代開始期の環溝集落、古代官衙と推測される建物群、戦国時代の小田部城など重要な発見が相次ぎ、大きな調査成果を上げています。

今回報告するのは、昭和53年度から平成16年度にかけて調査したものです。有田、小田部台地で展開した歴史を具体的に想像する資料を得ることが出来ました。

発掘から整理、報告に至るまで、地権者の皆様をはじめ関係各位に多大なご協力をいただきました。心から感謝を申し上げます。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

平成18年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　植木　とみ子

凡　例

1．本書は、福岡市早良区有田遺跡群おける開発に伴い、福岡市教育委員会が国庫補助事業で実施した発掘調査の報告書である。

2．有田遺跡群は、早良区有田、小田部、南庄の通称有田、小田部台地に営まれた旧石器時代から現代に至る複合遺跡で、この名称は『福岡市文化財分布地図』に登録記載している遺跡名である。

3．本書には、昭和53年度の第９～14次、16次調査、平成５年度の第171調査、平成８年度の第183次調査、平成10年度の第191次調査、平成12年度の第198～200次調査、平成15年度の第206次調査、平成16年度の第210、215次調査を収録している。

4．各次調査の遺構・遺物の撮影、原稿執筆、割付は主に下記の各発掘担当者が当たり、力武が編集した。編集に当たっては用語、図面の方位、スケールなど体裁上の統一を図ったが、記述方法や内容については各担当者に任せた。

第９～14・16次調査	力武卓治
第171次調査	小林義彦
第183、191次調査	久住猛雄
第199、200次調査	米倉秀紀
第198、206次調査	池田祐司
第210、215次調査	松浦一之介

5．検出遺構は略号として次のようなローマ字をつけて記述している。

竪穴住居跡 SC　掘立柱建物跡 SB　土壙 SK　貯蔵穴 SU　ピット SP　井戸 SE
甕棺墓 ST　土壙墓 SR　溝 SD　柵 SA　その他 SX

6．本文の通し頁を下端に示し、左右肩には次数とその次数ごとの頁数を示している。また、挿図、写真番号は、全体ではなく各次調査ごとに通し番号としている。

7．本書に掲載している図面類は、すべて磁北（真北より西に約６度20分偏っている）である。

8．　各次調査で得た出土遺物、実測図や写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田２－１－９（TEL 092－571－2921）に収蔵、保管する。誰もが検索し、実見することが出来るので、考古学などの学術研究だけでなく、学校教育や生涯学習など多方面での活用を期待している。

本 文 目 次

第1章　はじめに …… 1
第1節　調査に至るまで …… 1
第2節　調査一覧 …… 5
第2章　調査の記録 …… 9
第9次調査 …… 9
1. 調査に至るまで(9) 2. 調査地の位置と立地(11) 3. 遺構と遺物(11) 4. 小結(20)
第10次調査 …… 21
1. 調査に至るまで(21) 2. 調査地の位置と立地(21) 3. 遺構と遺物(24) 4. 小結(28)
第11次調査 …… 29
1. 調査に至るまで(29) 2. 調査地の位置と立地(29) 3. 遺構と遺物(30) 4. 小結(30)
第12次調査 …… 31
1. 調査に至るまで(31) 2. 調査地の位置と立地(31) 3. 遺構と遺物(32) 4. 小結(42)
第13次調査 …… 43
1. 調査に至るまで(43) 2. 調査地の位置と立地(43) 3. 遺構と遺物(44) 4. 小結(44)
第14次調査 …… 45
1. 調査に至るまで(45) 2. 調査地の位置と立地(45) 3. 遺構と遺物(46) 4. 小結(63)
第16次調査 …… 65
1. 調査に至るまで(65) 2. 調査地の位置と立地(65) 3. 遺構と遺物(66) 4. 小結(80)
第171次調査 …… 81
1. 調査に至る経緯(81) 2. 調査地の位置と立地(81) 3. 遺構と遺物(82) 4. 小結(90)
第183次調査 …… 91
1. 調査に至る経緯(91) 2. 調査の組織(91) 3. 調査地の位置と立地(93) 4. 調査の記録(93)
第191次調査 …… 99
1. 調査に至る経緯(99) 2. 調査の組織(99) 3. 調査地の位置と立地(100) 4. 調査の記録(100)
第198次調査 …… 107
1. 調査に至る経緯(107) 2. 調査地の位置と立地(107) 3. 調査の記録(107)
第199次調査 …… 111
1. 調査に至る経緯(111) 2. 調査地の位置と周辺の調査(111) 3. 遺構と遺物(113) 4. まとめ(116)
第200次調査 …… 123
1. 調査に至る経緯(123) 2. 調査地の位置と周辺の調査(123) 3. 遺構と遺物(124) 4. まとめ(127)
第206次調査 …… 131
1. 調査に至る経緯(131) 2. 調査地の位置と立地(131) 3. 調査の記録(131)
第210次調査 …… 133
1. 調査に至る経緯(133) 2. 調査地の位置と立地(133) 3. 遺構と遺物(136) 4. まとめ(136)
第215次調査 …… 137
1. 調査に至る経緯(137) 2. 調査地の位置と立地(137) 3. 遺構と遺物(138) 4. まとめ(138)

抄　　録 …… 139

挿 図 目 次

1 有田遺跡群と周辺遺跡分布図（縮尺1／25,000）… 2
2 有田・小田部周辺航空写真（1972年撮影）…… 3
3 有田遺跡群調査地点と字図（縮尺／7,500）… 4

第9次調査 …… 9
Fig. 1 調査地位置図（縮尺1／25,000 1／5,000）… 9
Fig. 2 遺構平面図（縮尺1／100） …… 10
Fig. 3 表土の遺物（縮尺1／3） …… 11
Fig. 4 発掘作業風景（北から） …… 11
Fig. 5 住居跡SC01（縮尺1／80）…… 12
Fig. 6 住居跡SC01（北東から） …… 13
Fig. 7 住居跡SC01（北から） …… 13
Fig. 8 住居跡SC01（西から） …… 13
Fig. 9 住居跡SC01の遺物出土状況…… 14
Fig. 10 住居跡SC01の遺物（縮尺1／3） …… 14
Fig. 11 住居跡SC01の遺物…… 15
Fig. 12 土器出土状況 …… 16
Fig. 13 住居跡SC01の遺物（縮尺1／3） …… 16
Fig. 14 住居跡SC01の遺物…… 17
Fig. 15 住居跡SC01の遺物（縮尺1／3） …… 18
Fig. 16 住居跡SC01の遺物…… 19
Fig. 17 住居跡SC01の遺物…… 20
Fig. 18 住居跡SC01の遺物（縮尺1／2） …… 20

第10次調査 …… 21
Fig. 1 調査地位置図（縮尺1／25,000 1／5,000）… 21
Fig. 2 調査区平面図（縮尺1／200） …… 22
Fig. 3 遺構全体図（縮尺1／100） …… 23
Fig. 4 発掘作業風景（南から） …… 23
Fig. 5 表土層の遺物（縮尺1／2 1／3） …… 24
Fig. 6 表土層の遺物 …… 25
Fig. 7 土壙SK01の遺物（縮尺1／3） …… 26
Fig. 8 土壙SK01（縮尺1／60） …… 26
Fig. 9 土壙SK02の遺物（縮尺1／3） …… 26
Fig. 10 土壙SK02（縮尺1／60） …… 26
Fig. 11 土壙SK03の遺物（縮尺1／3） …… 27
Fig. 12 土壙SK03（縮尺1／60） …… 27
Fig. 13 ピット出土の遺物（縮尺1／3） …… 28

第11次調査 …… 29
Fig. 1 発掘作業風景（西から） …… 29
Fig. 2 調査地位置図（縮尺1／25,000 1／5,000）… 29
Fig. 3 遺構全体図（縮尺1／100） …… 30
Fig. 4 出土遺物（縮尺1／2 1／3） …… 30
Fig. 5 出土遺物 …… 30

第12次調査 …… 31
Fig. 1 調査区（北西から） …… 31
Fig. 2 「有田古代遺跡」石碑（有田西公園） … 31
Fig. 3 調査地位置図（縮尺1／25,000 1／5,000）… 31
Fig. 4 周辺遺構図（縮尺1／400） …… 32
Fig. 5 遺構全体図（縮尺1／100） …… 33
Fig. 6 1、3号炉址と遺物（九州大学調査） … 34
Fig. 7 掘立柱建物SB01（西から） …… 34
Fig. 8 掘立柱建物SB01図（縮尺1／50）…… 35
Fig. 9 掘立柱建物SB02、03図（縮尺1／50）…… 36
Fig. 10 掘立柱建物SB04図（縮尺1／50）…… 37
Fig. 11 2号炉址と遺物（九州大学調査） …… 37
Fig. 12 掘立柱建物SB05図（縮尺1／50）…… 37
Fig. 13 掘立柱建物SB06（西から） …… 38

Fig. 14　掘立柱建物SB06図（縮尺1／50）…… 38
Fig. 15　土壙SK01図（縮尺1／30）…… 39
Fig. 16　土壙SK01（北から）…… 39
Fig. 17　土壙SK01の遺物（縮尺1／3）…… 40
Fig. 18　土壙SK01の遺物（縮尺1／3）…… 41
Fig. 19　土壙SK01の遺物 …… 41
Fig. 20　その他の遺物（縮尺1／2　1／3）…… 42

第13次調査 …… **43**
Fig. 1　調査区遠景（南から）…… 43
Fig. 2　調査地位置図（縮尺1／25,000　1／5,000）… 43
Fig. 3　遺構全体図（縮尺1／100）…… 44

第14次調査 …… **45**
Fig. 1　調査地位置図（縮尺1／25,000　1／5,000）… 45
Fig. 2　調査区平面図（縮尺1／200）…… 46
Fig. 3　発掘作業風景（北西から）…… 47
Fig. 4　発掘区全景（北から）…… 47
Fig. 5　遺構全体図（縮尺1／100）…… 48－49
Fig. 6　井戸SE01、02（東から）…… 49
Fig. 7　井戸SE01図（縮尺1／40）…… 49
Fig. 8　井戸SE02図（縮尺1／40）…… 50
Fig. 9　井戸SE01、02の遺物（縮尺1／1　1／3）… 50
Fig. 10　井戸SE01の遺物…… 50
Fig. 11　井戸SE01（南東から）…… 51
Fig. 12　井戸SE02（西から）…… 51
Fig. 13　土壙SK01図（縮尺1／30）…… 52
Fig. 14　土壙SK01の遺物（縮尺1／3）…… 52
Fig. 15　土壙SK01の遺物 …… 52
Fig. 16　ピットの遺物…… 53
Fig. 17　ピットの遺物（縮尺1／3）…… 54
Fig. 18　ピットの遺物 …… 55
Fig. 19　ピットの遺物（縮尺1／3）…… 56
Fig. 20　溝SD01の遺物（縮尺1／3）…… 57
Fig. 21　溝SD01の遺物（縮尺1／3）…… 58
Fig. 22　溝SD01の遺物（縮尺1／3）…… 59
Fig. 23　溝SD01の遺物 …… 60
Fig. 24　溝SD01の遺物（縮尺1／3）…… 61
Fig. 25　溝SD01、表土層の遺物 …… 63
Fig. 26　溝SD01、表土層の遺物（縮尺1／1、1／3）… 63
Fig. 27　表土層の遺物（縮尺1／2）…… 64
Fig. 28　表土層の遺物…… 64

第16次調査 …… **65**
Fig. 1　調査前の風景（北西から）…… 65
Fig. 2　調査地位置図（縮尺1／25,000　1／5,000）… 65
Fig. 3　調査区全景（西から）…… 66
Fig. 4　遺構全体図（縮尺1／100）…… 66
Fig. 5　根石を持つピット…… 67
Fig. 6　表土層の遺物…… 67
Fig. 7　表土層の遺物（縮尺1／3）…… 67
Fig. 8　住居跡SC01図（縮尺1／50）…… 68
Fig. 9　住居跡SC01上の遺物（縮尺1／4）…… 68
Fig. 10　住居跡SC01（北西から）…… 69
Fig. 11　土壙SK01、02、03図（縮尺1／30）…… 69
Fig. 12　土壙SK02、03の遺物（縮尺1／4）…… 70
Fig. 13　土壙SK01、02、03（南から）…… 70
Fig. 14　貯蔵穴SU01図（縮尺1／30）…… 71
Fig. 15　貯蔵穴SU01（西から）…… 71
Fig. 16　貯蔵穴SU01の遺物（縮尺1／4）…… 72
Fig. 17　貯蔵穴SU01の遺物 …… 73
Fig. 18　貯蔵穴SU01の遺物（縮尺1／4）…… 74

Fig. 19　貯蔵穴SU01の遺物 …… 75
Fig. 20　貯蔵穴SU01の遺物（縮尺1／4） …… 76
Fig. 21　貯蔵穴SU01の遺物 …… 77
Fig. 22　貯蔵穴SU01の遺物（縮尺1／4） …… 78
Fig. 23　貯蔵穴SU01の遺物 …… 79
Fig. 24　貯蔵穴SU01の遺物 …… 80
Fig. 25　貯蔵穴SU01の遺物（縮尺1／2） …… 80

第171次調査 …… 81
Fig. 1　第171次調査地の位置（1／25,000　1／5,000） … 81
Fig. 2　第171次調査地周辺現況図（1／600） …… 82
Fig. 3　調査区全景（南より） …… 82
Fig. 4　遺構配置図（1／100） …… 83
Fig. 5　1号土壙実測図（1／40） …… 84
Fig. 6　1号土壙全景（西より） …… 84
Fig. 7　2号土壙実測図（1／30） …… 85
Fig. 8　2号土壙全景（東より） …… 85
Fig. 9　4号土壙実測図（1／40） …… 85
Fig. 10　4号土壙全景（南より） …… 86
Fig. 11　5号・6号土壙実測図（1／30） …… 86
Fig. 12　5号土壙全景（東より） …… 86
Fig. 13　6号土壙全景（北より） …… 86
Fig. 14　7号・8号土壙実測図（1／30） …… 87
Fig. 15　7号土壙全景（東より） …… 87
Fig. 16　8号土壙全景（東より） …… 87
Fig. 17　12号土壙実測図（1／30） …… 88
Fig. 18　12号土壙全景（東より） …… 88
Fig. 19　17号土壙全景（西より） …… 88
Fig. 20　出土遺物実測図（1／1、1／4） …… 89
Fig. 21　出土遺物（1／1、1／4） …… 89

第183次調査 …… 91
Fig. 1　第183次調査地の位置（1／25,000　1／5,000） … 91
Fig. 2　調査地とその周辺図（1／200） …… 92
Fig. 3　第183次調査遺構配置図（1／100） …… 93
Fig. 4　掘立柱建物SB01（1／80） …… 94
Fig. 5　SD02南側および調査区南壁土層（1／40） … 94
Fig. 6　SD02北側土層（1／40） …… 95
Fig. 7　SD02、SK03、SK13出土遺物（1/4、1/6、1/8） … 95
Fig. 8　その他の遺物出土遺物（1／4） …… 96
図版1　1　第183次調査状況全景 …… 97
　　2　調査区東半発掘状況およびSB01検出状況
図版2　1　調査区西側～北側完掘状況（北から） … 98
　　2　調査区南壁（SD02他）土層断面状況（北から）
　　3　SK03礫出土状況（北西から）
　　4　SK13礫出土状況（東から）

第191次調査 …… 99
Fig. 1　調査地の位置（1／25,000　1/5,000） … 99
Fig. 2　第191次調査地とその周辺図（1／300） … 100
Fig. 3　第191次調査遺構配置図（1／100） …… 101
Fig. 4　掘立柱建物SB01（平面=1／60　縦断面=1／40） … 102
Fig. 5　掘立柱建物SB03（平面=1／60　縦断面=1／40） … 102
Fig. 6　掘立柱建物SB02（平面=1／60　縦断面=1／40） … 103
Fig. 7　掘立柱建物SB04（平面=1／60　縦断面=1／40） … 103
Fig. 8　掘立柱建物SB05（平面=1／60　縦断面=1／40） … 103
Fig. 9　掘立柱建物SB06（平面=1／60　縦断面=1／40） … 103
Fig. 10　炉址？SX009（1／20） …… 104
Fig. 11　土壙SK022（1／40） …… 104
Fig. 12　第191次調査出土遺物（1/4 一部1/1、1/2、1/6） … 105
図版1　1　第191次調査状況 …… 106
　　2　SK002完掘状況（北から）

3　SK022土層断面状況（東から）
4　SX009（炉址？）検出状況（北から）

第198次調査 …… **107**
Fig. 1　第196次調査地の位置（1／25,000　1／5,000）　107
Fig. 2　調査区位置図（1／300）…… 108
Fig. 3　遺構配置図（1／100）…… 108
Fig. 4　SC001実測図（1／60）…… 109
Fig. 5　出土遺物実測図（1／3）…… 109

第199次調査 …… **111**
Fig. 1　調査地位置図（1／25,000　1／5,000）… 111
Fig. 2　遺構配置図（1／200　1／60）…… 112
Fig. 3　SC03出土遺物実測図（1／1、1／3）…… 114
Fig. 4　SD02土層断面図（1/40）及び同出土遺物（1/3）… 115
Fig. 5　その他の遺物（1／3）…… 115
Fig. 6　SB04実測図（1／40）…… 116
Fig. 7　早良郡衙全体配置図（1／2,000）…… 117
Fig. 8　早良郡衙Ⅱ期全体配置図（1／1,000）… 118
図版1　1区全体写真（南から）…… 119
　　2区全体写真（西から）
図版2　SC03、SB04（南から）…… 120
　　SD02（南から）
図版3　SB04柱穴土層断面 …… 121
図版4　第199次調査出土遺物 …… 122

第200次調査 …… **123**
Fig. 1　調査地位置図（1／25,000　1／5,000）… 123
Fig. 2　遺構配置図（1／100）…… 124
Fig. 3　SD01土層断面図（1／20）…… 125
Fig. 4　SD01土層断面図（1／3）…… 126
Fig. 5　SD02出土遺物（1／3）…… 127
Fig. 6　SD06実測図物（1／20）…… 127
Fig. 7　有田遺跡群弥生時代前期溝溝配置図（1／250）… 128
図版1　調査区南半全体写真（北から）…… 129
　　調査区北半全体写真
図版2　SD01土層断面　SD01遺物出土状況…… 130
　　SD02土層断面　出土遺物

第206次調査 …… **131**
Fig. 1　第206次調査地の位置図（1／25,000　1／5,000）　131
Fig. 2　調査区位置図（1／300）…… 131
Fig. 3　遺構配置図（1／100）…… 132
Fig. 4　遺構実測図（1／40）…… 132
Fig. 5　調査区土層（1／40）…… 132
Fig. 6　調査区全景（南西から）…… 132
Fig. 7　SX002 …… 132

第210次調査 …… **133**
Fig. 1　第210次調査地の位置図（1／25,000　1／5,000）… 133
Fig. 2　遺構配置図（1／100）…… 134
Fig. 3　調査区全景（南から）…… 134
Fig. 4　SC02検出状況（南から）…… 134
Fig. 5　SC03検出状況（南から）…… 134
Fig. 6　遺物、遺構実測図（1／4　1／50）…… 135

第215調査 …… **137**
Fig. 1　第215調査地の位置図（1／25,000　1／5,000）… 137
Fig. 2　遺構配置図及び出土遺物実測図（1／100　1／4）… 138
Fig. 3　調査区全景（南から）…… 138
Fig. 4　SK01検出状況（西から）…… 138

昭和52年撮影（東から）

発掘作業員の皆さん（昭和53年　田島尾子森遺跡にて）

第1章　はじめに

第1節　調査に至るまで

昭和49年4月に政令指定都市となった福岡市は、山陽新幹線や九州縦貫自動車道が相次いで開通し都市化が急激に進んだ。開発の波は都心部だけでなく近郊農村まで押し寄せ、生活、自然環境を一変させる勢いであった。地下に眠る埋蔵文化財も影響を受け始め、破壊、消滅の危機に直面した。福岡市教育委員会では昭和42年（1967）より社会教育課に埋蔵文化財担当の非常勤嘱託員を1名配置していたが、昭和50年度から特に重要な遺跡であり、かつ急激な開発が予想された博多区板付、西区四箇、そして旧西区有田（旧西区は昭和57年に城南、早良、西区に3分区され、現在有田遺跡群は早良区になる）の遺跡群については、重点地区として小規模の開発行為についても即応できるように事前審査と発掘調査の体制を整えることになった。

有田遺跡群は、早良平野の北側寄りに位置する標高10m前後の洪積世台地で、現町名は有田1、2丁目、小田部1～3・5丁目、南庄3丁目に当たる。台地の東西を北流する金屋川と室見川との浸食を受けて南北約1.8km、東西約0.8kmの縦に細長い逆三角形となり、特に北側はいくつかの谷が入り込んで、あたかもヤツデの葉を広げたような地形となっている。昭和30年代までは、北、中央、南の3地区に農村集落があり、大部分が畑地で「小田部大根」の栽培地として有名であった。しかし昭和40年代に区画整理事業が行われ、また国道202号線の建設によって宅地化が進んだ。この区画整理事業時には、九州大学文学部考古学研究室によって2次の調査が行われた。旧石器時代から中世に至る複合遺跡であることが明らかになったものの、その後しばらく調査は中断していた。しかし昭和58年に市営地下鉄1号線の開業（56年に天神～室見間が部分開業）も計画され、室見駅からわずか1.5kmのこの台地は、住宅地としてだけでなく商業地としての変貌が予測された。

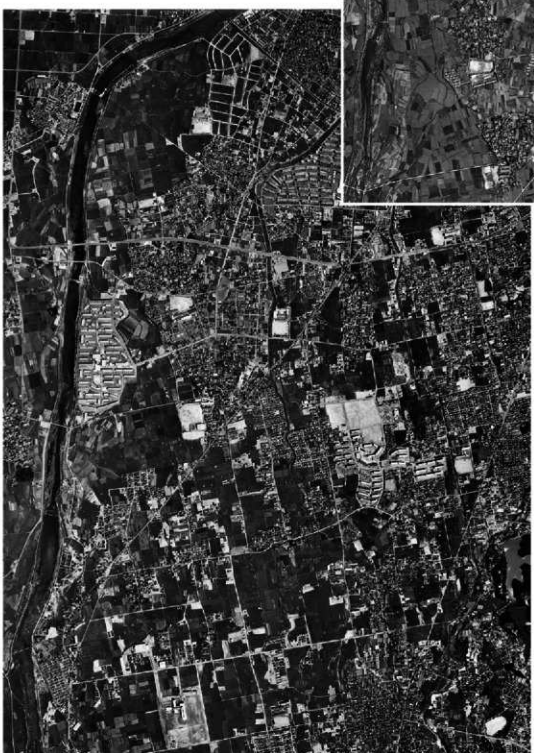
このため文化課では、先の方針に従い開発申請受付、事前審査、試掘、発掘調査を本格的に進めることになった。当初は調査事務所もなく、発掘道具置き場や休憩場所に民家の軒先や寺院の境内を借りての調査であったが、次第に調査条件を整え正確な記録保存に努めてきた。有田遺跡群の調査次数は、平成17年度末で223次を数える。毎年、新たな発見で有田遺跡群の重要性は一層高くなり、学界だけでなく市民の関心を集めている。これは調査終了後速やかに調査報告書を発行し調査成果の公開に努めてきた結果でもあるが、諸般の事情でいまだ未報告となっているものがある。そこで年次的計画を立て、最近調査分と合わせ報告することにした。

調査次数	調査番号	調査地点	調査面積	申請者	調査開始日	事前審査番号	調査担当者
9	7823	小田部1丁目174-2	135	南　旭	昭和53年5月29日～6月30日	52-214	横山邦継
10	7824	小田部2丁目57	200	広渡　保	昭和53年5月30日～6月14日	52-223	力武卓治
11	7825	小田部3丁目4	67	坂本七五男	昭和53年5月26日～6月2日	53-171	飛高憲雄
12	7826	有田1丁目37-11	304	松尾信夫	昭和53年6月6日～6月29日	53-175	飛高憲雄
13	7827	小田部2丁目73-2	60	三苫　剛	昭和53年6月14日～6月16日	53-182	力武卓治
14	7828	小田部3丁目3-261-3	372	吉岡　毅	昭和53年8月2日～8月21日	53-184	横山・力武
16	7830	小田部3丁目312	163	毛利輝雄	昭和53年11月29日～12月9日	53-227	横山・力武
171	9301	小田部1丁目104・517	250	瀬知敬一	平成5年4月4日～4月14日	4-2-406	小林義彦
183	9634	有田2丁目24-16	66	松尾重樹	平成8年8月26日～8月30日	8-2-229	久住猛雄
191	9847	小田部3丁目402-2	169	榊　直子	平成10年12月7日～12月17日	10-2-337	久住猛雄
198	0020	南庄3丁目205-5	45	白鳥　寛	平成12年6月26日～7月27日	12-2-27	池田祐司
199	0036	有田2丁目20-8	45	坂口正敏	平成12年9月1日～9月12日	12-2-178	米倉秀紀
200	0038	有田1丁目8-14	169	岡部貞義	平成12年9月18日～10月4日	12-2-273	米倉秀紀
206	0301	南庄3丁目72-3	66	柴田芳秀	平成15年4月7日～4月10日	14-2-840	池田祐司
210	0417	有田1丁目12-9	41	森崎柳成	平成16年4月30日～5月21日	15-2-1140	松浦一之介
215	0466	小田部5丁目60の一部	69	長　勝幸	平成16年12月1日～12月9日	16-2-749	松浦一之介

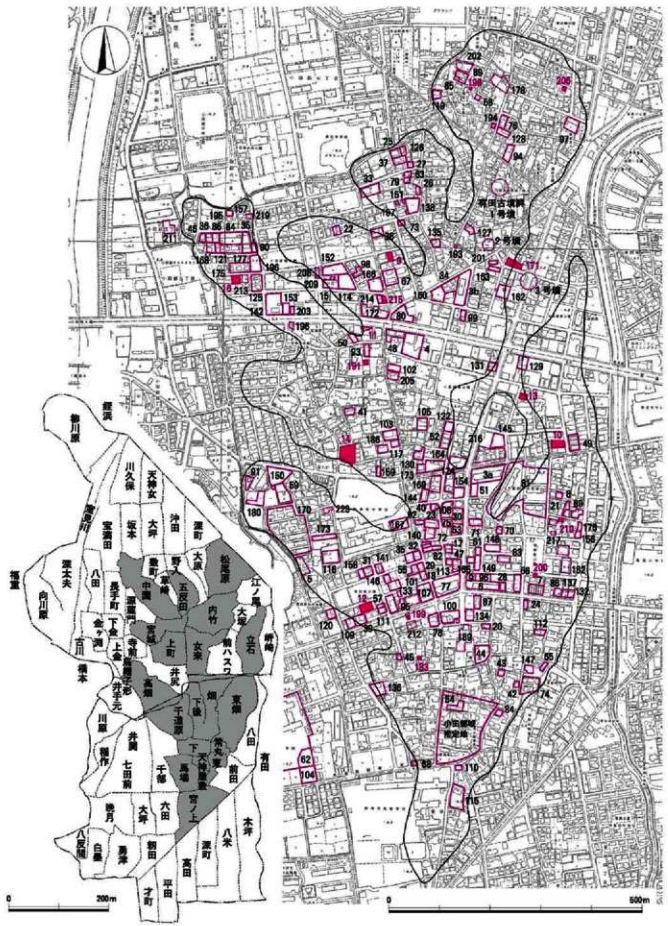
1　福重稲木遺跡　2　橋本遺跡　3　有田七田前遺跡　4　原談儀遺跡
5　原深町遺跡　6　飯倉原遺跡　7　干隈遺跡　8　鶴町遺跡　9　高柳遺跡

1　有田遺跡群と周辺遺跡分布図（縮尺 1/25,000）

1961年撮影



2　有田・小田部周辺航空写真（1972年撮影）



3　有田遺跡群調査地点（縮尺／7,500）と字図

第2節　有田遺跡群調査一覧

有田遺跡群の地理、歴史的環境、そして調査成果については、これまでの調査報告書に幾度となく語られており、今回は紙数の制限もあって繰り返さない。ただ調査報告書は、次数に従って順序よく発行しているわけではなく、しかも調査次数の付け方が地区ごとではないので、次数、調査地点、報告書の検索がやや面倒になっている。その欠を補うために調査、報告書一覧表を作成すると共に、各調査地の報告に当たっては、最初にその位置を大、小縮尺の2枚の地図で示している。

次数	調査番号	調査年度	所在地	字名	埋文報告書集	有田・小田部報告集
1	6501	昭40	有田小田部	有田・小田部	1	九大
2	6603	昭41	有田小田部	有田・小田部	2	九大
3A	7503	昭50	小田部1丁目152	内竹	43	
3B	7504	昭50	有田1丁目	畑	155	8
4	7710	昭52	小田部2丁目	内竹	470	23
5	7711	昭52	小田部2丁目	高畑	113	6
6	7712	昭52	有田1丁目	畑	377	19
7	7821	昭53	有田1丁目	東畑	81	2
8	7822	昭53	有田1丁目	東畑	81	2
9	7823	昭53	小田部1丁目174-2	五反田	870	41
10	7824	昭53	小田部2丁目57	立石	870	41
11	7825	昭53	小田部3丁目4	五反田	870	41
12	7826	昭53	有田1丁目37-11	千道原	870	41
13	7827	昭53	小田部2丁目73-2	立石	870	41
14	7828	昭53	小田部3丁目3-261	上町	870	41
15	7829	昭53	小田部1丁目	五反田		
16	7830	昭53	小田部3丁目312	中園	870	41
17	7831	昭53	有田1丁目	畑	58	1
18	7913	昭54	有田1丁目	下後		
19	7914	昭54	有田1丁目	畑	96	4
20	7915	昭54	有田2丁目	畑		
21	7916	昭54	有田2丁目	東畑	58	1
22	7917	昭54	小田部5丁目	五反田	58	1
23	7918	昭54	有田1丁目	下後	58	1
24	7919	昭54	有田2丁目	東畑	58	1
25	7920	昭54	小田部5丁目	大原	58	1
26	7921	昭54	小田部5丁目	松尾原	58	1
27	7922	昭54	小田部5丁目	松尾原	58	1
28	7923	昭54	有田1丁目	東畑	81	2
29	7924	昭54	有田1丁目	下後	81	2
30	7925	昭54	小田部3丁目	畑	110	5
31	7926	昭54	有田1丁目	千道原	81	2
32	7927	昭54	有田1丁目	下後	96	4
33	8005	昭55	小田部1丁目	大原	81	2
34	8006	昭55	小田部1丁目	内竹	81	2
35	8007	昭55	小田部5丁目	千道原	173	9
36	8008	昭55	小田部5丁目	中園	96	4
37	8009	昭55	小田部1丁目	大原	96	4
38	8010	昭55	小田部1丁目	五反田	96	4
39	8011	昭55	有田1丁目	千道原	113	6
40	8012	昭55	有田1丁目	下後	96	4
41	8013	昭55	小田部3丁目	上町	96	4
42	8104	昭56	有田2丁目	東	96	4
43	8105	昭56	有田2丁目	常丸	155	8
44	8106	昭56	有田2丁目	常丸	110	5
45	8107	昭56	有田2丁目	下	96	4
46	8108	昭56	小田部5丁目	中園	110	5
47	8109	昭56	有田1丁目	畑	110	5
48	8110	昭56	小田部2丁目	内竹	110	5
49	8111	昭56	小田部3丁目20番、21番	立石	110	5
50	8112	昭56	小田部3丁目11-2、6-2	中園	377	19
51	8113	昭56	有田1丁目	畑	113	6
52	8114	昭56	有田2丁目	女来	139	7
53	8115	昭56	有田1丁目	畑	113	6
54	8116	昭56	有田2丁目16-1	天神屋敷	427	22
55	8117	昭56	有田1丁目33-3	下後	110	5
56	8118	昭56	有田1丁目32-9	東畑	113	6
57	8119	昭56	有田1丁目	千道原	113	6
58	8120	昭56	南庄3丁目	南庄3丁目	377	19
59	8121	昭56	小田部3丁目	高畑	84・139	3・7
60	8122	昭56	小田部3丁目	高畑	139	7
61	8123	昭56	有田2丁目	畑	377	19
62	8133	昭56	有田七前田391-3外	七田前	95	
63	8204	昭57	小田部1丁目	大原	110	5

太字次数は本書掲載

次数	調査番号	調査年度	所在地	字名	埋文報告書集	有田・小田部報告集
64	8205	昭57	小田部５丁目	中園	155	8
65	8206	昭57	有田２丁目	八田	377	19
66	8207	昭57	有田１丁目	東畑	113	6
67	8208	昭57	小田部１丁目	五反田	377	19
68	8209	昭57	有田２丁目	馬場	427	22
69	8210	昭57	有田１丁目	東畑	427	22
70	8211	昭57	有田１丁目	東畑	173	9
71	8212	昭57	有田１丁目	畑	173	9
72	8213	昭57	有田１丁目	下後 大原	173	9
73	8214	昭57	小田部１丁目	松尾原	427	22
74	8215	昭57	有田２丁目	前田	471	24
75	8216	昭57	有田１丁目	畑	110	5
76	8304	昭58	南庄３丁目	南庄３丁目	113	6
77	8305	昭58	有田１丁目30-1～3	下後	471	24
78	8306	昭58	有田２丁目	下後	471	24・29
79	8307	昭58	小田部１丁目	大原	538	29
80	8308	昭58	小田部１丁目	内竹	547	30
81	8309	昭58	有田１丁目	東畑	129	
82	8310	昭58	有田１丁目	畑	139	7
83	8311	昭58	有田１丁目127-3	東畑	139	7
84	8312	昭58	有田２丁目7-66	前田		
85	8313	昭58	南庄３丁目261-6	南庄３丁目		
86	8314	昭58	小田部５丁目143-3	中園	113	6
87	8315	昭58	有田２丁目12番地６	畑	139	6
88	8316	昭58	有田１丁目８－７	東畑		
89	8317	昭58	南庄３丁目	南庄３丁目		
90	8318	昭58	小田部５丁目	中園		
91	8417	昭59	小田部３丁目	高畑		
92	8418	昭59	有田１丁目	下後		
93	8419	昭59	小田部３丁目	宮城		
94	8420	昭59	南庄３丁目	南庄３丁目		
95	8421	昭59	有田１丁目	千道原	139	7
96	8422	昭59	有田１丁目	畑		
97	8423	昭59	南庄３丁目	南庄３丁目	139	7
98	8424	昭59	小田部５丁目	五反田		
99	8425	昭59	小田部１丁目	内竹		
100	8510	昭60	有田３丁目	下後	212	10
101	8511	昭60	有田１丁目	下後	139	7
102	8512	昭60	小田部２丁目	女来	173	9
103	8513	昭60	小田部３丁目	上町	212	10
104	8514	昭60	有田七田前	七田前	95	七田前
105	8515	昭60	小田部２丁目	女来	173	9
106	8538	昭60	小田部２丁目	中園	651	34
107	8602	昭61	有田１丁目31-1ノ-2	下後	234	11
108	8603	昭61	有田１丁目27-1外	畑	155・173	8
109	8611	昭61	有田１丁目37-8	千道原	173	9
110	8623	昭61	有田３丁目71	馬場	308	16
111	8624	昭61	有田１丁目37-3	千道原	173	9
112	8644	昭61	有田２丁目9-2	東畑	308	16
113	8646	昭61	有田１丁目28-9	畑	234	11
114	8651	昭61	小田部５丁目51-2外	五反田	308	16
115	8655	昭61	有田３丁目8-53	宮ノ上	684	36
116	8656	昭61	小田部３丁目189-1	高畑	308	16
117	8657	昭61	小田部３丁目3-14	女来	173	9
118	8639	昭61	有田１・３丁目地内下水道		266	14
119	8701	昭62	南庄３丁目270-1、271-4	南庄３丁目	264	12
120	8705	昭62	有田１丁目38-3、9	千道原	234	11
121	8706	昭62	小田部５丁目154-2	中園	264	12
122	8707	昭62	小田部２丁目11-16	女来	173	9
123	8712	昭62	有田・小田部地内 下水道		266	14
124	8713	昭62	有田１丁目24-4	畑	725	37
125	8718	昭62	小田部５丁目171	中園	340	18
126	8724	昭62	小田部１丁目34-9	大原	264	12
127	8729	昭62	小田部１丁目418-1	松尾原	264	12
128	8730	昭62	南庄３丁目116	南庄３丁目	264	12
129	8735	昭62	小田部２丁目38	立石	264	12
130	8739	昭62	小田部２丁目185-2	女来	212	10
131	8742	昭62	小田部２丁目131	前ハスワ	234	11
132	8749	昭62	有田１丁目8-3	八田	年報	
133	8750	昭62	有田１丁目32-4	千道原	234	11
134	8753	昭62	有田２丁目12-3・4	畑	212	10
135	8754	昭62	有田一２丁目361	松尾原	340	18
136	8803	昭63	有田２丁目22-3	馬場	378	20
137	8804	昭63	有田１丁目8-4	八田	年報	
138	8811	昭63	小田部１丁目204	松尾原	308	16
139	8813	昭63	小田部２・３丁目 下水道	畑	266	14
140	8815	昭63	有田１丁目29-10	下後	340	18
141	8822	昭63	有田１丁目33-6	千道原	378	20
142	8836	昭63	小田部５丁目17-10	中園	378	20
143	8836	昭63	小田部５丁目73-74	中園	378	20

次数	調査番号	調査年度	所在地	字名	埋文報告書集	有田・小田部報告集
144	8844	昭63	有田1丁目25-4	下後	264	12
145	8851	昭63	小田部2丁目90	前ハスワ	340	18
146	8853	昭63	有田1丁目32-6	千道原	234	11
147	8854	昭63	有田2丁目13-5	常丸	426	21 34
148	8861	昭63	有田1丁目18-4	東畑	340・426	18
149	8905	平1	有田1丁目21-3	畑	234	11
150	8912	平1	小田部3丁目163	高畑	725	37
151	8919	平1	小田部1丁目203・207	大原	308	16
152	8953	平1	小田部5丁目45、49	五反田	265	13
153	8960	平1	小田部5丁目70、71	中園	426	21
154	8961	平1	有田1丁目24-2	畑	307	15
155	8965	平1	有田地内下水道		266	14
156	8979	平1	有田1丁目12-2	東畑	264	12
157	8980	平1	小田部5丁目131-1	中園	264	12
158	9020	平2	有田1丁目34-3	千道原	308	16
159	9027	平2	小田部3丁目251	井尻	307	15
160	9029	平2	小田部3丁目251	内竹	339	17
161	9033	平2	有田地内下水道		266	14
162	9034	平2	小田部一106他	内竹	264	12
163	9036	平2	小田部1丁目123	内竹	307	15
164	9041	平2	小田部2丁目106	女来	308	16
165	9047	平2	有田1丁目21-11	畑	307	15
166	9106	平3	小田部5丁目5-39外	五反田	年報	
167	9117	平3	小田部3丁目32-1	下後	年報	
168	9132	平3	小田部5丁目154-1	中園	684	36
169	9147	平3	有田1丁目25-1	下後	339	17
170	9251	平4	小田部3丁目179-1	高畑	473	26
171	9301	平5	小田部1丁目104、507	江ノ尾	870	41
172	9332	平5	小田部5丁目61	五反田	472	25
173	9338	平5	小田部3丁目189-1、198	高畑	473	26
174	9340	平5	小田部2丁目194、195	前ハスワ	年報	
175	9401	平6	小田部5丁目160～164	中園	513	28
176	9417	平6	有田1丁目6-1	東畑	470	23
177	9422	平6	小田部5丁目150-3	中園	513	28
178	9516	平7	南庄3丁目214	南庄3丁目	512	27
179	9524	平7	小田部2丁目102番地外	前ハスワ	513	28
180	9527	平7	小田部3丁目159-1番地	高畑	684	36
181	9607	平8	有田2丁目31-4	千道原	574	31
182	9625	平8	有田1丁目10-4	東畑	657	35
183	9634	平8	有田2丁目24-26	上町	870	41

次数	調査番号	調査年度	所在地	字名	埋文報告書集	有田・小田部報告集
184	9676	平8	有田1丁目32-8	千道原	574	31
185	9717	平9	小田部1丁目126	内竹	年報	
186	9721	平9	小田部3丁目285、286	上町	657	35
187	9727	平9	有田2丁目12-5	畑	657	35
188	9759	平9	有田1丁目31-6	千道原	608	32
189	9803	平10	有田2丁目	畑	649	33
190	9832	平10	有田1丁目1-10-7	東畑	657	35
191	9847	平10	小田部3丁目	宮城	870	41
192	9914	平11	有田2丁目13-3	下後	657	35
193	9924	平11	小田部1丁目393	松尾原	657	35
194	9929	平11	南庄3丁目181	南庄3丁目	784	39
195	9931	平11	小田部5丁目16-3	中園	784	39
196	9967	平11	小田部3丁目16・17-2	中園	784	39
197	0013	平12	小田部1丁目33-13	大原	年報	
198	0020	平12	南庄3丁目205-5	南庄3丁目	870	41
199	0036	平12	有田2丁目20-8他	東畑	870	41
200	0038	平12	有田1丁目8番14	千道原	870	41
201	0103	平13	小田部1丁目16-2	内竹	15・784	39
202	0117	平13	南庄3丁目256の一部、256	南庄3丁目	735	38
203	0213	平14	小田部5丁目82-1・-2	中園	784	39
204	0231	平14	有田1丁目25-13、-12	下後	784	39
205	0256	平14	小田部2丁目155-1、156	女来	869	40
206	0301	平15	南庄3丁目72番3	南庄3丁目	870	41
207	0359	平15	有田1丁目16-3	東畑	年報	
208	0412	平16	小田部5丁目87-2、87-3	草崎	年報	
209	0416	平16	小田部5丁目49-2、他	草崎	年報	
210	0417	平16	有田1丁目12-9	東畑	870	41
211	0428	平16	小田部5丁目193	宝満田	871	42
212	0429	平16	有田2丁目20-10	千道原	年報	
213	0438	平16	小田部5丁目170-1	中園	年報	
214	0448	平16	小田部5丁目60番の一部	五反田	年報	
215	0466	平16	小田部5丁目60番の一部	五反田	870	41
216	0484	平16	小田部2丁目91、他	前ハスワ	年報	
217	0508	平17	有田1丁目11-4	東畑	年報	
218	0515	平17	有田1丁目12-7	東畑	年報	
219	0519	平17	小田部5丁目15-5	中園	年報	
220	0542	平17	有田1丁目12-6の一部	東畑	年報	
221	0549	平17	有田1丁目31-5	千道原	年報	
222	0557	平17	有田1丁目31-5	千道原	年報	
223	0565	平17	小田部3丁目204-2	高畑	年報	

太字次数は本書掲載

有田遺跡群報告書番号と掲載調査次数

有田・小田部集	埋蔵文化財調査報告書	発行年	掲載調査次数
	第1集	1967	1 『有田古代遺跡発掘調査概報』 20集まで B 4 判
	第2集	1968	2 『有田遺跡－福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告－』
	第43集	1977	3A・3B 『有田周辺遺跡調査概報』
		1977	6 「有田・小田部」現地説明会資料（有田遺跡調査班作成）
		1979	9・10・11・12・13・14・15・16 『有田遺跡』（有田遺跡調査班作成）
1	第58集	1980	17・21・22・23・24・25・26・27
2	第81集	1982	7・8・28・29・31・33・34
3	第84集	1982	59
	第95集	1983	62 『有田七田前遺跡－有住小学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告－』
4	第96集	1983	19・32・36・37・38・40・41・42・45
5	第110集	1984	30・44・46・47・48・49・55・63・75
6	第113集	1985	5・39・51・53・56・57・66・76・86・分布調査資料
	第129集	1986	81 『有田遺跡群-第81調査－』
7	第139集	1986	52・59・60・82・83・87・95・97・101・第59次調査の炭化米
8	第155集	1987	3・43・64・108 3次調査の木材
		1987	107～117 『有田遺跡－1986年度調査の概要』（有田遺跡調査班作成）
9	第173集	1988	35・70・71・72・102・105・109・111・117・122 第108次調査追加
10	第212集	1989	100・103・130・134
11	第234集	1990	107・113・120・131・133・146・149
12	第264集	1991	119・121・126・127・128・129・157・162・144・156 第126次調査の人骨
13	第265集	1991	152
14	第266集	1991	118・123・139・155・161・原遺跡5
15	第307集	1992	154・159・163・165
16	第308集	1992	110・112・114・116・138・151・158・164
17	第339集	1993	160・169
18	第340集	1993	125・135・140・145・148
19	第377集	1994	6・50・58・61・65・67
20	第378集	1994	136・141・142・143
21	第426集	1995	147・153 第148次調査遺物補遺 これよりA 4 判
22	第427集	1995	54・68・69・73
23	第470集	1996	4・176
24	第471集	1996	74・77・78
25	第472集	1996	172
26	第473集	1996	170・173
27	第512集	1997	178
28	第513集	1997	175・177・179
29	第538集	1998	78・79
30	第547集	1998	80
31	第574集	1998	181・184
32	第608集	1999	188
33	第649集	2000	189
34	第651集	2000	106 第147次調査出土遺物（追加分）
35	第657集	2000	182・186・187・190・192・193
36	第684集	2001	115・168・180
37	第725集	2002	124・150
38	第735集	2003	202
39	第784集	2004	194・195・196・201・203・204
40	第869集	2006	205
41	第870集	2006	9・10・11・12・13・14・16・171・183・191・198・199・200・206・210・215
42	第871集	2006	211

第２章　調査の記録

第９次調査

１．調査に至るまで

南旭氏より昭和53年２月14日付けで、福岡市早良区小田部１丁目174－２における埋蔵文化財の事前審査申請書が、福岡市教育委員会文化課に提出された。開発地は、小字名では「五反田」と呼ばれていることから、室見側右岸に開けた水田部に当たると思われた。しかし当時はまだ周辺部での調査例は皆無であったが、有田・小田部台地の上に乗り、埋蔵文化財存在の可能性は高いことから、試掘を行うことになった。その結果、埋蔵文化財を確認し、開発が個人住宅建設であることから、昭和53年度の国庫補助金で５月29日より本調査を実施した。

先述したように文化課では、昭和50年度から重点地区を中心にして市内をいくつかのゾーンに分け、調査担当職員を複数配置していた。昭和53年度は、飛高、横山、力武の３人が有田遺跡群とその周辺を担当することになり、事前審査班と連絡、調整をしながら年間工程を立て、３人が分散、集合を繰り返した。この年度は、有田遺跡群第９～16次調査の８か所の他に、城南区田島尾子森遺跡、早良区高柳遺跡など計13遺跡の調査を実施した。

なお調査後に一応の作業を経てパンフレット『有田遺跡』を発行した。この小冊子は、本格的な整理作業の準備として、調査成果と合わせて江戸時代の関連文献を集め紹介したものである。発掘作業員や協力者の方々へ、いち早く調査成果を公開しようという願いであった。しかしその後長く発掘優先の業務となり、整理作業に取りかかれず、また調査主任であった飛高氏が故人となられるなど、厳しい状況が続き報告書発行に至らなかった。埋蔵文化財行政を取り巻く環境は、28年を経過した現在の方がはるかに厳しく、どう説明しても調査担当者の怠慢と言わざるをえない。十分に反省するとともに、ご協力いただいた発掘作業員をはじめ多くの方々に対し、あらためて感謝の意を表します。なお、第15次調査については、出土資料が膨大でかつ製鉄遺構や住居跡、掘立柱建物跡など重要遺構があることから、十分な資料整理を済ませて次年度に本報告する。

Fig. 1　調査地位置図（縮尺 1/25,000　1/5,000）

調査組織　（第9～16次調査）

調査主体　福岡市教育委員文化部文化課（埋蔵文化財係）

課長　井上剛紀　　**係長**　三宅安吉、柳田純孝　　**事前審査**　柳沢一男

調査担当　飛高憲雄、横山邦継、力武卓治（報告）　　**調査庶務**　古藤国生

整理作業　井元雅枝、山中香吹里、花田早苗

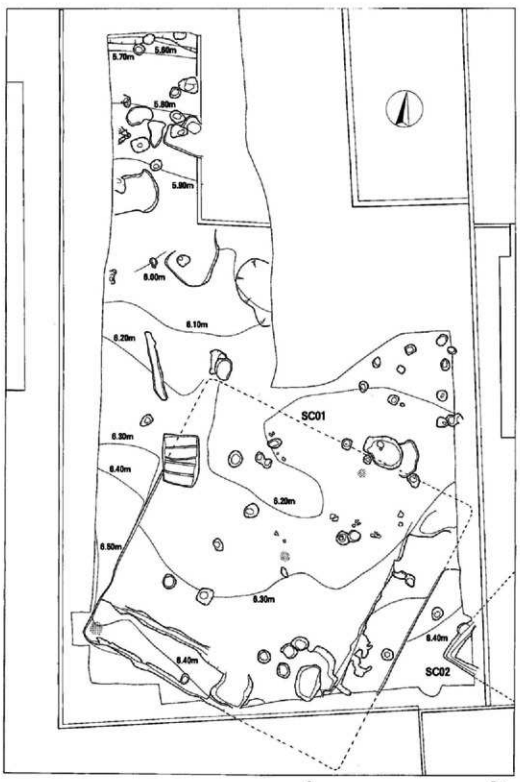


Fig. 2　遺構平面図（縮尺1／100）

2　調査地の位置と立地

有田・小田部台地は、標高が最も高い有田2丁目交差点付近を基部にして、北側に大小8個の突出部がある。この特徴的な地形には、ほぼ小字名の境界が重なっている。本調査地の突出部は、幅約150m、長さ約290mで北西側に延びている。本来は中央に低い尾根が北西方向に走っていたと思われ、本調査地は、その東側斜面のしかも縁部に近い場所に位置している。

3　遺構と遺物

本調査地は、幅10.6m、奥行き18.75mの長方形である。全面に遺構が広がると予想されたことからパワーシャベルで表土を剥ぎ、慎重に遺構検出を行った。表土の厚さは約20cm前後で、下層には鳥栖ロームが地山となっている。排土持ち出しが出来なかったことから、その置き場に苦慮した。旧住宅の攪乱部をうまく利用し、またいくつかに区画しながら場内で排土移動を繰り返した。このために中断期間があったが、6月30日に調査を終了した。、後世の削平で遺構の残りは悪かったものの全面に大小のピットがあり、さらに南寄りでは2軒の竪穴住居跡を検出した。

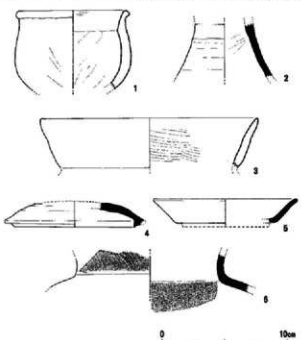


Fig. 3　表土の遺物（縮尺1/3）

表土の遺物

表土は攪乱を受けており安定した包含層ではないが、出来るだけ遺物を取り上げた。このうち細片ながら6点を図化出来た。1は口径9.1cmの土師器丸底鉢。小さく肥厚した口縁部に丸みのある底部が付く。内面下半は右上がりの工具によるナデ上げ調整。2は須恵器高坏脚部。3は口径17.2cmの土師器甕。中位で微妙に湾曲しながら外反する。4は須恵器蓋。かえり端は先細くなっている。5は須恵器の高台付き坏。口径11.4cm。6は須恵器甕の頸部破片。外面にヘラ記号か。この他にも異なる時期の遺物が混在して出土したが、古墳時代の遺物が多かったことから、同時代の遺構検出を期待した。

Fig. 4　発掘作業風景（北から）

(1) 竪穴住居跡（SC）

SC01　調査区長軸に対し斜交する方形のプランである。北壁は削平されて痕跡を留めていない。また南、東壁隅は調査区外に出ていることから全形を知ることは出来ない。検出した壁は、最も残りのよい部分で約25cmの高さしかなく、床面にも畑耕作時の撹乱と思われる大小のピットが無数にある。実測では、この住居跡に関連すると思われるピット、土壙のみを検討、判断しながら図化した。南壁の長さは、南、東壁を延長することによって約7.6m前後と推測した。一方東、西壁については北端が消失しているが、4本柱の主柱穴と考えた。SP01～SP04の中心線を北に折り返して約3.9m前後に北壁があったと推定した。とすると4壁ともほぼ同じ長さとなり、正方形に近いプランとなる。東、南壁にはベッド状遺構が付いている。東壁のベッドは、幅110cm、長さ510cm、床面からの高さは約13cm。両短辺が失われているが、壁と同じ長さであったのだろう。南壁のベッドは、ほとんど高まりがないが、両長辺に細い溝が残っていることから、幅102cm、長さ386cmの長方形ベッドを想定した。しかし東壁ベッドには溝が巡っていないことからすると、仕切り的な施設とも考えられる。床面には10数のピットがあるが、このうち主柱穴は先述したようにSP01～SP04とし、4本柱構造の家屋と考えた。SP01とSP02については、2個連なっていることから建て替えの可能性もあろう。この他に大き

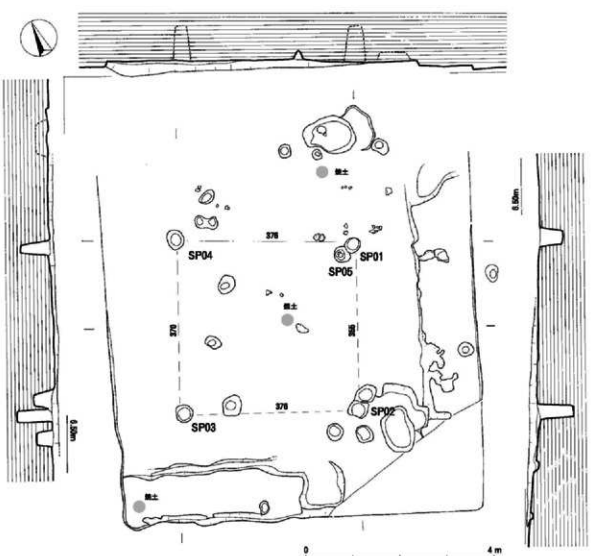


Fig. 5　住居跡SC01（縮尺1／80）

Fig. 6　住居跡SC01（北東から）

Fig. 7　住居跡SC01（北から）

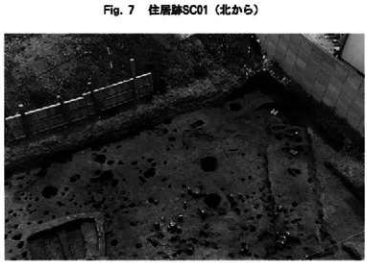


Fig. 8　住居跡SC01（西から）

めのピットが南北側にありこれを屋内土壙としたが、北側の土壙は、北壁の推定ラインより外に出ており、住居跡の大きさやプランなどの再検討が必要である。なお床面には、網点で示したように焼土が中央、南西隅と北壁中央の3か所で認められたが、炉やカマドの痕跡は確認できなかった。

SC02　SC01の東壁より東に106㎝離れて位置する。検出したのは住居跡の南西コーナーで幅32㎝の壁溝が直角に曲がっている。西壁はSC01にほぼ平行しており、その高さは約16㎝である。出土遺物はなく時期判断ができないが、有田遺跡群での壁溝を持つ方形住居跡の調査例を参考にすると、おおよそ弥生時代後期～古墳時代中頃と想定できるだけで、SC01との先後関係までは明らかに出来ない。

出土遺物　後世の攪乱を受けて時期の異なる遺物が混在しているが、計34点を図示した。これらの大半は床面直上ではなく、写真のように床のローム面より約10cm前後浮いた状態であった。一方、15と16の小型丸底壺は、ピット内に人為的に置いたような状況で出土した。有田遺跡群第187次調査SC05でも柱がなくなった後に小型丸底壺を入れた例がある。いまその目的を明らかに出来ないが、住居廃絶後の行為であることから、出土状況の写真を掲載した。

1～9は須恵器。1～4は坏蓋。1は口径12cm。口縁部は直線的でわずかに外に開く。焼成良好で外面は黒灰色、内面は淡灰色。天井部を欠くが、扁平なのであろう。2は口径13.3cm。稜は丸みがあり鈍い。口縁部は微妙な凹凸があり、ほぼ直。色調は薄灰色、胎土にわずかに砂粒を含んでいる。3は口径14.8cm、口縁部と天井部の境にはほとんど稜がない。口縁部端は丸みがあり、内面の段も鈍い。口縁部は横ナデ、焼成は良好。4は全体が著しく摩滅している。口径13.5cm、器高5cm。胎土に粗い石英砂粒を含んでおり焼成は良くない。内外面とも黄色味を帯びた灰色を呈する。天井部のヘラ切りは約1／3を占め、ロクロ回転は右回転。(時計回り)。5は坏身。たちあがり端を欠いているがほぼ直に延びる。受部径は13.2cm。底部はやや扁平で、ヘラ

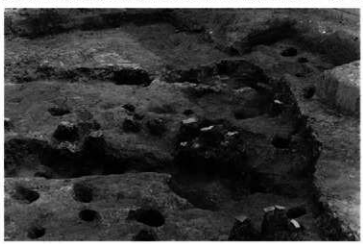


Fig. 9　住居跡SC01遺物出土状況

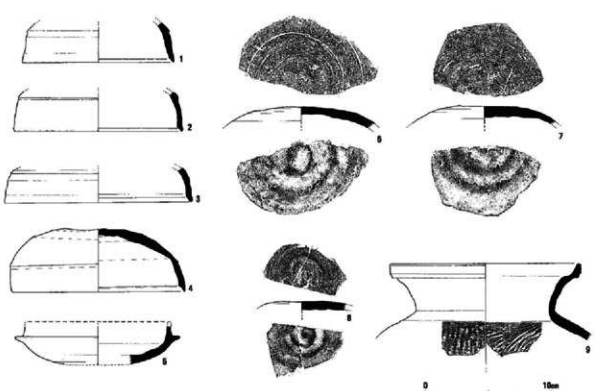


Fig. 10　住居跡SC01の遺物（縮尺1／3）

削りは約1／2を占め、その幅は狭い。胎土緻密であるが焼成は特に良好ではない。６～８は細片のために蓋、身を判断できないが、坏蓋の天井部として図示した。６は扁平な天井部で削りの後にナデている。内外面とも濃灰色。７の天井部も扁平で、時計回りのヘラ削り。焼成時にやや変形している。８の天井部は逆時計回りのケズリでやや粗雑。焼成は悪く、軟質になっている。９は口径15.1cmの小型甕。直線的に外反する頸部にほぼ直立する口縁部が付く。胴部外面は格子叩き後に横ナデを加え消している。

10～33は土師器　10は手捏ね土器。口径3.8cm、器高3.4cm。底部は横にナデて小さな底部となっている。11は口径9.2cm、底径4.9cm、器高4.9cmの鉢。器面は手捏ね状に凹凸が目立つ。口縁部は先細く、底部も体部に比べ薄手の作りである。内面底部近くは、指押さえ痕。胎土に砂粒を多く含んでいるが焼成は良い。外面にU字形の黒斑がある。12は鉢の小片。口径13cm、口縁端部は断面細丸。外面は横ナデ調整、暗褐色を呈する。13は口径16.6cmの丸底鉢。器壁は底部より口縁部に向かって次第に厚みを増し、口縁上面は小さな平坦面を作る。外面の調整は押さえ気味に横ナデしている。内面は左上がりの細かなハケ目調整。内面底部近くは、粗い削り調整。14は口径16.6cm、器高５cm。高坏の坏部に似た器形。体部の中位よりやや上で緩やかに外反して開く。外面は摩滅して調整不明、内面は横ハケ目調整。胎土に砂粒多く含む。外面は暗褐色。15、16は小型丸底壺。15はSP05出土。写真のように口縁部を上にしてピットの中程から出土した。口縁部の一部を欠いているが、ほぼ完形。口径7.9cm、

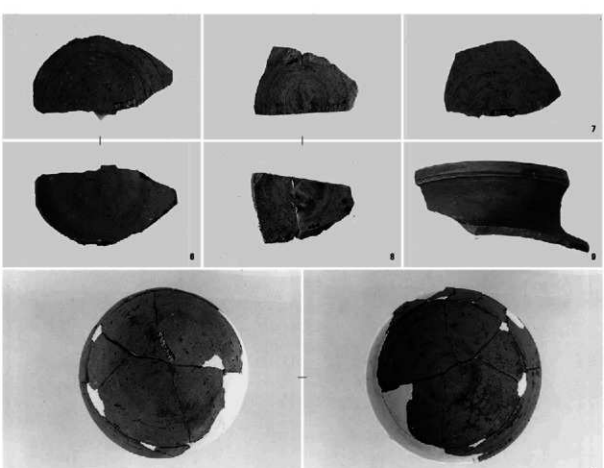


Fig. 11　住居跡SC01の遺物

器高9.2cm。胴部最大幅9.4cm。砂粒の多い胎土であるが焼成は良好。胴部の張りは中位にあり、口縁部はわずかに外傾しながら直線的に延び、端部は細丸い断面におさめている。胴部内面は黒色粘質土を呈し、底部付近はナデ回すようにして削り上げている。外面はハケ目調整で、口縁部はナデを加えている。16はSP04出土。口径8.7cm、器高9.6cmの小型丸底壺。器高に対し胴部の張りが強く最大幅は10cm。直線的に外反して延びる口縁部の内側は強く横ナデして少し凹んでいる。丸底付近に煤が付着している。

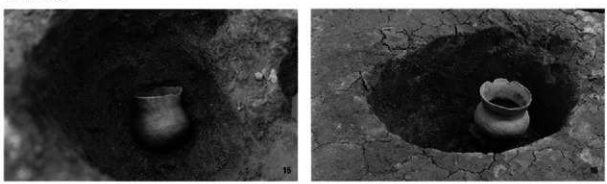


Fig. 12　土器出土状況

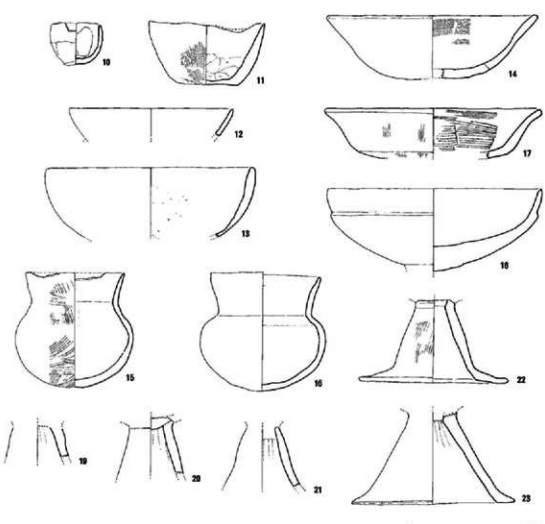


Fig. 13　住居跡SC01の遺物（縮尺1／3）

17～23は高坏。17は坏部の破片。厚みのある器壁である。口径17㎝、坏部高は約4.1㎝。胎土に砂粒は含んでいないが密ではない。器面の調整は粗密の工具を使い分けている。18は脚部が接合部から欠落し、坏部だけが残る。坏部の口径16.9㎝、器高6.5㎝。胎土に石英砂粒を多量含んでいる。坏部は緩やかに外湾しながら大きく開いており、その2／3程より段が付いて直立気味に延び、口縁部を作っている。内面は磨耗し調整痕不明。外面は横ナデ調整。色調は赤褐色。脚部との接合部は丸く突出している。19は薄黄茶色で器面が脆くなっている。内面にかすかに絞り痕が見られる。20は精良土に近い胎土で、明茶色を呈する。脚柱部には膨らみはないが、23のように大きく開かない。坏部の内底が残っている。21は脚柱部のみの破片。上方にやや膨らみがある。砂粒を含まない精良土が用いられており、焼成も良い。外面はヘラ状工具で上下にナデている。22は高坏坏部の接合部より分離している。焼成良好で全面が黄褐色。胎土の砂粒は多くない。脚柱部はやや膨らみがあり、脚裾部は、強く屈曲し水平に近い。脚柱部外面は縦ハケ目調整。坏部は挿入接合したようである。脚裾部径11.8㎝、脚高

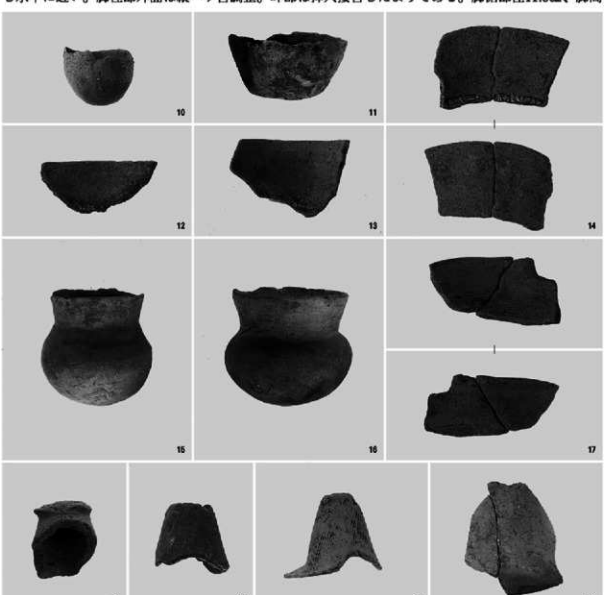


Fig. 14　住居跡SC01の遺物

8.6cm。23は2とは大きく異なり、脚柱はハ字形に直線的に大きく開き、水平な脚裾が付く。脚裾部径12.9cm。焼成は良好で、内面は赤褐色、外面は暗褐色。内面上部には絞り痕。

24～33は甕。24は口径12.6cm。口縁部は屈曲しないで、わずかに湾曲して立つ。器面は全体に摩滅し調整痕を認めることが出来ない。茶色を呈し、胎土に極小砂粒を含む。25は焼成良好。屈曲部内面に明瞭な稜を持ち、口縁部との接合がよく分かる。胴部外面はハケ目調整、口縁部は内外面とも横ナデ調整。26は底部と縁1／2を欠いている。胴部は中位に最大径がある整った器形をしている。口径14cm、胴部最大径19cm。縦長楕円形の胴部内面は、縦のヘラ削りで上方は左斜行となる。外面は縦ハケ目調整、口縁部は横ナデを加える。内外面とも暗褐色で外面には煤が付着している。27は口径17.1cm、張りの弱い胴部に、く字形の口縁部が付く。内外面とも茶色、内面は右斜行のケズリ痕。外面は摩滅し調整痕不明。28は大きめの胴部に、上方に短く延びる口縁部が付く。口径15.7cm。外面は粗い斜めのタタキ痕、器面内側には段になった粘土接合痕を2か所で見ることが出来る。色調は内面が黒褐色、外面が赤褐色を呈する。29は口縁部6cm弱の小破片。口径14.3cmに復元した。口縁端部は方形断面で、外傾する面に2条の細い沈線が巡っている。30は口縁部破片で口径16.5cmに復元出来た。色

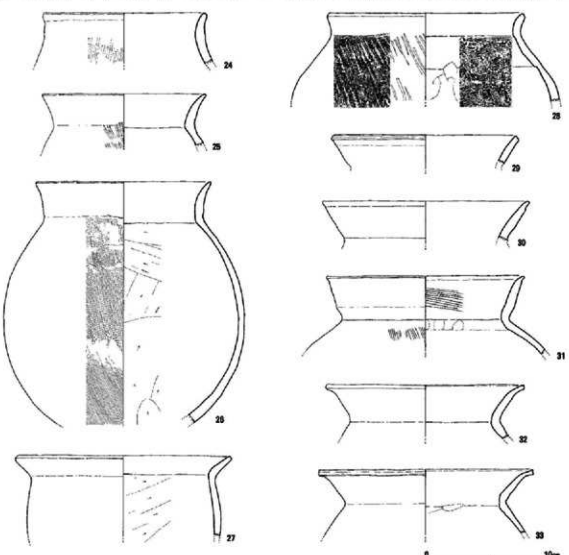


Fig. 15　住居跡SC01の遺物（縮尺1／3）

調は暗赤褐色で屈曲部外面に煤が付着している。31は口径15.7cm、ベッド上からの出土。胴部上半から口縁部の破片。く字形に外反する口縁部は微妙な凹凸があり、端部は小さく摘み出している。胎土に多くの砂粒が混入している。屈曲部内面は横に指押さえを繰り返している。色調は口縁部外面が黒灰色、胴部が暗褐色。32は口径15.6cm、33と同じような口縁部であるが、端部の屈曲が弱い。焼成は良く、内外面とも明茶色。胎土に砂粒を含んでおり精良土ではない。33は口径170cm。屈曲部内面は

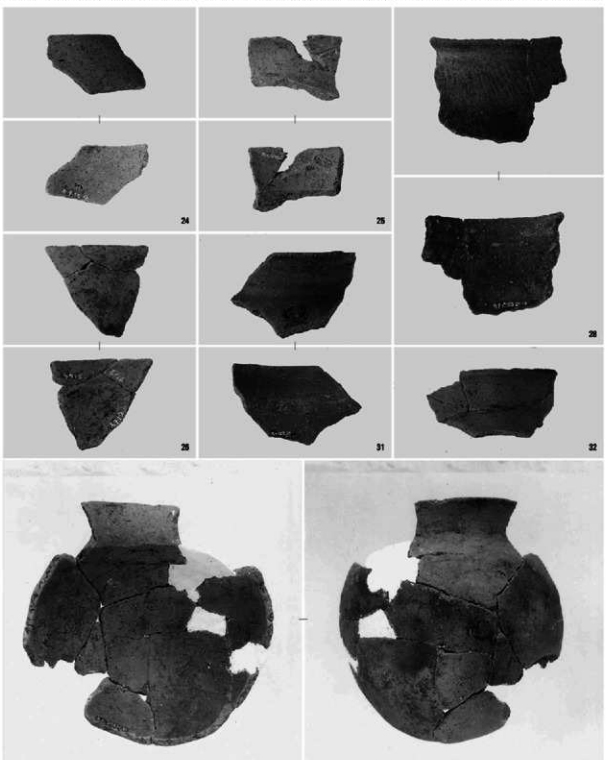


Fig. 16　住居跡SC01の遺物

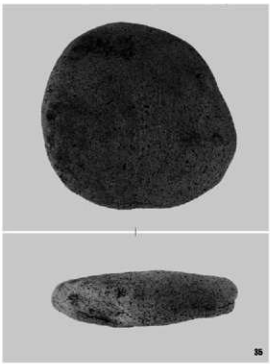


Fig. 17　住居跡SC01の遺物

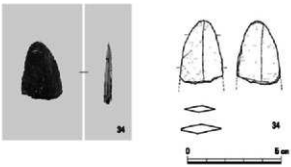


Fig. 18　住居跡SC01の遺物（縮尺1/2）

ヘラ状工具で横にナデており明瞭な稜を作らない。口縁端部が特徴的で上方に小さく突出する。器面は摩滅が激しく調整痕不明。砂粒を多く含んだ胎土で焼成は良くない。

石　器　34は磨製石剣の切先。住居跡埋土より出土。現長3.3cm、幅2.1cm、厚さ0.45cm。先端は丸みがあり、鏑も中央から外れている。両面とも研磨痕が見られるが一定方向ではない。結晶片岩か。35は扁平な玄武岩。楕円形で9.8cm×10.5cm、厚さ2.8cm。全体が風化磨耗しており積極的に石器と断定できる痕跡はない。

小　結

昭和53年当時は、国道202号線バイパスより北側での調査例は第3次調査の1例しかなく、有田・小田部台地北部ではどのような遺跡が展開しているのか関心を集めた。しかし200㎡に満たない狭い面積であったために、遺構を検出してもその一部に過ぎないので遺跡の全貌把握は出来ない、むしろ遺跡の破壊に繋がるのではないかという危惧も確かにあった。これまで記したように2軒の竪穴住居跡を検出し、有田・小田部台地の北部にも集落が営まれていた事を確認出来た。重点地区を設定し小規模開発でもチェックして調査を積み重ね、将来的に遺跡全体を捉えるという文化課方針が間違いでなく、また大事であることを証明した。これは調査成果以上に大きく、また自信となり、有田遺跡群では、その後の本格的な取り組みに繋がった事を特記しておきたい。

ところで竪穴住居跡SC01は、上部が大きく削平されていたが、壁やベッドが残り、その規模を推測できた。しかし現代の家屋建て替えなどで住居跡埋土が部分的に攪乱されており、実測した遺物には弥生時代の磨製石剣や奈良時代の土器など新旧の遺物が含まれている。またほとんどの遺物が破片で床面より浮いており、住居跡使用時の遺物ではなく埋没時に入り込んだ可能性が強い。ピットに置いたような小型丸底壺は、そのピットが主柱穴と考えられることから明らかに廃絶後の遺物である。従って図示した遺物は、住居使用後時期を示していることになり、方形プランで4本柱、カマドを持たないなど住居跡の所見とを検討すると、おおよそ5世紀後半ごろと推測できよう。

本調査地が位置する台地突出部での調査は、平成17年度末までに12地点を数え、第15、67、114、152、172次などで古墳時代の竪穴住居跡が発掘されている。これらは突出部西側にやや偏在しているが、住居跡は古墳時代の全期間に渡って突出部のほぼ全面に営まれていたことになる。集落の形成過程と変遷、集落構造などの解明は、なお一層の調査数が必要であるが、有田遺跡群全体としてはかなりの考古学的資料を蓄積しており、そろそろ成果をまとめる時期であろう。

第10次調査

1．調査に至るまで

広渡保氏より昭和53年３月31日付けで西区小田部２丁目57の事前審査申請書が提出された。事前審査班では、年度が変わった４月８日に試掘を行い、遺跡の存在を確認した。第９、11次調査の２地点も、ほぼ同時に調査が必要となったことから、第９次を横山、第10次を力武、第11次を飛高が分担することにし、測量や遺構実測など必要に応じて３人が集合し、発掘作業の効率化と調査期間の短縮を図った。調査は５月26日に発掘道具を搬入し、発掘作業員との打ち合わせ、安全教育、近隣住民への挨拶などを済ませ５月30日より発掘作業に着手した。本調査地は、住宅の解体時に残っていた廃材の撤去を広渡氏に協力を求め、合わせて表土剥ぎの廃土も持ち出し処分することにした。この年は後に「福岡大砂漠」と呼ばれる未曾有の大渇水に見舞われた。前年から少雨傾向にあり、５月20日より時間給水に入った。梅雨期を前にしても一向に降雨の気配はなく、６月１日からはとうとう５時間給水という事態になった。地面は完全に乾ききり、困難な遺構検出を強いられた。雨樋の下に遺物コンテナを何箱も用意し、いつ降るか知れない雨を期待した。うまく貯水しても発掘区に散水するには、貴重な水道水を無駄使いしているようで通行人の目がつい気になり勇気が必要だった。こんな思わぬ経験をして発掘作業は６月14日にどうにか終了する事が出来た。断水はその後も続き、給水制限の全面解除は翌年の３月25日、なんと287日間に及ぶ渇水都市であった。

2．調査地の位置と立地

本調査地は、有田・小田部台地の最も東側の突出部にあり、小字名では「立石」に属している。現在は「今宿新道」と呼ばれる国道202号線バイパスが東約0.6kmの原交差点から有田・小田部台地を東西に横断し、西の前原市、唐津市に通じているが、旧道は同じ原交差点から本調査地の南に接して通り、小田部集落の南端を北に折れ、さらに西の室見川を渡り福重集落に通じていた。有田・小田部台地の周縁部と台地中央部との標高は約７mの差があることから、旧道は台地を一部切り通して緩やかな登り坂となっている。本調査地はちょうど切り通し部に当たり道路面より約1.5m程高い。その後の調査でこの旧道の両側で側溝が見つかり、律令期の官道に推定されているが、当時は周辺での調査

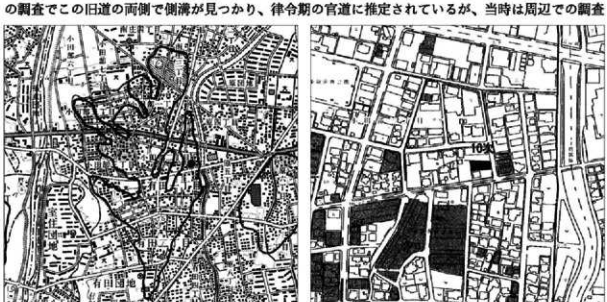


Fig. 1　調査位置図（縮尺1／25,000　1／5,000）

例はなく、どのような遺構が確認できるのか予想も出来なかった。旧地形図によると「立石」の突出部は、基部幅は約250mでほぼ北に向かって派生しており、その長さは約600mを測る。本調査地はその西側縁部に位置し、次ぎに調査を実施した第13次調査地は、その縁部の延長線上にある。有田・小田部台地8か所の突出部の中では、今でも最も調査例が少なく、解明が遅れている地区でもある。

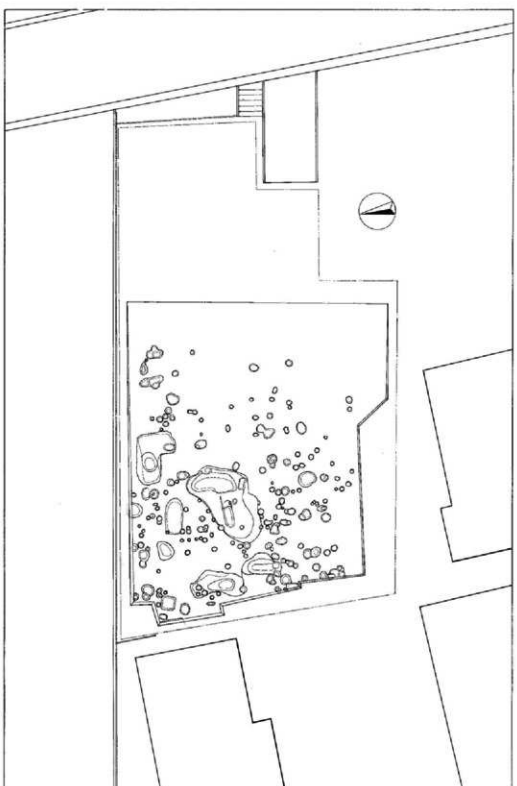


Fig. 2　調査区平面図（縮尺1／200）

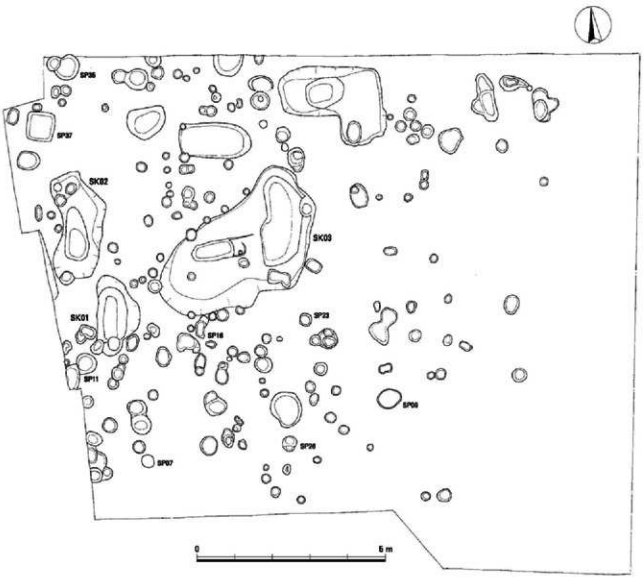


Fig. 3　遺構全体図（縮尺1／100）

Fig. 4　発掘作業風景（南から）

3．遺構と遺物

調査地は菜子工場に隣接した東西約28m、南北約14mの長方形で、表土を除去すると赤橙色の烏栖ロームとなる。標高は約8mで、この地山面は西にわずかに傾き、この傾斜に沿って黒みを帯びた褐色土が地山を覆っている。遺構の残りは地山が深くなる西寄り程良好である。発掘区中央より東に向かって遺構は次第に希薄になり、西端より約14mでまったく認める事が出来ない。おそらく突出部尾根線に近づくことから、すでに削平されたのであろう。検出した遺構は、大小の不整形土壙とピットなどである。掘立柱建物跡や竪穴住居跡の柱穴、あるいは墓などの可能性を想定し、遺構実測図をも

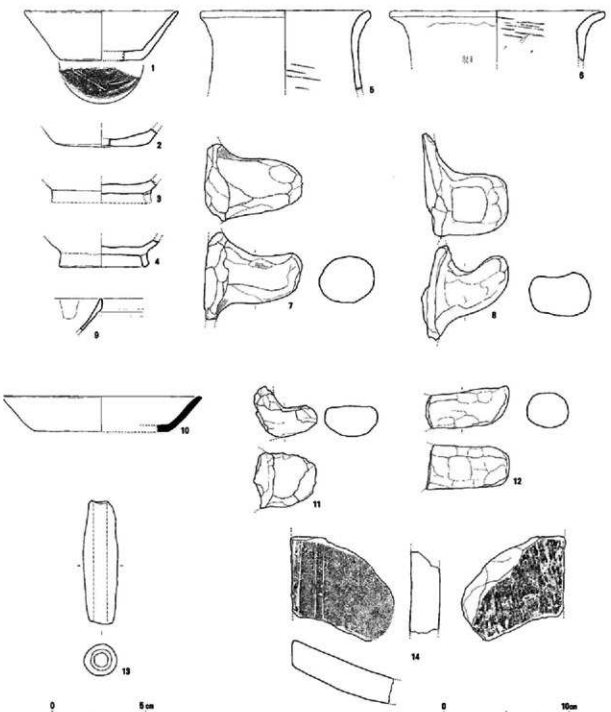


Fig. 5　表土層の遺物（縮尺1／2　1／3）

とにその配置や掘り方を検討したが、明確な遺構として捉える事は出来なかった。ここでは遺物数が多く、かつ大きめの土壙について図示、報告するが、その前に遺構検出時の出土遺物について記す。

表土層の遺物

ここでは攪乱土掘り下げ時に出土した遺物（1～9）と、地山直上に薄く覆っている黒みを帯びた褐色土より出土した遺物（10～14）を一応区別して図示した。しかし、先述したように家屋解体時にかなり攪乱を受けていることもあって、古代から中世の遺物が混在し時期的に明瞭な区別は出来ない。

1～8は土師器坏、口径13cm、底径7cm、器高4.2cm。丁寧な調整で滑らかな器面である。口縁部は直線的に大きく開き、底径の約2倍近い口径である。2は丸みのある底部の坏。底径8cmで精良土に近い胎土を用いている。全体に磨耗し調整痕不明。3は貼り付け高台の一部が残っていることから、器形が分かる。復元高台径8.4cm。焼成良好で明橙色。内底は中央が少し盛り上がっている。4は高台付き坏。全体に磨耗が進み、器面の調整痕は不明。高台は完全に残り、ハ字形に開いて貼り付けている。高台径7.6cm。内外面とも明茶色で、焼成良好。胎土も緻密な精良土である。

5と6は甕。5は口径14.6cm、口縁部は肥厚し、緩くわずかに湾曲してそのまま口縁部となる。内面に不明瞭な左斜行のキズがある。削りであろう。6は口径18.4cm、口縁部は内面に明瞭な稜を持って強く屈曲する。体部外面には縦の条痕、内面には右斜行のナデ上げ痕が見られる。胎土は精良土ではないが粗くはない。7、8は甑の把手把手。7は分厚い作りで、湾曲は弱い。断面は円に近い楕円形で、4.7cm×3.9cm。8は強く屈曲し、その上面は隅丸方形状に窪んでいる。器体とは挿入接合している。9は玉縁口縁の白磁碗。2cmの小片のために口径不明。胎土は灰白色、内面に釉垂れがあり、全面に大きめの貫入が入る。玉縁は薄い。

10は須恵器坏。口径16cm、底径10.6cm、器高2.8cm。器面は横ナデ、焼成良好で灰色を呈する。11、12は把手。11は小型で、ほぼ水平に出ている。断面は上面に幅広く平坦面を作っている。12は水平な把手。断面3.6cm×3.0cmとほぼ円形断面で、長さ7cmの棒状となっている。

13は管状土錘。長さ6.6cm、中央最大幅1.7cm、孔径7mm。焼成は良く明茶色。

14は平瓦の小片。割れ口も摩滅が進んでいる。わずかに砂粒を含んだ胎土は薄い灰白色で断面内側は灰色が濃くなる。厚さ2.5cm。凹面は明瞭でないが布目か。凸面は縄目の叩き。

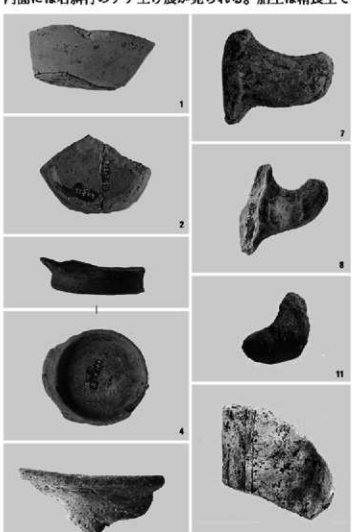


Fig. 6　表土層の遺物

土壙SK

大きめな落ち込みで実測可能な遺物を出土したものについて土壙SK番号を付けた。

SK01　発掘区の西寄りで検出した。長楕円形平面プランで、北短辺側から西長辺側に浅い傾斜面がある。また南短辺側は3個のピットが重なっている。大きさは長軸210cm、短軸115cmで、深さは59cmである。壙底は中央部が深く、丸みがある。主軸方位はN-10°-w。

出土遺物　15は須恵器の坏蓋。口径9.6cm、器高2.8cm。丸みのある天井部からそのまま口縁部となる。かえりは獣爪のように鋭く短い。天井部のヘラ削りは1／3程を占める。ロクロ回転不明。焼成は完全ではなく、内面は灰茶色、外面は黒みを増す。16は須恵器の坏身。口径11cm、受部径12.8cm、器高3.4cm。受部は水平ではなくやや上向きに突出。たちあがりは厚みがあり短い。

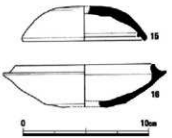


Fig. 7　土壙SK01の遺物（縮尺1／3）

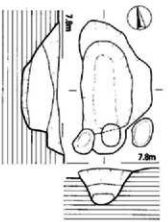


Fig. 8　土壙SK01（縮尺1／60）

SK02　SK01の北側に接するように並んでいる。平面は逆く字形の長楕円形。長軸280cm、短軸105cm。壙底は平坦でなく、中央より南寄りに一段と深く、58cmを測る。北側端部は数個のピットと重なっているが切り合いは不明。

出土遺物　須恵器3点と土師器1点の計4点を図示した。17は坏蓋。1／10の破片。口径13.2cm、口縁部と天井部の境には明瞭な境はないが、わずかに屈曲している。焼成良好で薄灰色を呈する。ロクロ回転不明。18は坏身。口径11cm、受部径13cm。19より器壁が薄い作りで、特に受部は細丸となっている。焼成良好。19は坏身。口径11.7cm、受部径14cm。受部とたちあがりは18とよく類似する。底部は深みがある。底部外面は灰を被っていることからすると蓋か。焼成時に変形している。20は土師器の高坏。坏部と脚部の破片。脚柱部は大きく開き、膨らみはない。外面はヘラ状工具で上下のナデ調整。胎土は精良土を用いている。

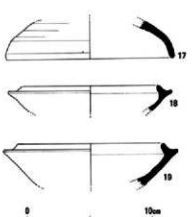


Fig. 9　土壙SK02の遺物（縮尺1／3）

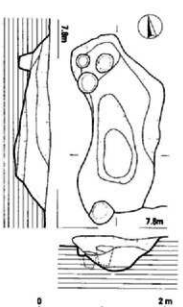


Fig. 10　土壙SK02（縮尺1／60）

SK03　発掘区のほぼ中央にあり、最も大きな土壙である。平面形は東西の長軸は425cm。東側の短軸は325cm。壙底には長軸をL字形状に対した長楕円形の落ち込みある。平面プランが不整形であることから、いくつかの土壙との重複も考えたが、埋土の黒褐色土は他の土壙やピットと同様で、切り合いを区別することは困難だった。最も深いところで33cmである。

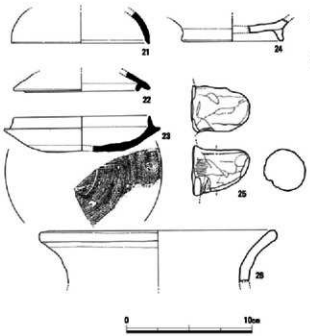


Fig. 11　土壙SK03の遺物（縮尺1／3）

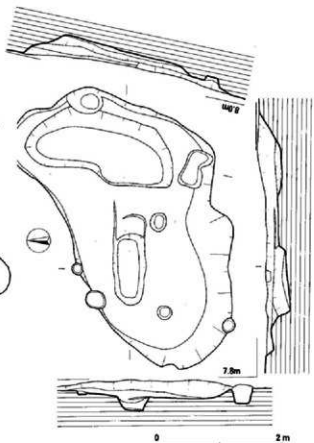


Fig. 12　土壙SK03（縮尺1／60）

出土遺物　21は須恵器の坏蓋。口径11cm。口縁部から湾曲してそのまま天井部となっている。境はなく、口縁部端部も断面細丸で、内面に段はない。天井部のヘラ削りは見られない。胎土に2㎜大の砂粒を含む。ロクロ回転不明。22は須恵器の坏蓋。かえりは細く短い。天井部端よりわずかに出る。かえり部径9cm、焼成良好で灰色。胎土はやや砂粒が多い。23は須恵器の坏身。口径11.6cm、受部径13.3cm、器高3cm、受部は小さく突出し、立ち上がりは低い。底部は浅く、底面に3本沈線のヘラ記号がある。底部のヘラ削りは約1／3を占める。胎土は密でなく、器面は灰色を呈する。24は土師器の高台付き坏身。ハ字形に開いた高台は、その中央部でわずかに湾曲している。高台径8cm。高台は外底縁に貼り付けているので、体部との境はない。精良土の胎土で焼成普通。明茶色を呈する。底部内外面ともナデ調整。25は土師器の把手。ほとんど屈曲がなく水平に出ている。断面は正円に近く径3.5cm。上面に細かなハケ目が残る。26は土師器の甕。口径20.2cm、緩やかに湾曲した口縁部で、端部断面は丸い。他の遺物に比べほとんど摩滅していない。胎土にわずかに砂粒を含んでいる。焼成は良く、明茶色を呈する。

ピット出土の遺物　27は口径33cmの土師器甕。肥厚した口縁部は緩く外湾する。外面は横ナデ、内面は粗い横ハケ目で条痕状になっている。器面の色調は褐色、外面は黒みが濃い。胎土には3㎜大の砂粒を含み、粗い。28は土師器の甕で玄海灘式と呼ばれている製塩土器。口径29cm、胴部には張りがなく、口縁部は大きく外湾する。口縁部下方は強く横ナデして幅広の凹線状になる。外面は木目に直交する平行条溝の工具で粗く叩いており、板状工具の小口部を押しつけたように見える。内面は当て具痕であろうが、左斜行の粗いハケ目状になっている。色調は内外茶色で、外面は黒色となっており煤であろう。胎土に砂粒は少ないが、5㎜程の大きめの砂粒を含んでいる。29は弥生土器の甕底部。平底で径9.8cm、外面は灰茶色で横ナデ調整。内面は薄灰茶色、摩滅し砂粒露出している。30は須恵

器の坏蓋。口径12cm、器高3.3cm。口縁部はほぼ直で、その高さは1.3cm。天井部との境は明瞭な稜がない。天井部のヘラ削りは2/3を占める。31は須恵器。口径8.6cm、体部はほぼ直に延びて口縁部となる。体部下半には四本の凹凸がある。さらに台付き部はカキ目。焼成良好で灰色呈する。32は土師器坏の完形品。口径12.4cm、底径7.4cm、器高4.1cm。胎土はわずかに砂粒を含んでいるが精良土。外底はヘラ切り離し。底部は厚みの作りで内底は凹凸がある。33は白磁碗。径16cmの口縁部は、小さく下方に摘み出している。見込の口縁部下1.5cmに細い沈線が巡る。全体に均一の厚さで施釉されている。34は玉縁口縁の白磁碗。口径16.2cm、厚さは7mmの玉縁は、上方に立ち、1.5cmと幅広い。胎土は薄黄白色で、外面下半は露胎。内面は小さな気泡が目立つ。玉縁部には貫入がある。35は4cmの小破片だが、熱変していることから鞴の羽口とした。復元した大きさは、外径8.2cm、内径4.4cm、厚さ1.9cm。器壁は薄茶色で、図上方程熱を受けたのか褐色が濃い。

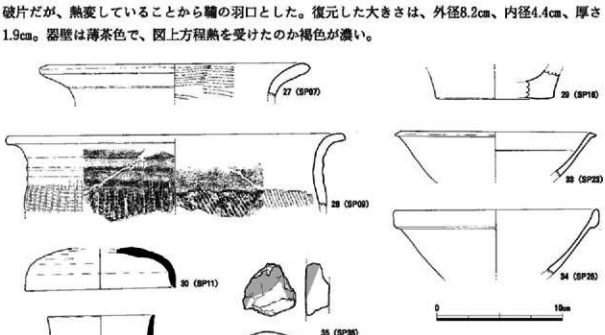


Fig. 13　ピット出土の遺物（縮尺1/3）

4．小　結

有田、小田部台地東側での最初の調査であったことから、遺構検出だけでなく合わせて旧地形の復元、そして遺構の保存状況の確認を調査目的とした。残念ながらピットと土壙数基のみで、明確な遺構は少なかった。しかし西側に傾斜する地山やその斜面に形成された黒褐色土層、さらには遺構の分布などから、予想した旧地形と矛盾しないことが分かった。その後の調査で台地を東西に横断する律令時代の官道に面していることが判明してきた。残念ながら第3、124、179、219次調査のように道路側溝と思われるものはないが、確かに同時期の遺物が出土しており、官道との関連を推測させる。特に28の玄海灘式製塩土器は、第39次調査でも出土し注目される。また小破片ながら鞴の羽口や土錘は、台地上やこの周辺での生産や生業を考える上で貴重な資料であり、その後の調査に期待を感じさせる遺物であった。

第11次調査

1．調査に至るまで

昭和53年４月11日、坂本七五男氏より小田部３丁目４の開発事前審査申請書が文化課に提出（審査番号53－171）された。坂本氏は、建設工事までに期間的に余裕がなく緊急の対応を強く要望された。文化課では、開発面積が狭いこともあって発掘調査を前提に試掘調査を５月26日に実施した。パワーシャベルでトレンチを開けたところ、数個のピットが現れたことからそのまま拡張して本調査にかかった。当該地は交通量の多い国道とその歩道に面していることから、安全対策を考えながら慎重に発掘作業を進めることにした。

Fig. 1　発掘作業風景（西から）

2．調査地の位置と立地

有田、小田部台地の西側を博多湾に向かって北流する室見川には、春になると産卵のためにシラウオが上がって来る。四季ごとに表情を変える豊かな川である。車でこの川に架かる国道202号線小田部大橋を渡り、福岡の中心部天神方向に進むと約400m程で右手に小さな宝満宮の杜がある。わずかな坂が有田、小田部台地に登っていることを実感させる。すぐ正面に横断橋が見え、その右階段手前が本調査地である。第９次調査地と同じ突出部であるが、第９次調査地が東側縁部であったのに対し、本調査地は反対側の西側縁部に位置し、北西より入り込んだ谷の最深部に面している。この周辺では前年の第４次調査では、多数のピットや溝、土壙などを検出し、古代から中世末の集落を確認している。表面採集の黒曜石製台形様石器は、有田、小田部台地に旧石器時代遺跡の存在を示すものであった。また68棟もの掘立柱建物跡の中には、製鉄工房も認められ、集落の存続期間や生業を知る貴重な調査成果を上げている。

Fig. 2　調査地位置図（縮尺 1／25,000　1／5,000）

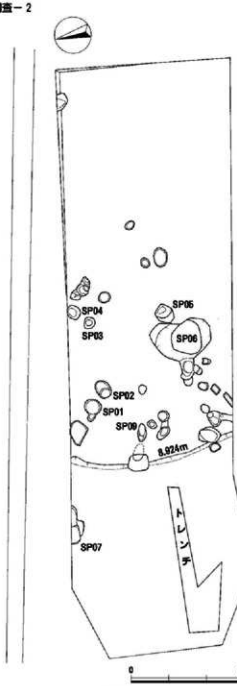


Fig. 3　遺構全体図（縮尺1／100）

3．遺構と遺物

対象面積に合わせて幅約4.5m、長さ15.5mの発掘区を設定し、パワーシャベルで表土を剥いだ。地山の鳥栖ロームは、予想通りに西に傾き、西寄りでは約45cmの段落ちがある。これより西側では時期の確定は出来ないが、水田化していたようである。検出した遺構は、ピットや不整形プランの土壙などである。

出土遺物

遺構検出時やピットから出土した遺物のうち7点の破片が実測可能であった。1はSP06出土の素焼き土物。口縁部は上面に粘土紐を重ねてL字形となっている。内面はロクロ痕の凹凸が目立つが、外面は滑らかである。口径23.4cm。2～6は西寄りの段落ち部からの出土。2、3は土師器皿。2は口径7.7cm、底径5.8cm、器高9mm。底部は糸切り離し後にナデ調整。3の底部は糸切り離しで、底径8cm。4は土師器の坏。口径14cm、底径8cm、器高2.8cm。器壁の薄い作りで、底部は糸切り離しか。5は白磁。口径12.6cmで器種は皿か。胎土は練り不足なのか一部が中空になっている。釉は均一に掛かり、貫入はない。6は青磁碗。高台径を4cmで復元図化したが、もう一回り大きいか。釉は灰緑色で大きな貫入がある。高台内は露胎。胎土は薄灰色で緻密。内底の器壁は分厚い。7はSP03出土の磨製石鏃。長さ4cm、暗褐色の粘板岩。軟質であり風化も進んでいることから側縁は両面からの細かく剥離しているが、本来は研磨され鋭利になっていたのだろう。鏃はなく、厚さは2.5mmと研磨して薄くなっている。

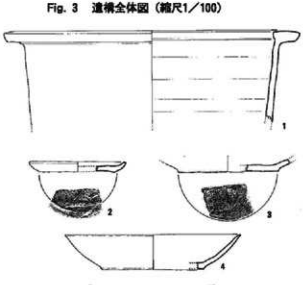


Fig. 4　出土遺物（縮尺1／2　1／3）

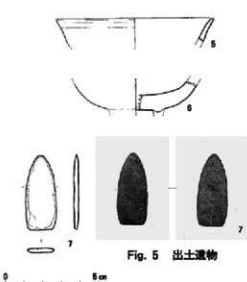


Fig. 5　出土遺物

第12次調査

1．調査に至るまで

昭和53年４月27日付けで松尾信夫氏より有田１丁目37－11の埋蔵文化財事前審査が文化課に提出（審査番号53－175）された。当該地は区画整理事業に伴って、昭和43年に九州大学文学部考古学研究室が発掘調査した13街区の第２次調査地に当たっている。当時の発掘がトレンチ調査で、今回の開発地の一部に過ぎなかったことから、全面発掘の必要を松尾氏に説明し、発掘調査のための協議を行った。有田遺跡群調査班３人は５月下旬から第９～11次調査を分担していたが、第11次調査が６月初めで終了する目処が立ち、松尾氏との協議も整ったことから６月６日より引き続いて発掘調査を開始することにした。

Fig. 1　調査区（北西から）

2．調査地の位置と立地

有田、小田部台地で標高の最も高い場所は「有田二丁目交差点」付近で約13mを測る。台地はここを起点にして北北東、北、北北西の３方向に派生している。北に延びた突出部は起点から北約180m付近で強く括れており、さらに突出部がいくつかに分かれヤツデ状の地形となっている。最高所周辺は南北約400m、東西約150mに渡って平坦部が広がっていることもあって家屋や高層住宅、各種店舗

Fig. 2　「有田古代遺跡」石碑（有田西公園）

Fig. 3　調査地位置図（縮尺 1／25,000　1／5,000）

などが集中し、その建設工事に伴って発掘調査件数が最も多い場所である。この一帯の歴史的全容解明が大いに進んでいるが、それと引き替えに有田遺跡群の核心部の遺構が確実に姿を消しつつある。

本調査地はこの有田二丁目交差点より西約170mに位置し、区画整理事業時の発掘調査記念碑「有田古代遺跡」が立つ有田西公園は道路を挟んだ北側にある。区画整理によって道路部は掘り下げられ、住宅地は西と南に階段状に区画されていることから、旧地形は相当な改変を受けていると思われた。しかしこれまで実施した第39、57、95、109、111次など周辺調査では、上部は削平を受けているものの予想に反し弥生時代初め頃から中世に至る各種遺構を検出している。

3．遺構と遺物

本調査当時は周辺での調査例はなく、まず敷地全面の表土を剥ぎ九州大学の調査報告書に掲載されている遺構の確認を行った。その結果、古墳時代の竪穴住居跡や炉跡などがほぼ当時の形状で現れたので、これらの遺構を中心にして遺構の広がりを探した。この結果、図のように掘立柱建物跡や土壙などを検出した。

Fig. 4　周辺遺構図（縮尺1／400）

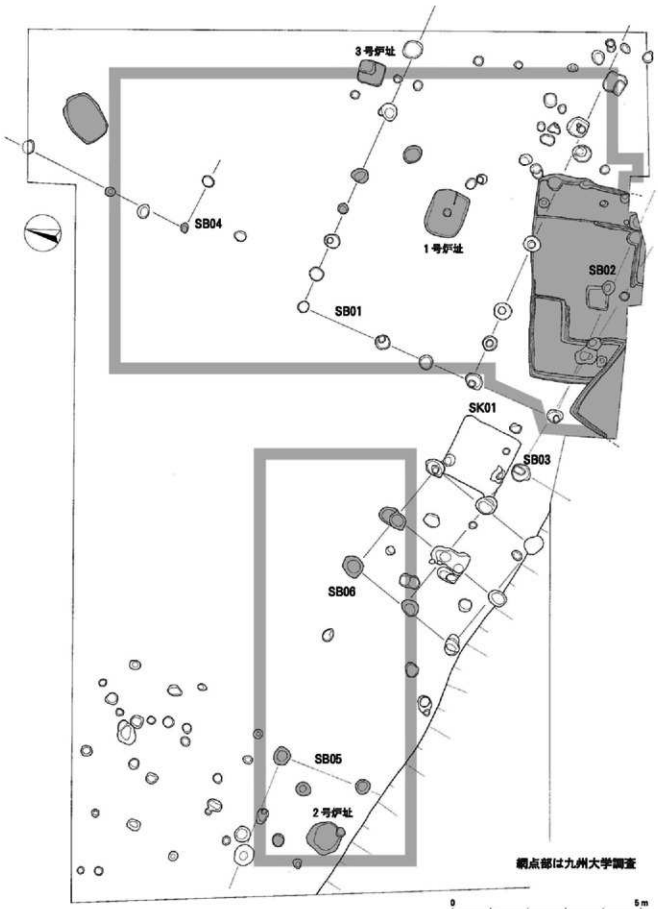


Fig. 5　遺構全体図（縮尺1／100）

掘立柱建物跡SB

SB01　発掘区中央から南西隅にかけて検出した。図の網点部が昭和43年九州大学によって検出された遺構である。東柱側列の柱穴が欠けており、さらに東側の発掘区外に延びている可能性もあるが、梁行4間7.42m、桁行2間4.97m、面積36.88㎡の規模を想定した。とすると3号炉は建物外に出ているが、1号炉はほぼ中央に位置し、あたかも取り囲むような配置となっている。北、東、南側柱列とも間柱があり、各柱穴間の距離は等間隔ではない。また深さにも統一性がない。約半数の柱穴に柱痕跡が認められた。柱穴からは須恵器や土師器などの遺物が出土したが、いずれも細片で実測出来ず、時代特定が困難であった。九州大学調査の1号炉と3号炉が時代判断の参考となるので、九大報告書より遺構と遺物実測図を転載する。1号炉は隅丸長方形で、長径1.28m、短径0.92m、深さ45cm。北東隅壁の一部が掘り込まれ、多量の炭が見つかっている。3号炉も同じように炭があり壁面は火熱を受けて赤変している。これらの炉内から出土した須恵器の高台付坏と皿の特徴から、奈良時代8世紀頃の炉とされている。

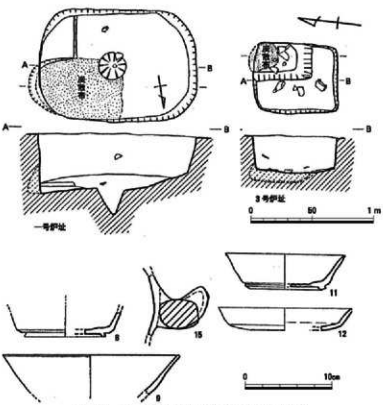


Fig. 6　1、3号炉址と遺物（九州大学調査）

Fig. 7　掘立柱建物SB01（西から）

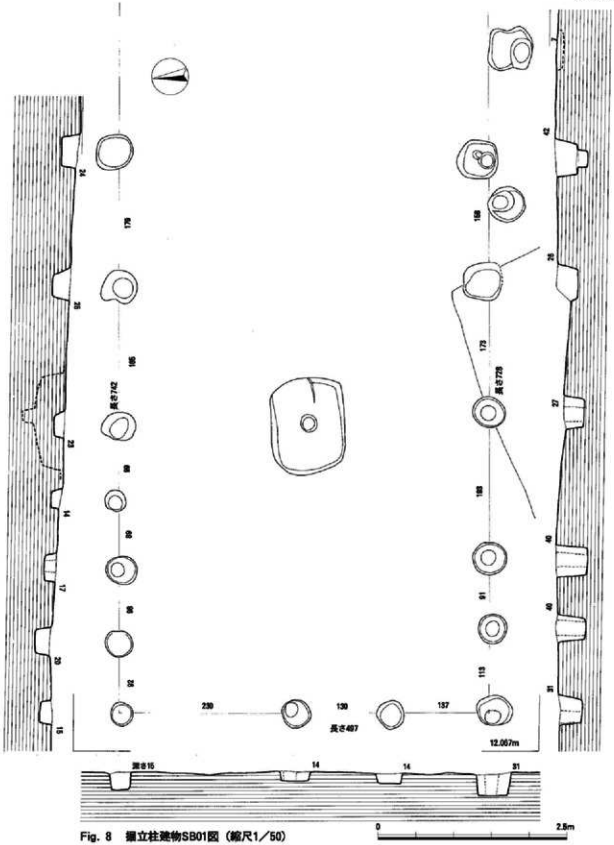


Fig. 8　掘立柱建物SB01図（縮尺1／50）

SB02、03　SB01南側は九州大学調査の竪穴住居跡（第１号竪穴住居址）に重なっている。この住居跡は、長方形プランで床面中央に炉、両短辺側にＬ字形のベッドを非対照的に持っており、出土遺物から古墳時代前期とされている。この住居跡を再精査したところ西壁の外側に２個、そして北壁を切る柱穴１個を新たに検出した。これらと住居跡床面の柱穴を結ぶとＡ、Ｂ２列の柱列となり、それぞれ南側に広がる２棟の建物跡SB02、SB03とした。しかし北側Ａ列の柱方向は、SB01とほぼ一致し、

その庇とも考えられる。有田遺跡群では古代～中世の掘立柱建物跡がほぼ台地の全面で検出されているが、庇をもつ掘立柱建物跡は第51次調査SB01（弥生中期～後期初）、第107次調査SB07（8世紀前半～中頃）、第114次調査SB06（古墳時代？）、第122次調査SB02、3（奈良～平安時代）、第189次調査SB03（7世紀後半以降）など意外と少ない。第189次調査SB03は、梁行4間、桁行6間の身舎に四面庇。早良郡衙の正殿と考えられており、この他の庇を持つ例は、決して特別な建物ではない。本例も1号炉を囲む工房跡とすれば、作業用的な土間式の建物の庇とも想定出来よう。

B柱列はSP01を起点にしてN-107°-Eの主軸建物を想定した。竪穴住居跡の主柱穴と考えられているSP03やA柱列（SB02）のSP02を共有することになり、やや無理があるかも知れないが、発掘区外に延びている可能性も残されており、あえて遺構番号を付した。

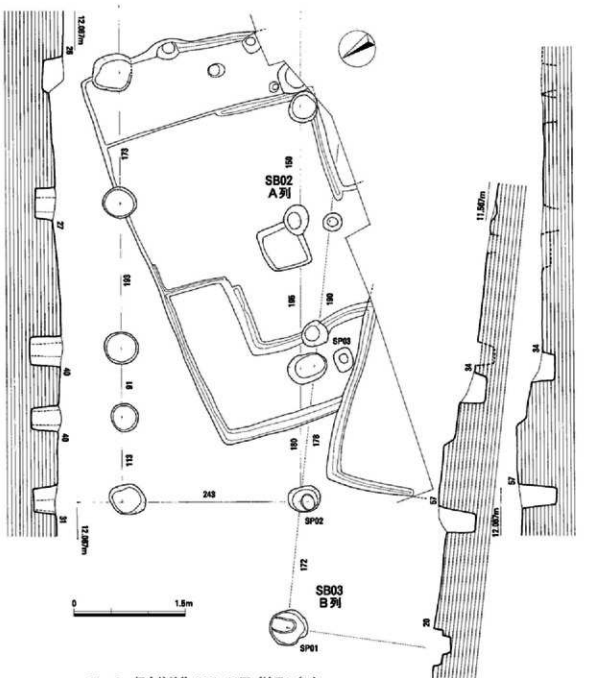


Fig. 9　掘立柱建物SB02、03図（縮尺1／50）

SB04　九州大学報告書によると発掘区の北東隅に土壙と3個のピットが図示されている。この土壙には4号炉址と名付けられているが、1～3号炉と異なり炭や焼土はなく、また出土遺物から弥生中期とされていることから誤植であろう。今回この周囲から新たに数個のピットが見つかり、直角に並ぶことからSB04とした。検出した西側柱は2間で、南寄りに間柱がある。南側柱は間柱のみで間数は不明だが、N-14°-E方位の南北棟と想定した。本発掘区ではSB05付近でピットが集中しているが、無数に散らばっているわけではなく、建物として捉えやすい。ただSB04は各柱穴が小さく、かつ四方の側柱が揃っていないので確定的でない。

SB05　九州大学報告書によると2号炉址周辺のピットの中で径40cm前後、深さ50～60cmの3個は、炉を持つ平地式住居の主柱穴と考えられている。2号炉址は、他の炉址と同様に炭や火熱による赤変が見られ、奈良時代と記されている。今回の調査では、さらに北側にピットの数が増えたので、新たにその配置を検討してSB05とした。現在は梁、桁行とも2間以上の大きさが考えられるが、南側が区画整理以前からの崖になっていることから南北棟ではなく東西棟だったと推測される。

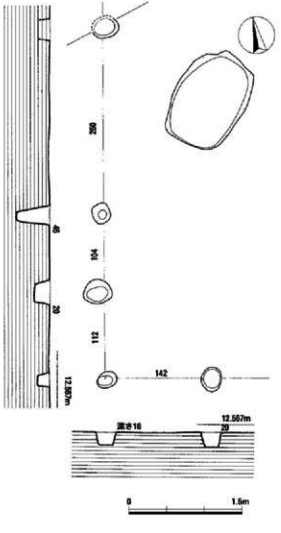


Fig. 10　掘立柱建物SB04図（縮尺1／50）

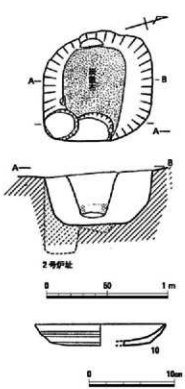


Fig. 11　2号炉址と遺物（九州大学調査）

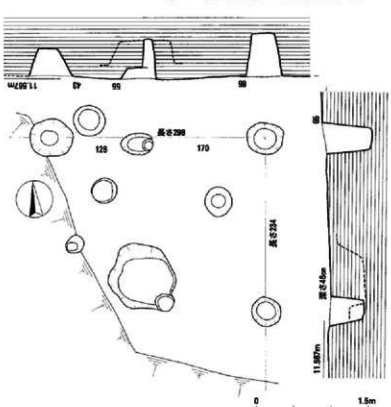


Fig. 12　掘立柱建物SB05図（縮尺1／50）

SB06　SB01の西側約3ｍにあり、土壙SK01の一部を切っている。2間×2間の総柱建物である。主軸方位はN-26°-Eで、他の建物とはやや異なる。四隅柱穴の中心を結ぶとほぼ方形になり、南北側柱が340㎝、東西側柱が324㎝でわずかに南北側柱が長い。各柱穴の平面プランは、正円ではなく南北に長い楕円形である。深さは約55㎝前後で、東側柱だけが不揃いの深さである。

今、2間×2間の総柱建物跡としたが竪穴住居跡の残り具合いから南側にさらに延びていた可能性もある。ただ南崖下に当たる第39調査地とはその間が約6ｍしかなく、現在の比高差からすると約20度の斜面となり、やや無理か。

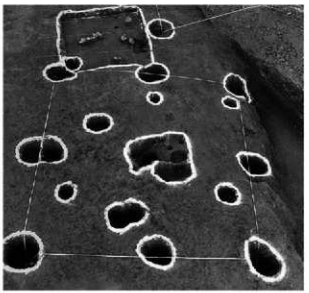


Fig. 13　掘立柱建物SB06（西から）

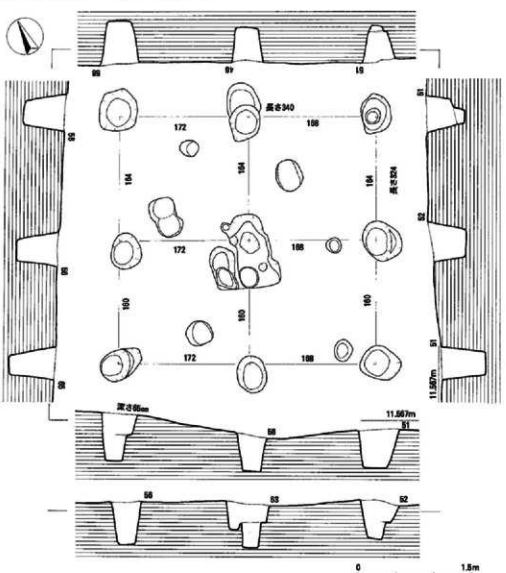


Fig. 14　掘立柱建物SB06図（縮尺1／50）

土壙SK

SK01　SK01は発掘区のほぼ中央南寄りで検出した。SB06で西壁両端が切られているが、ほぼ大きさは復元できる。わずかに四隅が丸みを持つ方形プランで、北辺長171cm、南辺長165cm、東辺長164cm、西辺長163cmを測る。四壁ともほぼ直に掘り込まれており、壁の高さは最も残りのよい西壁で約17cm。平坦な壙底には、1か所に炭化物混じりの焼土が認められた。また南北壁に接してピットがあるが、北壁のピットは埋土上面での観察が不十分であったために、SK01に伴うものか判然としない。周辺調査でもSK01に類似する土壙は見られず。用途を明らかに出来ない。

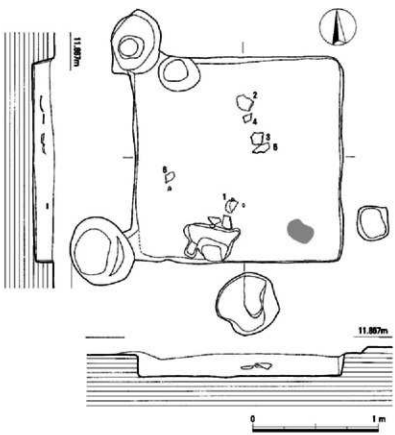


Fig. 15　土壙SK01図（縮尺1／30）

Fig. 16　土壙SK01（北から）

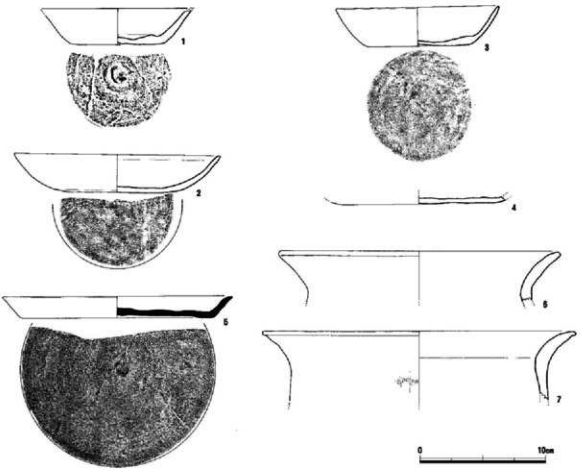


Fig. 17　土壙SK01の遺物（縮尺1／3）

出土遺物

ある程度まとまって出土した遺物については、SK01遺構実測図にその遺物番号を記した。これらの遺物は壙底より約5㎝前後浮いており、互いに接合することはなく、また完形品にもならなかった。

1は壙底南寄りで出土した。土師器坏で、いま口縁部端を欠いているが、口径12.2㎝に復元した。底径7.6㎝、器高2.9㎝。底部はロクロ回転の凹凸が目立ち、外底には渦状痕となっている。体部の延びは直線的で、口縁部はわずかに開き気味。内面には煤状に黒色粒子が点々と付着している。全面に磨耗が進み、器面の調整痕は不明。精良土で赤褐色を呈する。2は口径13㎝の土師器坏。壙底の北寄りで出土した。底径7.6㎝、器高3.1㎝。胎土にわずかに砂粒を含んでいるが精良土を用いている。全体に摩滅し調整痕は観察できないが、焼成は良好で黄褐色。外底中央はやや窪んでおり周縁は丸みがある。体部はわずかに内湾気味に延び、細丸の口縁部となる。底部は整った円形ではない。3は土師器皿。口径16.4㎝、器高3㎝で、底部は丸みがあり、そのままの湾曲で延び口縁部となる。器壁の薄い作りで、外底は板目状の圧痕が残る。色調は黄褐色で口縁部外面は黒褐色。内面は淡褐色。摩滅と風化で脆弱になっている。4は土師器皿の底部、口縁部は失われている。2の南に接するようにして出土した。胎土は精良土で焼成は普通。全体に摩滅が激しいが、底面はロクロ回転で微妙な凹凸がある。外底は渦状痕があり、周縁は丸みがあり、体部に移行している。5は須恵器の皿。壙底のほぼ中央で出土した。口径18.3㎝、底径15.4㎝、器高1.8㎝。体部は内外面とも横ナデし口縁部はわずかに外に開く。外底はヘラナデ、中央部は削りで渦巻き状になっている。焼成は完全でなく、口縁部内面の

一部は赤焼けとなっている。6は西壁寄りで出土した土師器甕。口径22.4cmの口縁部は、7よりも薄い器壁が薄く、外湾も弱い。また屈曲部内面にも稜がない。口縁部下端は強い横ナデで微妙な段が付いている。口縁部の中位に粘土の接合を見ることが出来る。7は土師器甕で、口縁部のみで体部破片はない。口径25cm、胎土に砂粒が大量に混入している。焼成はあまり良くない。口縁部は緩く外湾しており、屈曲部内面は鈍いながら稜が付く。体部内面はヘラ削り、口縁部は横ナデ調整。体部外面には不明瞭なハケ目が残る。

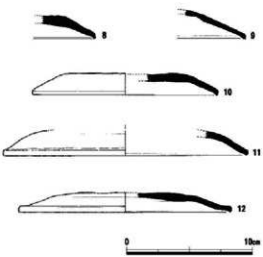


Fig. 18　土壙SK01の遺物（縮尺1／3）

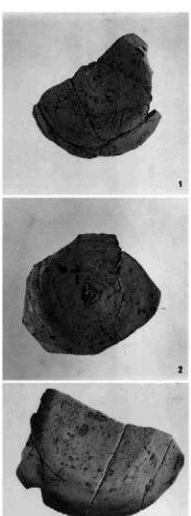


Fig. 19　土壙SK01の遺物

その他の遺物

ナンバリングの手違いでPit 1と注記した遺物が数袋ある。この中には実測可能な大きめな破片が含まれており16点を図示した。発掘時には縮尺1／20の全体図と縮尺1／10の遺構図を作成したが、これらにはPit 1のような記入はしていないことから、Pit 1の遺構を特定、確認する必要があったが、これまでにその作業を怠ってしまった。この数量を出す遺構は、SK01以外には考えにくいが、今となっては断定することが不可能となり残念である。しかし本調査地の時期や性格の把握には不可欠であり、また調査担当者の責任を明らかするためにもあえて掲載した。

8～12は須恵器の坏蓋。8は4cmの小破片のために口径は復元できない。口縁部は横ナデ後に一部ナデを加えているが、全体的に粗雑である。また天井部の器壁は分厚く、口縁部端は先細く尖り気味。9も同じように小破片で口径不明。器壁は薄く、天井部は横ナデ後にナデを加えているが、微妙な凹凸が多い。胎土に砂粒少なく、焼成は普通。内外面とも灰色を呈する。10は口径14.6cm、器高1.8cm。天井部はヘラ削り後にナデ調整、平坦になっている。口縁部端は断面細丸で、小さく立つ。11は口径19.4cmに復元したが小破片のために不正確。口縁部外面に重ね焼きと思われる痕跡があり、また内面は灰を被っていることから裏返して焼成したのだろうか。12は1.6cmと背の低い蓋。口径17cmで丸みがあり小さく突出する。天井部のヘラ削りは逆時計回り。内面はナデを加えている。13は弥生土器の甕底部。底径6cmで焼成前の穿孔がある。外面は縦ハケ目調整。14は手捏ね土器。口径2.6cm、器高1.9cm。内部はちょうど人差し指が入る大きさである。

15～22は土師器。15は口径10cm、器高1.8cmの土師器皿。底部は

丸みがある。精良土の胎土。16は底径7.6cm。精良土で茶白色。軟質で全面が摩滅している。17 は底径9.4cm、平底の外底には板目が残る。体部は横ナデ調整。18は口径15cm、底径8.8cm、器高2.9cm。体部は緩く外湾して口縁部となる。他の破片同様に摩滅している。19は口径15m6cm、底径9.6cm、器高3.2cm。18の器形と同じ特徴を持つ。胎土は精良土だが3㎜大の砂粒をわずかに含んでいる。20は土師器皿。口径15cm、底径11.4cm、器高1.4cm。外底周縁は丸みを持って口縁部へ移行する。胎土は精良土で器面の剥離が激しい。21は口径20.4cm、底径16.4cm、器高2.1cmの大きめの皿。外底はヘラ切り離しで時計回りの回転。22は口径15.2cmの甕。器壁の薄い体部にく字形に屈曲する口縁部が付く。屈曲部内面は割りにシャープな稜である。胎土に1～2㎜大の砂粒を含む。普通の焼成で薄茶色を呈する。

23は石錘。滑石製で縦中央に溝を掘り込んでいる。長さ5.7cm、幅4.7、厚さ2.3cm。有田遺跡群では、土錘、石錘、飯蛸壺などの漁労遺物が出土している。数量的には決して多くはないが計45か所と台地全面に渡っており、間近な室見川や海岸部での漁労活動を物語っている。

4．小　結

九州大学による昭和43年調査区の全面調査を行い、その検証と遺構の追加を果たすことが出来た。九州大学調査の3基の炉跡のうち1号炉はSB01のほぼ中心にあり、3号炉もSB05の規模が不明だが建物の内にあることから、製鉄工房的な建物の可能性が強くなってきた。これらの建物の時期を直接示す遺物はないが、もし工房建物とすると、炉出土遺物から8世紀代と推測できる。また5棟の建物が併存していた根拠はないが、SB06より切られたSK01がその出土遺物から8世紀代と考えられ、建物がほぼ同時期に存在していた可能性が強い。調査当時は、製鉄工房とその倉庫という機能を想定していたが、その後、古代から近世の羽口が、台地のほぼ全面の14か所で出土し、第4次調査のSB04、第67次調査のSX04、SB04、05、第81次調査のSX23、SX20など工房や鉄滓廃棄土壙も発掘され、次第に製鉄関連遺構が知られるようになってきている。

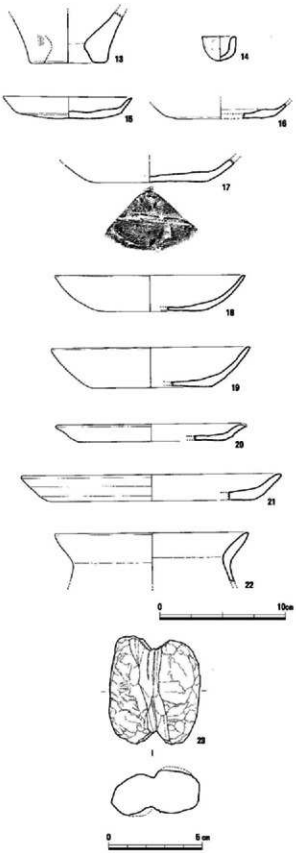


Fig. 20　その他の遺物（縮尺1／2　1／3）

第13次調査

1．調査に至るまで

三苫剛氏より昭和53年6月5日付けで小田部2丁目73－2の埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。文化課では、当該地が有田、小田部台地上に位置していることから埋蔵文化財が存在している可能性がきわめて高いと判断した。試掘結果を発掘費用の積算や調査期間、発掘作業員の員数などの検討に十分反映させることは当然のことである。さらに開発者への説明や了解を得るためにはある程度の協議日数が必要となるが、開発面積が狭いことから、第11次調査と同じように、試掘で遺構が確認されたらそのまま本調査に着手する方法で対応することにした。幸い南側約150mで調査を実施していた第10次調査が終了を迎えることになり、その最終日に合わせて6月14日にパワーシャベルを使って当該地の表土を剥いだ。表土下に黒褐色土を挟んで約20～30cmの深さで鳥栖ロームの地山となり数個のピットが現れたことから、拡張して発掘区を設定し、翌日から発掘調査を始めた。後述するように明確な遺構はなかったものの旧地形復元の知見を得て6月16日に調査を終了した。

Fig. 1　調査区遠景（南から）

2．調査地の位置と立地

当該地は、有田、小田部台地の最も東側の突出部にあり、字名では「立石」に当たる。当時、この突出部での調査例は第10次調査のみで、埋蔵文化財に関する情報はまったくなかった。今ではこの突出部の基部周辺では、数か所で調査が実施されているが、基部より北側ではいまでも4か所を数えるに過ぎない。旧地形図によると当該地は第10次調査地と同じように突出部の西側縁部に当たっている。この縁部をさらに北へ約700mたどった場所では昭和62年に第129次調査が実施されている。

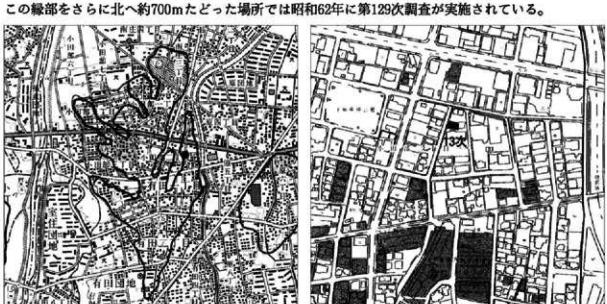


Fig. 2　調査地位置図（縮尺 1／25,000　1／5,000）

3．遺構と遺物（小結）

当該地は、区画整理によって切り下げられた道路に面している。南に接して2階建てのアパートがあり、一部がその駐車場に利用されていた。周辺部には畑地の中に民家が点在するだけで、まだ住宅密集地にはなっていない。雑草が茂る表土を剥ぐと、まず薄く堆積した黒褐色土が現れた。この土層には弥生土器や須恵器の破片が混入している。発掘区の北側半分には、この黒褐色土を掘り込んだ深さ63cmの不整形の落ち込みがある。無遺物であり、表土と同じ埋土であることから畑耕作時のものと判断した。黒褐色土の下の鳥栖ロームは、橙色でわずかに西側に傾斜している。この面で10数個のピットと細い溝状の落ち込みを検出したが、時代を特定出来るような遺物は出土しなかった。調査面積の狭さもあって、遺構の性格や広がりを掴めなかったが、黒褐色土は突出部西側斜面に形成された包含層と考えられた。その残り具合から突出部の尾根部は、すでに削平されている可能性はあるが、今後の周辺調査に大いに期待が持てるようになった。

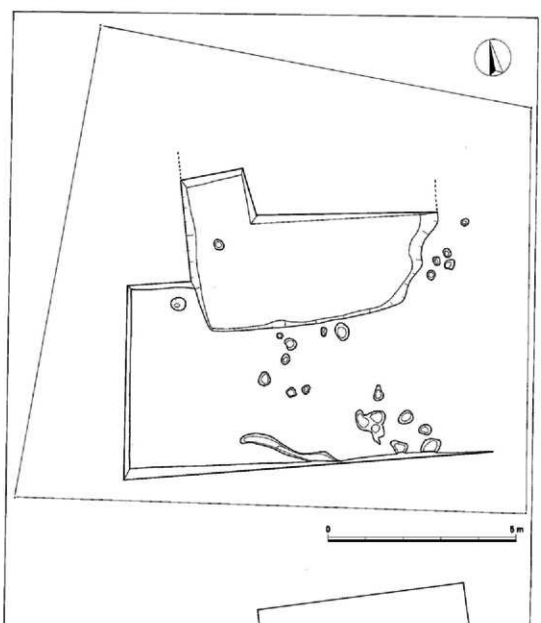


Fig. 3　遺構全体図（縮尺 1／100）

第14次調査

1．調査に至るまで

昭和53年、5月下旬から開始した有田遺跡群の発掘調査は、6月末までに第9～13次調査を終えた。文化課の課題として取り組んでいた事前審査の迅速性や博多区板付遺跡、西区四箇遺跡、同区有田遺跡群の重点地区における小規模開発への対応などを実現しつつあった。後述するように有田遺跡群では6月中旬に試掘件を実施し、協議中のものが1件あったが、7月になって南区老司で民家造成中に石棺が発見され、即応が求められた。石棺1基であったことから短期間で調査を済ませ、再び有田遺跡群に戻ると計画したが、石棺の下部から弥生時代前期の袋状貯蔵穴が3基見つかった。残りがよく、しかも大型であったことから、完掘するのに思わぬ日数を要した。

有田遺跡群協議中の地点は、吉岡毅氏より6月10日付けで提出された小田部3丁目3-261-3である。文化課は家屋解体後の6月14日に試掘を行い、遺構を確認した。このため事前審査班では、吉岡氏と協議を進めていたが、先の事情により調査着手がやや遅れることとなった。南区老司での調査を終えて、早速8月2日より調査を開始することになった。

2．調査地の位置と立地

有田、小田部台地の中央部は台地が最も括れた所であるが、ここより北西に派生する突出部の南西側斜面側に本調査地の位置している。台地を東西に横断する旧道は、東から緩やかな坂となりやがて平坦となる。ここが台地中央部の「西福岡中学校東」交差点で、そのまま旧道を西に向かうと同じような緩やかな下り坂になる。点滅信号を過ぎると、すぐに西福岡中学校のグランドがあり、平坦面が広がるが、旧地形図によると北西より深い谷が入り込んでいる。吉岡氏によると解体した家屋は、築約100年は経っており、敷地南側の庭は、以前水田を耕作していたとのことであった。昭和21年米軍撮影の航空写真でも谷部に水田が区画されていることが確認できる。この一帯では、これまで第41、103、117、159、186次調査が実施されており、有田遺跡群では特に江戸期の遺構、遺物が多いことで注目されている。

Fig. 2　調査地位置図（縮尺 1／25,000　1／5,000）

3．遺構と遺物

母屋は解体されていたものの、敷地の西側には農作業小屋が残っており、試掘でも南西側に向かって遺構が希薄になると予想されたことから、ここを排土置き場として利用し、建設設計図に従って発掘区を設定した。表土剥ぎはパワーショベルを使用したが、表土からはさまざまな遺物が出土した。これらは家屋解体後の整地作業で混じり込んだものだろう。中には近、現代のごく最近まで使用されたと思われる遺物も含まれているが、この時期の解明も有田遺跡群としては重要であることから、積極的に取り上げ実測、図示するように努めた。鳥栖ロームの地山は、南西隅に向かって傾いており、標高は南東隅約7.3m、北東隅約8.0mで、その差は約70cmである。旧地形図にある台地縁部の落ち込みはなく、発掘区のさらに南側にあるのだろう。先述したように記録的な大渇水に加え、夏季の猛烈な炎熱にも見舞われるなど厳しい状況であったが、8月21日に調査を無事完了した。検出した主な遺構は、井戸、土壙、溝、大小のピットなどである。次ぎにこれらの遺構と出土遺物について記す。

Fig. 2　調査区平面図（縮尺1／200）

Fig. 3　発掘作業風景（北西から）

Fig. 4　発掘区全景（北から）

井戸SE

検出した井戸は、発掘区の北西部で2基（SE0、03）、中央よりやや南寄りで1基（SE03）の計2基である。この他に南寄りに113cmと深い土壙がある。直径150cmで正円に近いプランであることから発掘作業中は井戸の可能性も考えたが、素掘りで井筒や湧水もないことから井戸と確定しなかった。

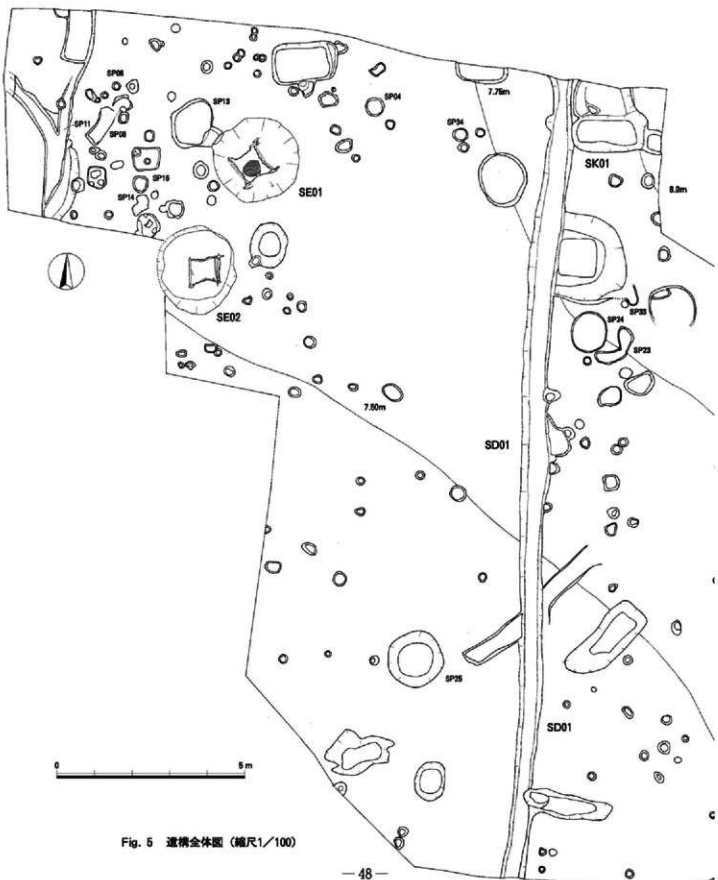
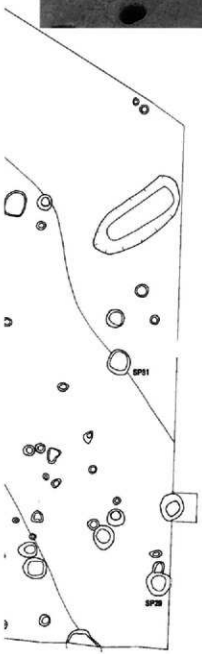


Fig. 5　遺構全体図（縮尺1／100）

Fig. 6　井戸SE01、02（東から）



SE01　224cm×216cm、正円に近い円形プランで、壁はほぼ直に掘り込んでいる。安全作業を考えて約220cmの深さで掘り下げを断念した。井筒はSE02と同様有田遺跡群の中では珍しい構造をしている。まず井戸の中央に70cm×80cmの長方形隅位置に、粗く割った角材を打ち込む。この四隅角材には、上か下に1個の枘穴が穿ってあり、2辺だけに横材を渡し組み込む。横

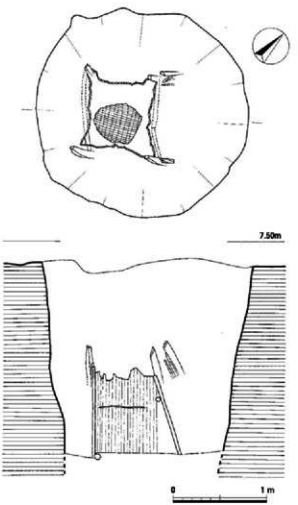


Fig. 7　井戸SE01図（縮尺1／40）

材は他の2辺にはないので、相対する2対辺四隅材を完全に安定したとは言えないが、次ぎに丸竹を幅3～4㎝程に潰し（本来は潰していない可能性もある）各辺19～26本を打ち込んで四辺形の井筒としている。これである程度の強度を保っている。しかし断面図のように一部斜めに倒れ込んでいることから、きわめて不安定だったのだろう。四隅柱がそれぞれ数本打ち込まれているのは、その欠を補った結果であろう。井戸底までの深さが分からないが、下方の横木の位置から判断してあと50㎝前後か。深さ162㎝に竹笊があるが、井筒途中にあることから、井戸廃棄後に埋没したのだろう。

出土遺物　1は黒曜石製の打製石鏃。長さ1.85㎝、凹基で一方の脚を欠く。復元基部幅1.4㎝。2は染付白磁の皿。口径12㎝、高台径7.6㎝、器高2.8㎝。内底と外面に文様を描く。外面は蔓草か。3は瓦質の擂鉢。口径25㎝で内面に粘土紐を貼り付けて肥厚させている。内面に5本の櫛目を縦方向に入れている。胎土は灰白色、外面は黒色を呈する。4は幅3.8㎝、長さ15.7㎝、厚さ4.5㎜の板材。表面にいくつ

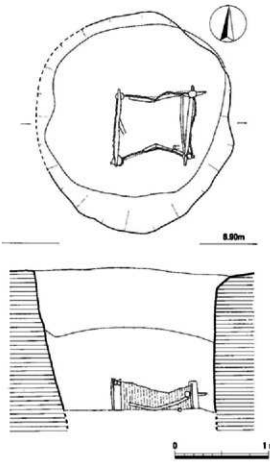


Fig. 8　井戸SE02図（縮尺1／40）

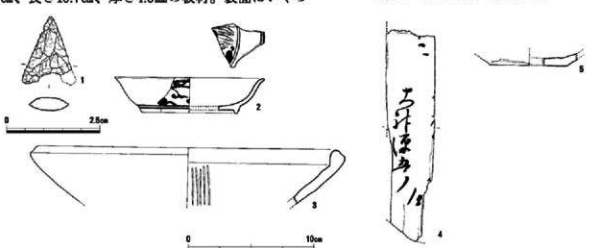


Fig. 9　井戸SE01、02の遺物（縮尺1／1　1／3）

Fig. 10　井戸SE01の遺物

かの文字が墨書されており、中央は「大神源五郎」と読める。図下端のみが原形のままで、やや湾曲した加工となっている。他辺はいずれも割れており、本来の形状は推測できない。他に判読できなかった文字らしき墨書があることから、木簡のような木札ではなく桶や曲げ物などの蓋や底か。材は杉か。

SE02　SE01とは約１ｍしか間隔がない。一部が発掘区外に出ているが、206㎝×232㎝の南北にわずかに長い楕円形プランである。壁は深さ約60㎝まで斜めに掘り込み、その後は直に掘り込んでいる。井筒はSE01と同じように四隅材と丸竹を材料としているが堅牢となる工夫を施している。まず四隅材は丸太材を用い、その頭部近くに４辺からの横木を組み込む枘穴がある。約150㎝の深さで掘り下げを止めたので、井筒下方の構造が明らかでないが、おそらく四隅材下端にも横木を固定する加工があったと思われる。

出土遺物　出土遺物は５のみ。底径6.2㎝の土師器皿。底部は糸切り離し。胎土は精良土を用いている。

Fig. 11　井戸SE01（南東から）

Fig. 12　井戸SE02（西から）

土壙SK

SK01　SK01は、発掘区北端で検出した。上面プランは隅丸長方形で、長軸204cm、短軸98cmの大きさである。深さは30cmあり、壙底は平坦ではない。西側短辺が溝SD01によって切られている。また北側長辺に別の土壙が接しているが、先後関係は確認できなかった。

この他、点在する小ピットの間に土壙と呼ぶべき大きめのさまざまな形状の落ち込みがある。中には長方形や円形など整ったものが数基ある。だが出土遺物が少なく時期が確定出来なかった。また用途についても明らかに出来なかった。

出土遺物　1は陶器製の急須の蓋。胎土は黄灰色で緻密。釉は薄緑色でその上に白色粉を散らしている。蓋の径は9.2cm。2は高麗青磁の皿。背の低い高台を削り出している。内底の象眼は如意頭文と2条の円圏が黄白色で如意頭文の上部の線は黒色。有田遺跡群では高麗青磁は標高の高い台地中央部付近で集中して出土している。3は陶器製の擂鉢。口径28.2cm、内外面とも濃い赤褐色で口縁部のみに褐釉を掛ける。7本の櫛目が残る。胎土は緻密、器面の横ナデ調整も丁寧である。

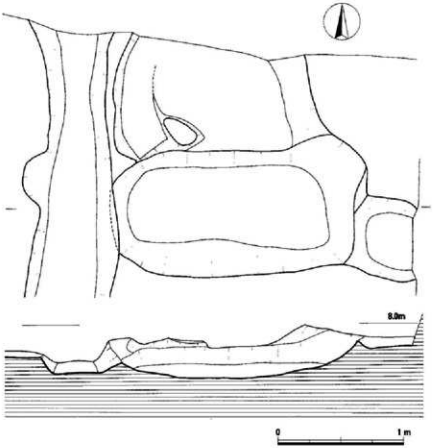


Fig. 13　土壙SK01図（縮尺1／30）

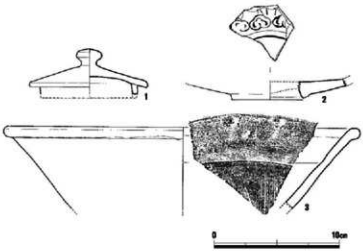


Fig. 14　土壙SK01の遺物（縮尺1／3）

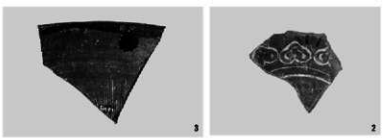


Fig. 15　土壙SK01の遺物

ピットSP

発掘区の全面にピットが広がり一部では集中していることから、井戸や土壙の覆屋、あるいは掘立柱建物跡などの遺構を想定し、柱穴の配置を検討したが、建物として捉えることは出来なかった。しかし遺物は弥生～近世まで多様な遺物が数多く出土し、特に近世の時期が多い。遺物番号の後にピット番号を記している。

1は染付白磁の鉢。口径14.4cm、高台径7.3cm、器高4.8cm。口縁部は八区割で、その割付は等間隔ではない。内底の絵柄は、湖岸の岸辺に葦を描く。見込みと外面は蔓草文で、内面は密に描い埋めている。ただコバルトの発色はきわめて悪い。2は口径9cm、高台径4.4cm、器高2.2cmの染付白磁の皿。水面には数艘の小舟が帆走している。3～5は同じSP25出土。3は弥生土器の甕で、底径7.0cm。中央に焼成前に孔を開け甑としている。4は須恵器坏蓋。かえりは小さく突き出す。天井部はナデ調整。5は須恵器高台付き坏。高台はハ字形に開いて貼り付けている。6は弥生土器。外面はヘラ状工具で押さえて成形している。7は陶器の片口。口径22cm、高台径8.4cm、器高11cm。片口部を欠いているが厚い器壁の作り。内面は薄灰緑色釉で、外面は片口貼り付け後に灰緑色釉で波状文を巡らしている。

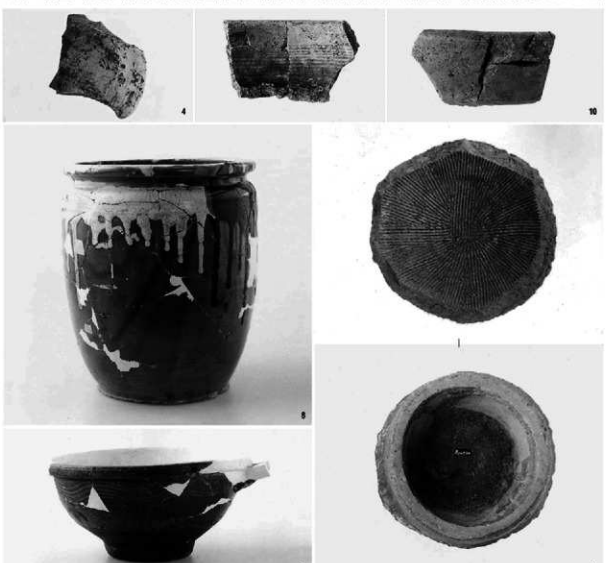


Fig. 16　ピットの遺物

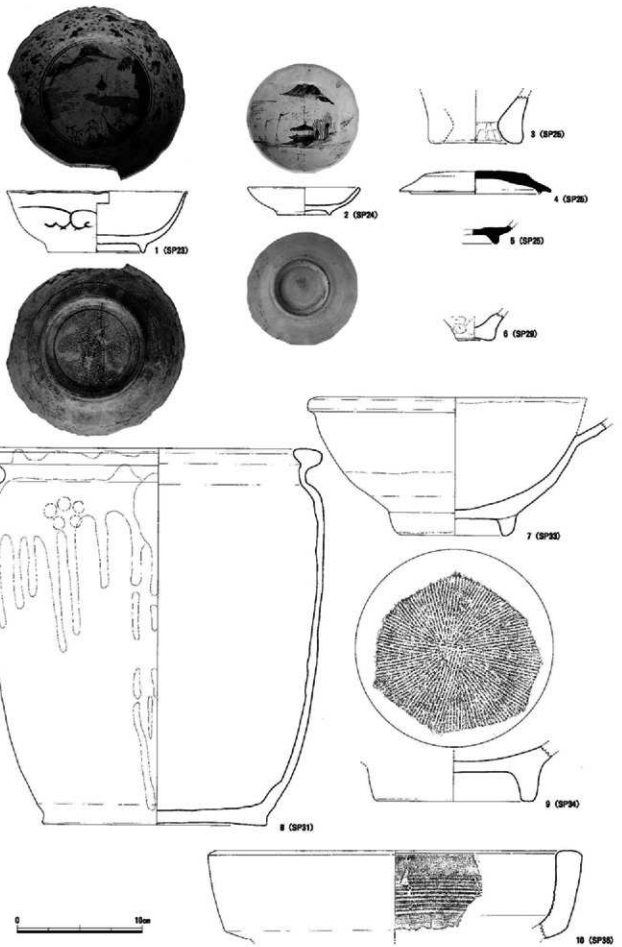


Fig. 17　ピットの遺物（縮尺1／3）

文献によると佐賀県藤津郡塩田町久間字西山の志田西山１号窯で江戸時代18世紀に製作された片口の器形によく類似している。志田西山１号窯の片口は、褐色胎土の素地に白土を刷毛で化粧しており、この手法から判断してまず同窯産で間違いないだろう。また後述する15、36、51の灯火具なども佐賀県武雄市や藤津郡内の諸窯産と思われ、地元高取窯製品との流通関係を明らかにしたいところである。8は陶器の甕で完形品。口径25.3cm、底径17.6cm、器高30cm。口縁部を肥厚させ、上面は丸く盛り上がる。頸部の湾曲は布や紙の蓋を被せ紐で結ぶには便利だったろう。外面には褐色と灰白色釉を流し掛け、肩の２か所に梅花文の押印がある。上野焼か。9は陶器の擂鉢。分厚い作りの高台は径12.6cm。10は土製素焼きで口径29.6cm、底部を欠いているので全形不明。内面下半に煤が付着していることから炉としたが、あるいは天地逆か。11は土管で径は24cm。大型の褐釉甕片と共伴した。時期不明、現代品か。12は陶器の甕。口縁部はT字形で上面は幅広の平坦面を作る。外面は褐釉、内面の口縁部は褐釉が流れて、他は灰白色釉が細かく垂れている。13は12と同じSP06出土。弥生土器甕棺の口縁部。上面は水平で両端は横ナデで中央が窪み断面が口唇状となっている。14は玉縁口縁の白磁碗。口径17cm、外面下半は露胎。釉には細かな気泡がある。15～17はおなじSP11出土。15は陶器灯明皿で、口径7.6cm、底径3.7cm、器高1.8cm。外面は露胎、内面に灰色釉。16は陶器擂鉢。厚手のしっかりした高台は径14.4cm。櫛目も鋭い。17は染付白磁碗。釉は均一に掛かっているが全体に青みを帯びている。見込み内底に桔梗文か、外底の銘は不明。コバルトの発色は悪い。畳付きは露胎。18は底径4.1cmの白磁。坏部を欠いているが仏飯器であろう。19は青磁碗。高台径4.8cm、釉には貫入がある。20は凝灰岩製の下臼とその受け皿部と考えた。受け皿部の径は34.4cm。本例を臼とすると最もよく似ているのは第177次調査SD008出土の茶臼であるが、本例中心部には肝心の下臼部がなく、直ちに臼とは断定できず別用途の可能性を考えるべきか。ところで有田遺跡群の調査で石臼の出土数はすでに20地点、40個を超している。中世から近世遺構の多い台地中央から北西側の調査地点でその大部分が出土している。井戸底や井戸の積み石に用いられるなど祭祀的な行為も推測されている。

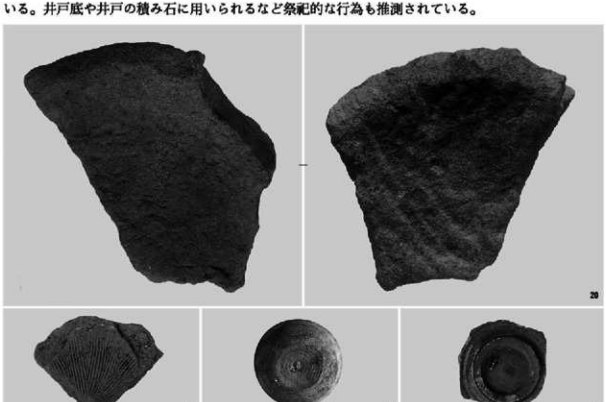


Fig. 18　ピットの遺物

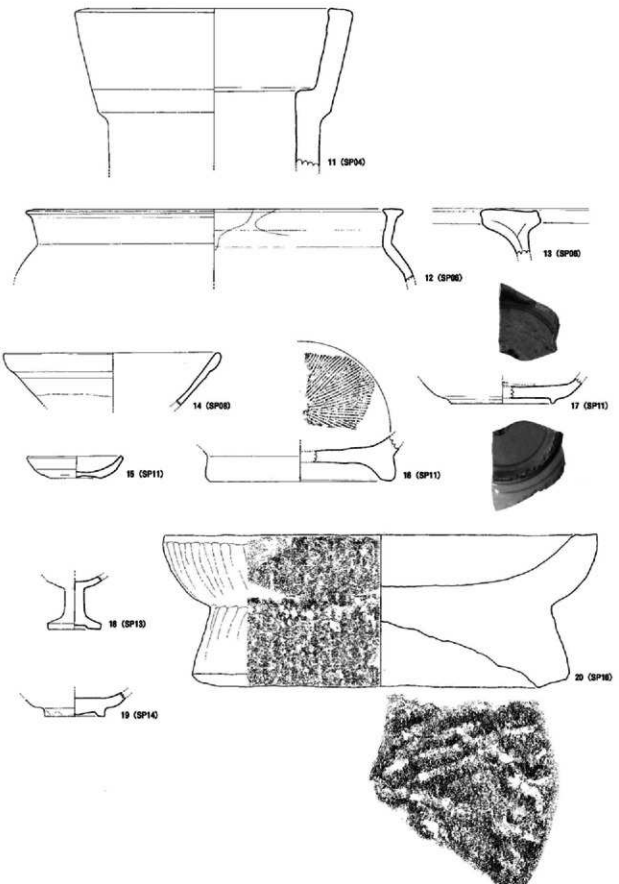


Fig. 19　ピットの遺物（縮尺1／3）

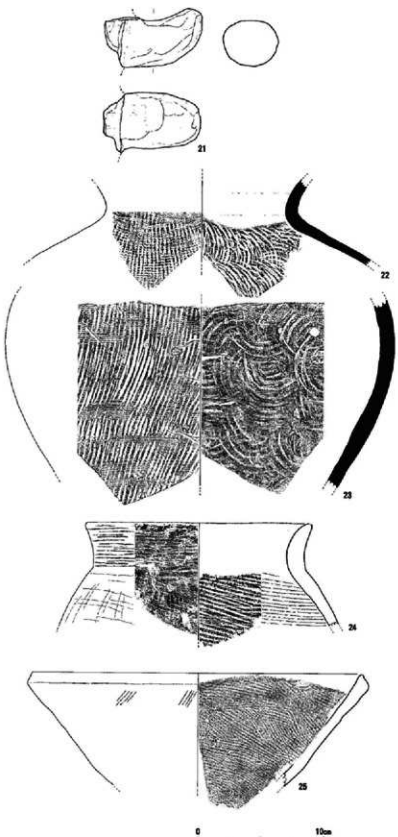


Fig. 20　溝SD01の遺物（縮尺1／3）

溝SD

SD01　発掘区のほぼ中央でほぼ南北に延びている。幅は均一ではなく南端で64cm、北端で68cm。深さは北端より南端で約54cm深い。発掘区中央部より北寄りの両岸に10～20cm大の自然石を並べたり、溝底に雑に敷いたような状況が見られた。おそらく建物床下や庭先を通って南側谷部の水田に向かって排水していたのだろう。

出土遺物

SD01からは多様な遺物が出土した。溝としてもともと覆いがなく、長期間使用された結果磁器の異なる遺物が混入したのであろう。土師器、須恵器、瓦質土器、磁器、陶器、金属器の順に記す。

21は土師器甕の把手。挿入式で断面は楕円形。22は須恵器甕。頸部径15.2cm。頸部は横ナデ調整。23は須恵器甕の下半部。最大部の径は32.8cm。22とは同一個体ではない。24は器壁の厚い土器。内外面とも粗いハケ目調整で、口縁部はナデ消している。25は口径26cmのこね鉢。口縁部はわずかに肥厚するものの端部は外傾する。灰白色の精良な胎土で焼成は堅い。内面は細かなハケ目を入れ、外面にも部分的にハケ目が残っている。

26～35は磁器。26は口径5.4cmの杯。外面は赤、青、黒の絵付け。いかにも稚拙。27は口径9.6cm、覆付きの一部を

欠くが高台径2.8cm、器高4.4cm。無紋で、高台は直ではなく開いている。28は口径8.4cmの碗。21と同じように赤、青、黒三色の絵付け。29は口径12.4cmで、端部が小さく内湾している。薄い褐色で口縁部内外と外面に幅広の線を描いている。30は口径13.2cmの染付白磁碗。体部は直立しそのまま口縁部となる。U字形の文様で埋めている。コバルトの発色は良い。31は口径17.4cm、体部と口縁部の2か所で外反している。上下の圏線の間に複線の斜格子文を描く。32は染付白磁の皿。口径8.2cm、高台径4.2cm、器高2.2cm。見込み内底の絵柄は松林と帆船。33は青磁の皿。口径10.4cm、高台径5.0cm、器高1.65cm。見込みに草花のスタンプ文。釉は全体に厚く掛かり、内底は特に厚く施釉されている。34は高台径10cmの白磁皿。背の低い高台は丸みのある断面。見込み内底に蛸唐草文の染め付け、高台内は1条の圏線を巡らし、中央に銘を入れているが判読出来ない。35は口径18.6cm、高台径9.9cm、器高3.75cmの染付白磁皿。高台畳付きだけでなく口縁端も無釉。また見込み内底も約1.5cm幅で釉を掻き取って蛇の目状になっている。見込み内外に簡単な文様を描く。コバルトは黒く発色している。

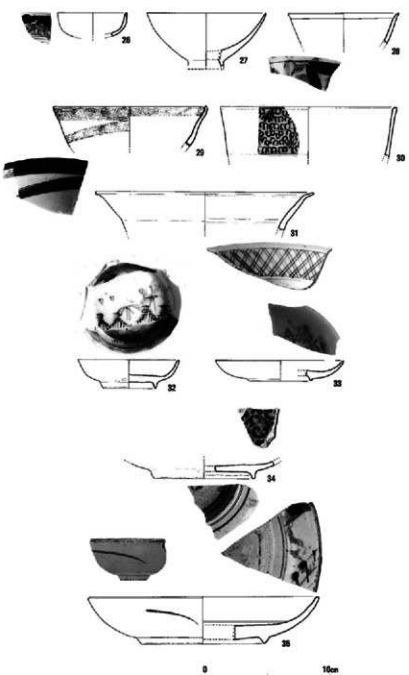


Fig. 21　溝SD01の遺物（縮尺1／3）

36～45は陶器。36はSP11出土の15によく似た器形である。口径7.4cm、底径3.8cm、器高2.1cm。褐釉は内面のみで雑な施釉である。外面には重ね焼きと思われる痕跡が残る。37は口径8cmの壺。おそらく蓋が付くのだろう。胎土は黄白色の精良土。薄手の作りで確かなロクロ技である。外面には透明釉を掛けた後に頸部下に1条の沈線を巡らせ、さらにその下方に斜めのハケ目を加えている。38は壺の下半部。底径8cm、底部は蛇の目状にわずかに高くなっている。胎土は薄茶色で緻密。外面には白色土を掛け、鉄釉で笹葉状の文様を描き、その上に透明釉を掛けている。器面は縦長に凹みを入れている。39は37と同様に蓋を持つと考えたが、内面の釉垂れ方向からすると天地逆となる。ここでは落とし底が付く器

形とした。40は茶瓶。胎土は赤みを帯びた茶褐色で精良土。外面の釉色は黄白色で内面の一部には灰褐色釉が掛かる。胴部径は17cmとやや大きめの器形。外面に褐色絵が見られる。注ぎ口の器壁には三つの小孔を開けている。41は花器。筒状の体部に強く締まった頸部が付き、口縁部は朝顔状に大きく開き、さらにその端部を直立させている。口径9.6cm、底部の形状は不明だが器高は16cm前後か。胎土は精良土で黄白色、青灰色釉が外面から頸部内面にかけて掛けられている。体部下半部は薄茶色、内面は雑なロクロ痕が見られる。42は底径6.2cm。内面には逆時計回りのロクロ痕、外底は糸切り離し痕。全面が無釉で土製とすべきか。43は底径16cmの甕。成形も雑だが窯変で大きく変形している。底部より約7cm上方に5本の沈線を巡らしている。外面は鉄釉が垂れている。外底には砂が付着しているが、窯床の砂か。44は擂鉢。高台は径13cmで直に立つ。その中央に8×9mmの小孔が開いている。釉色は濃褐色で粗雑に厚く掛ける。高台内にも一部釉があるが大部分は露胎。擂り面は鋭い櫛を放射状に入れている。45は口径52cmで土製素焼きの甕。目に粘土を貼り付け厚みを持たせている。明茶色

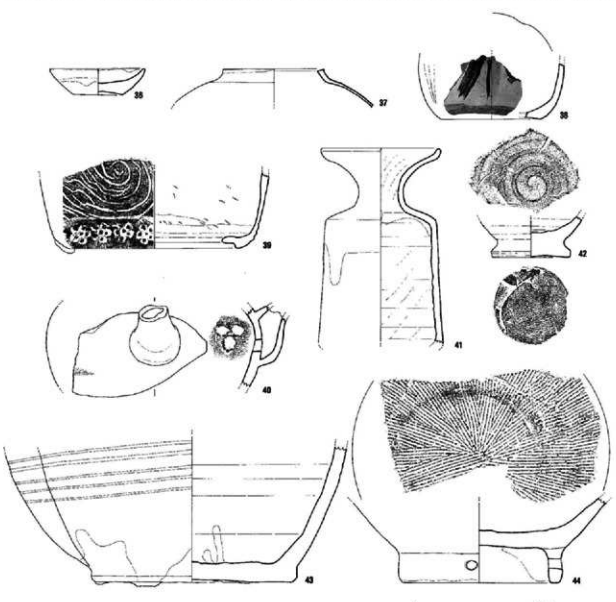


Fig. 22　清SD01の遺物（縮尺1／3）

の胎土には5㎜大の砂粒を含む。大型だが丁寧な作りである。

46は平瓦。凹面は大きめの斜格子文叩き。厚さ2.2㎝。焼成は堅く締まり赤茶色を呈する。有田遺跡群では台地最高所を中心にして中世～近世瓦の出土例があるが、本例と類似する瓦はない。**47**は直径14.6㎝の青銅製和鏡。鏡縁は幅3.6㎜、厚さ2.7㎜の平縁。鏡背の文様は垣根の向こうに菊花と薄葉を鋳出す。中央上部に直径4.6㎝の縁の中に梅花文がある。右下方に藤原光長の銘。**48**は銅銭の寛永

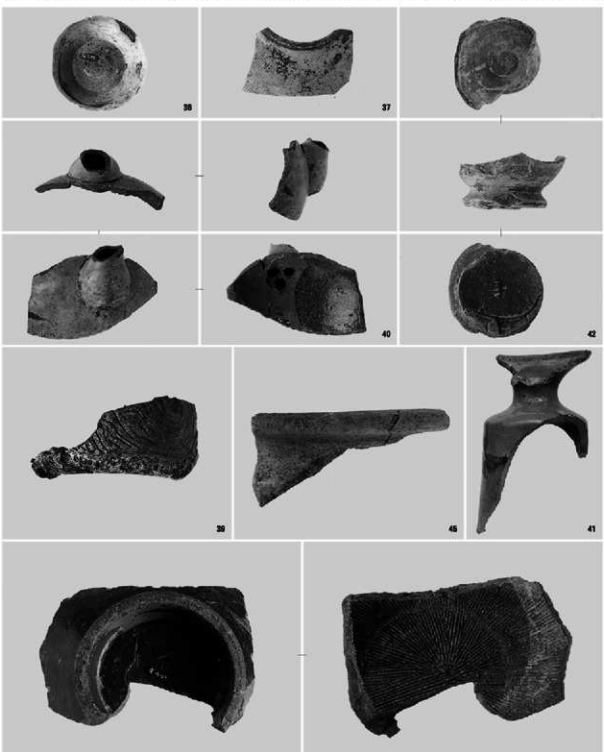


Fig. 23　溝SD01の遺物

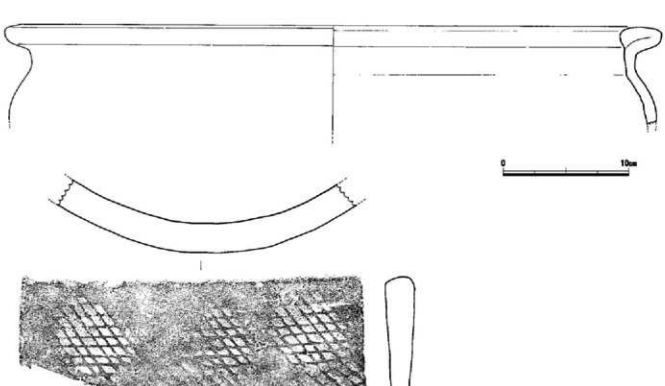


Fig. 24　溝SD01の遺物（縮尺1／3）

通寶。直径2.5cm、厚さ1.6mm。背面は無文。他に１枚あるが判読不明。

表土層の遺物

地山面での遺構検出や発掘区南壁の清掃の際出土した遺物について記す。

50、51、55は遺構検出時出土、他は南壁出土。49は土師器甕の把手。ヘラ状工具で成形し一部にハケ目調整痕が見られる。強く屈曲し先端が上向く。断面は楕円形で上部に平坦面を作っている。把手部は割りに滑らかで、器内面は磨耗している。50は外面に鏡葉文を持つ青磁碗。胎土は灘白色で緻密、薄緑色の釉は均一に施釉され、内外面とも大きめの貫入が見られる。鏡葉文の鏑には丸みがある。細片のため径不明。51は陶器の灯明皿。口径7.7cm、底径4.5cm、器高2.9cm。赤茶色の胎土は密、内面のみに褐釉を掛ける。その釉端は白色となっている。外面は露胎で、下半部は鋭利なカンナ削りである。SP11出土の15、SD01出土の36に器形がよく近似している。52は細首壺で陶器。胎土はわすかに茶色がかった灰色で緻密。鉄釉が外面から首内面まで掛かり、その下方は褐釉、外面の首付け根部に鉄油が欠けて油滴状になっている。内面は凹凸が目立つが、器形、施釉とも美しい。53は土製の底部。平底で底径9.4cm。内面は凹凸が顕著、外面は横ナデ調整。外底は糸切り離しか。54は底径13.2cmの陶器。胎土は灰褐色、外面は褐釉の上から鉄油を掛け流している。見込み内底にも斑点状に鉄釉が掛かり、底部にも薄く施釉している。55は陶器の擂鉢。口径26.6cmで肥厚した口縁部の外面に褐釉を薄く掛けている。56、57は砥石。56は灰色の粘板岩製で仕上げ砥石。長さ16.9cm、最大幅7.3cm、最大厚1.9cm。表、裏面が研ぎ面で２面とも湾曲している。57は肌色の粘板岩製。同じように仕上げ砥石。板状の長方形で、いま図上方を欠いている。長さ8.3cm、最大幅5.9cm、最大厚2.1cm。各側面とも面取りし

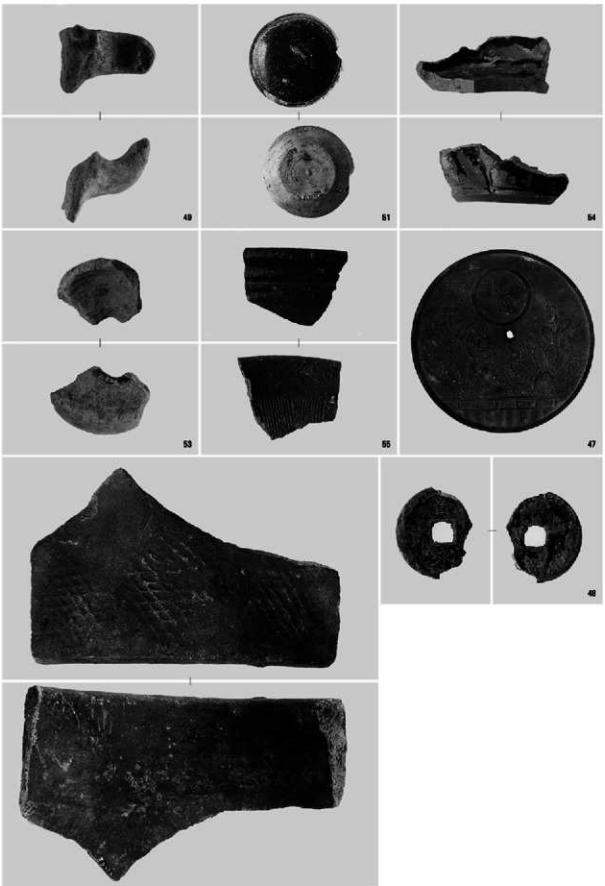


Fig. 25　溝SD01、表土層の遺物

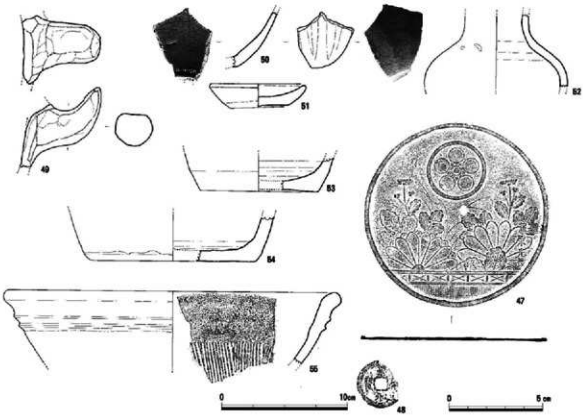


Fig. 26　溝SD01、表土層の遺物（縮尺1／2　1／3）

ており、その整形痕が細かな筋となって残る。

4．小　結

発掘前には、台地中央部に近く、かつ谷部や室見川右岸に形成された低平地にも面していることから、縄文時代や弥生時代～古代の遺構、遺物を予想、期待していた。というのは前年の昭和52年に本調査地の谷を挟んだ南側の突出部で第5次調査が行われ、縄文時代中期～後期の貯蔵穴状土壙56基が検出されていたからである。その後、この突出部では、8回の調査例があり縄文時代晩期終末～弥生時代中期の竪穴住居跡や甕棺墓などが検出され、縄文時代以降各時期の内容が解明されつつある。

一方、本調査地の突出部（字名の「上町」と「宮城」）でも、第41、103、105、117、130、159、164、173次など調査件数が増加してきた。これらの内、特に本調査地の東側約110m範囲内に位置する第103、117、186次調査地の検出遺構を合わせると、溝でL字形に区画された内側に、掘、井戸、土壙などが配置された東西約50m、南北約60m規模の敷地であった事が分かる。この敷地には門構えがあり、加えて古伊万里など豊富な肥前陶磁器類が出土していることから、18世紀江戸中期以降の屋敷であったと推測されている。本調査地と北側約700mの第41次調査地では南北方向の溝があり、排水だけでなく地割りの機能を考えると、同じような屋敷地が区画されていたと想像できよう。本調査地では2基の井戸があったものの屋敷地内の建物配置までは明らかに出来なかった。しかし、食器、調理具、神・仏具、灯火器、化粧具などの出土遺物は、江戸時代の日々の暮らしを具体的に物語る資料として貴重である。またここに住んでいたと思われる墨書木片「大神源五郎」を、江戸時代の文献類、過去帳や墓石などを調査し、どのような人物かを明らかにする必要があった。今回、その作業を怠ったが、大

神姓は坂口、毛利、伊佐、松尾などとともに地元では馴染みのある姓であることから、必ず関係資料が残存しているであろう。現在の小田部集落は、本調査地より北側の高所に展開、形成されていることから、江戸時代屋敷地の中心はもここに重なっていると考えられる。おそらく本調査地は旧集落の南端部に当たっている。今後、小田部集落内での調査が進むにつれて、庄屋のような富裕農民層の屋敷や一般農民層の家屋区画など近世農村集落の様子が次第に明らかになるであろう。また今回果たせなかった「大神源五郎」の人物像も浮かび上がって来るであろう。

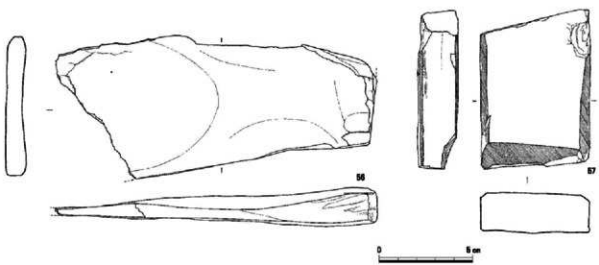


Fig. 27　表土層の遺物（縮尺1／2）

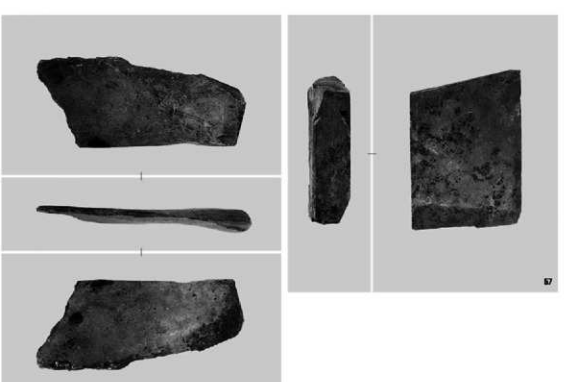


Fig. 28　表土層の遺物

第16次調査

1．調査にいたるまで

第9次から着手した有田遺跡群での調査は、第15次調査（今回は報告出来なかった）を10月2日に終え、完了した調査は計7地点となった。引き続きすぐに着手すべき調査が控えていなかったために、西区梅林校区中学校建設地の高柳遺跡（横山、力武担当）と城南区田島尾子森遺跡（飛高担当）の二班に分かれて調査を行うことになった。秋になっても依然として渇水の時間給水が続いていた。いつもは大雨を降らす台風は、待望の雨をもたらすことはなく強風だけが吹き荒れ、調査事務所の屋根を吹き飛ばす始末。高柳遺跡の次ぎに西区夫婦塚2号墳横穴式石室の実測を経て、田島尾子森遺跡に合流した。

11月13日になって毛利輝雄氏より小田部3丁目312の埋蔵文化財事前審査申請書（53-227）が提出された。当該地が有田、小田部台地内にあり十分に遺跡の可能性があることから、11月17日に試掘を行った。その結果、数個のピットが現れ遺跡と確認できたことから、本調査に向けて毛利氏と協議に入った。毛利氏によるとすでに敷地に工事遣り方を組み終え建設直前とのことで、田島尾子森遺跡から横山と力武が分かれて、11月29日より調査を開始した。

2．調査地の位置と立地

本調査地は、有田、小田部台地突出部のうち西側から数えて3番目、字名「中園」に位置する。この突出部は小田部3丁目の宝満宮付近を基部にして、約90mの幅で北西方向に約450m延びている。その先端から西に約150mに室見川が緩く蛇行して流れている。当時はこの突出部で最初の調査であったが、平成17年末までに21次に及ぶ調査が繰り返されてきた。調査面積の合計は約7,000㎡で、突出部面積との割合からすると各突出部の中で最も調査が進んでいると言えよう。

Fig. 1　調査前の風景（北西から）

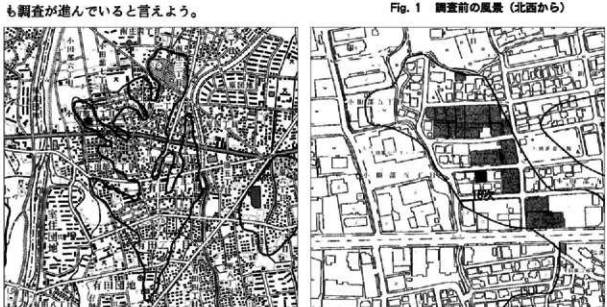


Fig. 2　調査地位置図（縮尺 1／25,000　1／5,000）

3．遺構と遺物

すでに整地された表土をパワーショベルで剥ぐと約20cmで鳥栖ロームとなる。突出部尾根に近いことからある程度の削平は想定したが163㎡という狭い面積にもかかわらず発掘区の南西隅で竪穴住居跡、北東隅で土壙3基と貯蔵穴1基、そして中央部から南西寄りに多数のピットを検出した。

Fig. 3　調査区全景（西から）

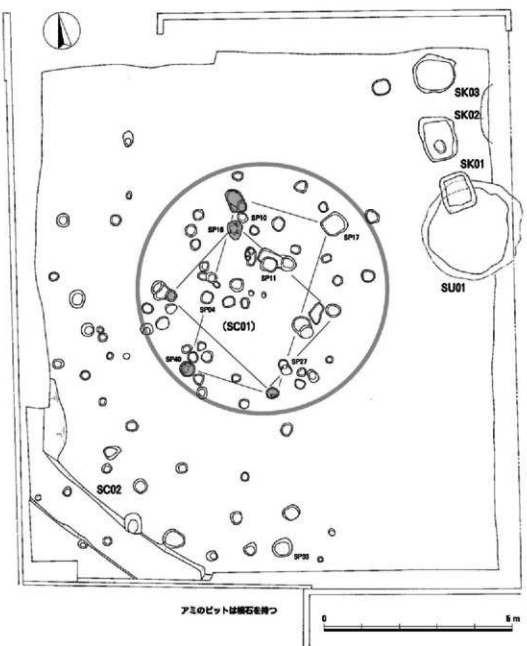


Fig. 4　遺構全体図（縮尺1／100）

住居跡SC

SC01　ピットは土壙、貯蔵穴のある発掘区北東部には見られず、中央より南西側に偏在する。これらの中には、柱根を支え固定したと思われる根石を持つピットが5個ある。これらを結ぶと図のような掘立柱建物跡となる。むしろピットが円形に集まり、弥生土器片が出土していることかすると、掘り込まれた竪穴の壁は認められないが、弥生時代の直径6～7m程の円形竪穴住居跡とする方が妥当と思われる。掘立柱建物跡、住居跡としての決め手を欠くがここでは一応SC01の遺構番号を付けておく。

出土遺物　表土及びピットから出土した遺物9点を図示した。1は突帯文土器の細片。断面方形の口縁に台形状の凸帯を巡らせ刻み目を加えている。2、3とも如意形口縁部を持つ甕、2の胴部は張りがある。4～6は弥生土器底部。5は底径8.1cm、外面は丁寧なナデ調整。7は陶器で茶色の胎土に薄く透明釉を掛けている。底径18cm。8は表土か出土した管状土錘。全長3.8cm、膨らんだ中央部幅1.3cm、孔径2.5mm。9の復元直径は2.7cm、厚さ4.7mmであることから紡錘車としては小さく軽い。

Fig. 5　根石を持つピット

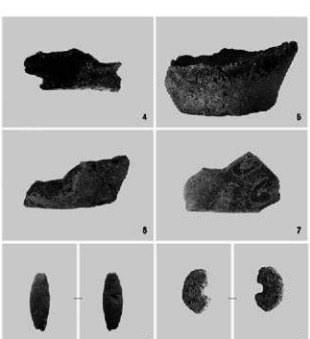


Fig. 6　表土層の遺物

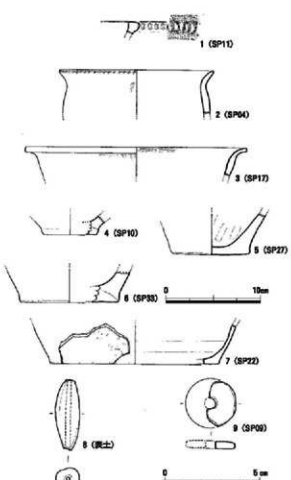


Fig. 7　表土層の遺物（縮尺1／2　1／4）

SC02　発掘区の南西隅に二段の掘り込みがあり、ベッドと壁と思われることから竪穴住居跡とした。南東端でほぼ直角に曲がっており、ここがコーナーであろう。もう一方の端部は隣地とのブロック塀で壊され全長を測ることは出来ない。現在長は4.88m、直線ではあるがわずかに内側に湾曲している。この壁より深さ約37cmにベッドがある。幅約100cmで壁に平行に削り出しており、床面からは約16cm高い。壁、ベッドとも溝はない。ベッドと壁にピットが数個見られるが、この住居跡の主柱穴とは思えない。これらのことから方形プランの竪穴住居跡と分かる。しかし大きさ、柱穴、炉などの有無や配置については明らかに出来ない。また住居跡床面、ベッド上から時期を直接示すような遺物は出土しなかった。同じ突出部の周辺調査では、東側斜面において弥生時代終末から古墳時代6世紀代に竪穴住居跡が発掘されており、本調査例によって西側斜面にも営まれていたことが判明した。ここでは埋土上部から出土した遺物について記す。

出土遺物　1は牛角形の甑把手。湾曲は弱く、断面は扁楕円形。2は住居跡攪乱出土。糸切り底の土師皿、底径5.8cm。3は表土出土の青磁小碗。復元口径11.8cmで内外面とも細かな貫入がある。4は土師質土器のこね鉢。口径29.6cm、堅緻な焼成となっている。口縁内に粘土紐を貼り付けて肥厚させ、上面は平坦に近い。表面は風化磨耗

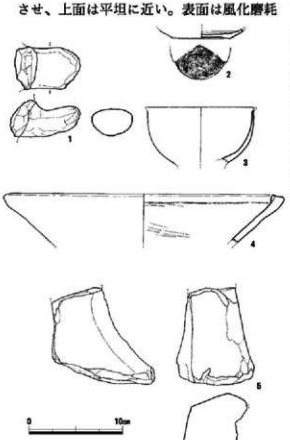


Fig. 9　住居跡SC02上の遺物（縮尺1／4）

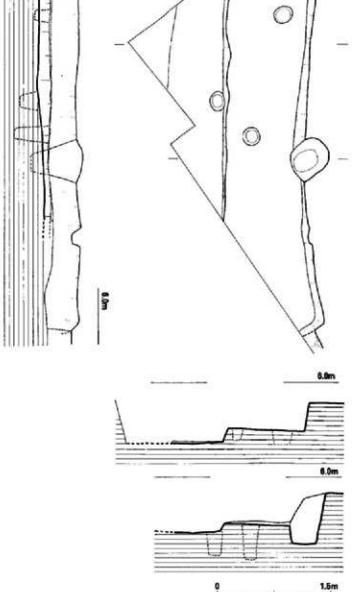


Fig. 8　住居跡SC02図（縮尺1／50）

Fig. 10　住居跡SC02（北西から）

し痘痕状に剥離しているが、内面には右下がりの擦目が数条残っている。擂鉢縦の方向の条線はない。5は砂岩製の砥石。2面の研ぎ面はよく使い込んでいる。今は省形となって安定感がないことから、破損品であろう。

土壙SK

発掘区の北東隅で主軸方向をほぼ同じくして並んでいる。南側よりSK01、02、03と呼んだ。他に東壁際にも落ち込みがあるが、本体部が東側隣地に延びて全形がつかめない。貯蔵穴の可能性もあるが性格や時期を判断するような遺物も出土しなかったことから、ここでは取り上げない。SK01は無遺物、SK02、03からは近世陶磁器が出土している。2基の長軸が同じで墓壙も考えたが、墓としては1m前後と小さく、断定出来なかった。

SK01　貯蔵穴SU01を切って掘り込まれている。長軸99cm、短軸88cmでわずかに南北に長い平面プランである。四隅は丸みを持ち、底面も同様である。壁は直線的に直に近く、深さは49cmである。底面は北短辺側に5cm程深さを増している。切り合いからSU01後の遺構と分かるが、出土遺物はなく時期不明。主軸方向はN-9°-W。

SK02　SK01より北側に約40cmにあり、主軸方向が一致することから、切り離さないで実測、図化している。平面プランは隅丸長方形で、長軸118cm、短軸90cmなのでSK01より一回り大きめである。46cmの深さなのでほとんど差がない。底面には南側短辺に偏って36cm×28cm、深さ8cmの楕円形ピッ

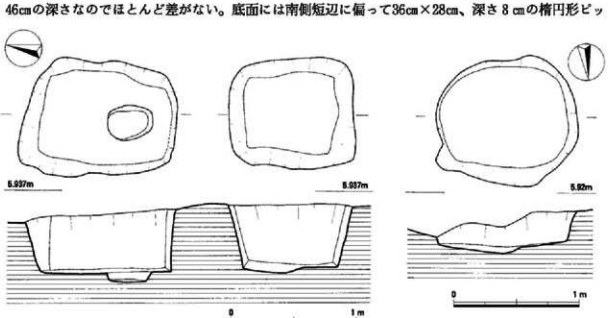
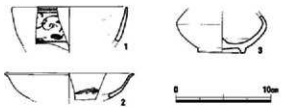


Fig. 11　土壙SK01、02、03図（縮尺1／30）

トがある。墳内埋土の土層観察をしていないのでピットが何処の面から掘り込まれたのか、あるいはSK02に伴うものか判然としないが、埋土の発掘では、上部から掘り込んだような土質の変化や痕跡は認められなかった。底面にピットがある類似土壙は、有田遺跡群では第168次調査のSK08、18、28がある。同報告書では貯蔵穴の可能性も考えられている。



出土遺物　埋土より出土した陶磁器3点を図示した。1は口径12.2cmの染付白磁碗。口縁部外面に2本、下方に1本の条線を巡らしその間に蔓草様の文様を描いている。コバルトの発色は悪いが、いかにも手慣れた描き方である。2は染付白磁皿。口径15.6cmで見込み内面だけに竹葉様の粗雑な文様がある。発色は悪くない。3は茶色胎土の陶器。断面方形の高台に玉葱形の胴部が付く。灰色釉を内外面と高台内にも施釉している。内底には、ロクロ成形時の粘土の残りが突出している。上半部を欠いているので全形が分からないが仏具か。

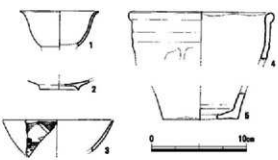


Fig. 12　土壙SK02、03の遺物（縮尺1／4）

SK03　上面プランは長軸112cm、短軸99cmで両短辺側が丸るものの、長辺が丸みが弱く平行することから隅丸長方形プランとした。だが壁はると東側が浅く削平されており本来は上面も楕円形だったのであろう。西側壁の高さは24cm。壙底は平坦ではなく東側に深くなっている。

出土遺物　1は口径8.2cmの白磁碗。灰白色の胎土に透明釉を全面に掛けている。器壁は薄手の作りで細かな貫入がある。2は高台部の破片。高台径は4cm、透明釉は高台畳付だけが無釉。3は染付白磁で口径11.8cmの碗。白色胎土は不純物なく、均一に施釉されている。外面の文様は富士に雲か。4、5は陶器。4は口径15.4cmの深鉢。口縁部は断面円形に肥厚させている。茶色の胎土は緻密。内面から外面上半部に濃茶色釉を掛けているが、下半部は露胎。外面にはロクロ成形で微妙な凹凸がる。5は底径7.8cm、内外面ともにロクロ成形で凹凸が目立つ。胎土は灰色で堅い焼成となっている。外面は褐色釉で内面と外底は施釉されていない。

Fig. 13　土壙SK01、02、03（南から）

貯蔵穴SU

SU01　SK01より壁の一部が切られ、また上部が相当削平されていると思われる。平面プランは225cm×209cmで、やや南北に長い円形。断面は袋状、底面は265cm×254cmと上面より円形に近い。検出面からの深さは59cm。掘り込まれた壁の湾曲から上部を推定復元すると、間もなく上方で屈曲して入り口部が狭まるフラスコ状の断面だったのであろう。底面は中央部がわずかに凹んでいるもののほぼ平坦で、その周縁壁際に偏って大きめの土器破片が出土した。埋土の

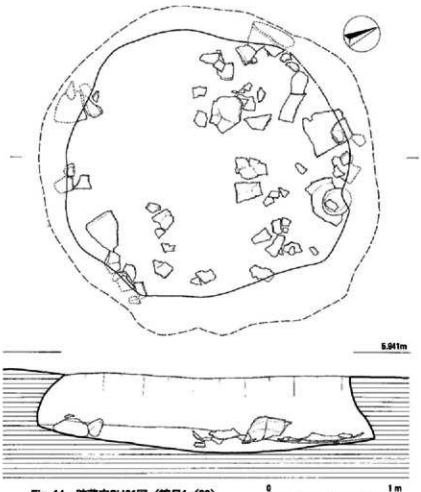


Fig. 14　貯蔵穴SU01図（縮尺1／30）

Fig. 15　貯蔵穴SU01（西から）

遺物は掘り下げに従って取り上げ、底面直上の遺物を残して撮影、図化した。遺物はA～Iの9ブロックに分けて取り上げ、図では番号の後に出土ブロックを記している。埋土出土の遺物には番号のみの表記とし、これら全部でコンテナ5箱分となった。土器の器種は、壺、甕が多く、鉢が数点見られる。大きい破片であることから接合が可能で、相当数の完形品が出来ると期待したが、壺2個と甕1個に止まった。このことからは使用中の貯蔵穴がそのまま埋もれたのではなく、役目を終えた貯蔵穴に破損した土器類を投棄したと推測した。

出土遺物

出土した遺物は細片でも可能な限り実測に努め、土器42点、石器1点をここに図示する。土器は、時期、器種ごとに分類し、正確にカウントしてその個体数を出し、その比率に応じて実測点数を決めたわけではない。しかし口縁部や底部など特徴的な破片は、ほぼ漏らさず実測したので、大まかな比率は反映しているものと思う。

土器　1～10は壺。1、2は破片数点が欠けているがほぼ完形品。1は口径24cm、器高41cm、底径10.6cm。円盤状平底に上部に張りを持つ胴部がつく。頸部は緩やかに湾曲しながら内傾し、肥厚しないまま強く外湾して口縁部となる。胴部と頸部の境は鈍い沈線状となっている。外面は細かな横ミガキ調整を加えて

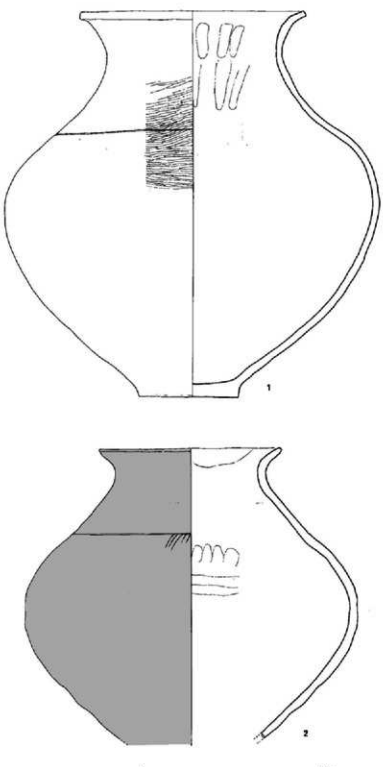


Fig. 16　貯蔵穴SU01の遺物（縮尺1／4）

いる。2は口径38.4cmで、底部を欠いている。1よりもやや小型で、胴部最大径の位置がほぼ中央にある。また頸部も内傾が強く延びも短いことから全体に潰れたような姿である。風化が進んでいるが、外面には丹塗りが施されている。3～6は壺の頸部から口縁部。3は精良胎土の小型壺で、口径9cm。胴、頸、口縁部には段や沈線はなく明瞭な境を作らない。しかし胴と頸部との内面には粘土が残り、その接合が分かる。外面は丹塗り。4、5の口径は18.4cm、19.4cm。口縁部端の断面がやや異なるが、共に口縁部を肥厚させ、内面は細かなミガキを加えている。6は大きく外湾する口縁部片。内面に粘土を加え肥厚させ、端部は蒲状断面で、その上下に細かな刻み目を加えている。7～10は壺胴部。7は小破片のために傾きや胴部の位置が明確ではないが、ここでは胴上半部で頸部との境に5本の沈線が巡っているとした。8、9は大きさは異なるが最大径を中央部に持つ胴部。8の最大径は29.6cm。小砂粒を含んでいるが精良土に近い胎土で。内外面とも薄茶色を呈する。器面調整はナデ上げでミガキは認められない。9はやや大きく最大径は35.8cm。頸部との境に鈍い沈線を巡らせ、その下方に5本の沈線による重弧文を連続している。外面は丹塗り。10は胴部最大径が45.2cmで1よりも大きく、張りの強い玉葱状の器形である。頸部との境は沈線ではなく微かな段を設けている。胴下半部は砂粒露出、外面には丹塗り痕はない。11～16は壺底部。11は円盤状で径は5.4cm、高さは約0.9cm。平底ではなくわずかに上げ底になっている。薄い器壁の胴部は上半部を欠くが、整った球形となるのだろう。器外面は幅広の横ミガキ、内面は丁寧なナデ調整。外面には底部にかけて黒斑が付いている。12の底径は6.8cm。底部は円盤状ではなく、そのまま胴部が延びる。外面は剥離し2～3㎜の砂粒が露出している。13は平底でやや厚みがある。底径7.2cmで、断面に粘土接合が観察できる。14の外面は丁寧な横ミガキを底部まで加えている。胎土は精良で、外面は薄茶色、焼成も良い。底径8.4cm。15は底径10.2cmで、その周縁を丸くしているので、上方に上がったような形状となっている。16は底径8.4cmで図化したが、破片のために傾きと共に不正確。器面の調整は外面はナデ、内面はナデ上げ。色調は薄茶色。17は最も厚みがある。内面は細かなナデ調整で滑らかな器面となっている。外面は細い幅の工具で横ナデしている。底径10.1cm。器壁に5㎜大の砂粒を含んでいるが、粗い胎土ではない。18の底径は11.4cmあることから1よりも大きい器形だったのだろう。内面に指押さえ痕、外面は左斜行のナデ上げ調整。

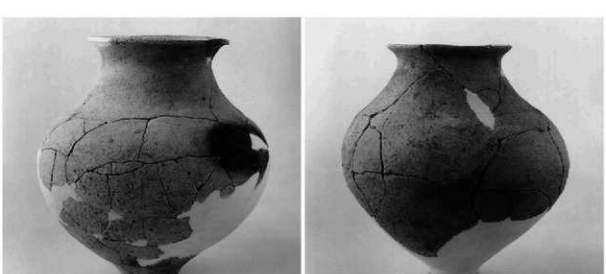


Fig. 17　貯蔵穴SU01の遺物

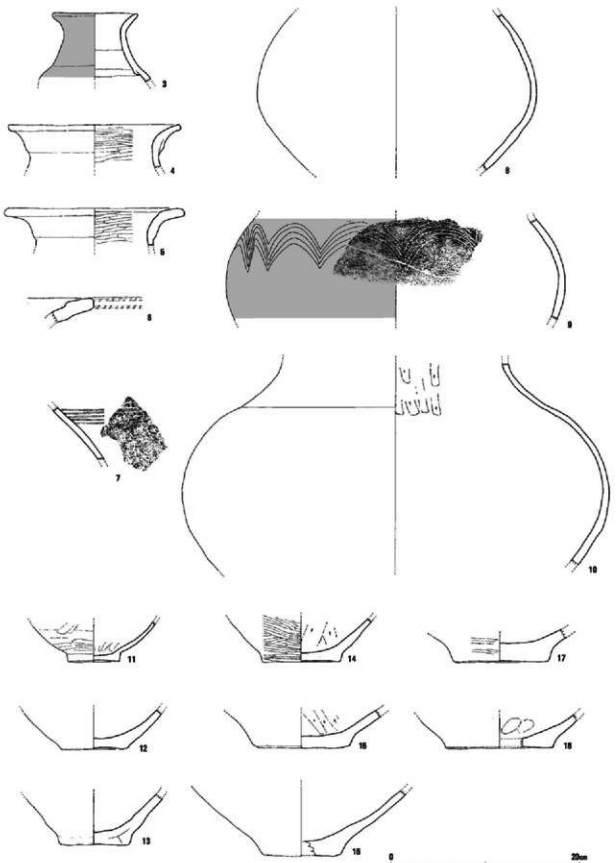


Fig. 18　貯蔵穴SU01の遺物（縮尺1／4）

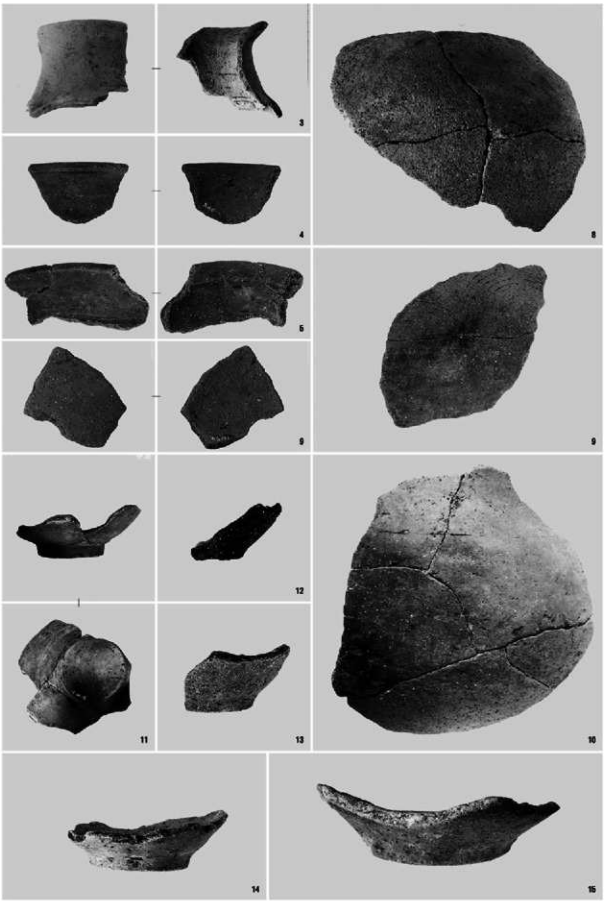


Fig. 19　貯蔵穴SU01の遺物

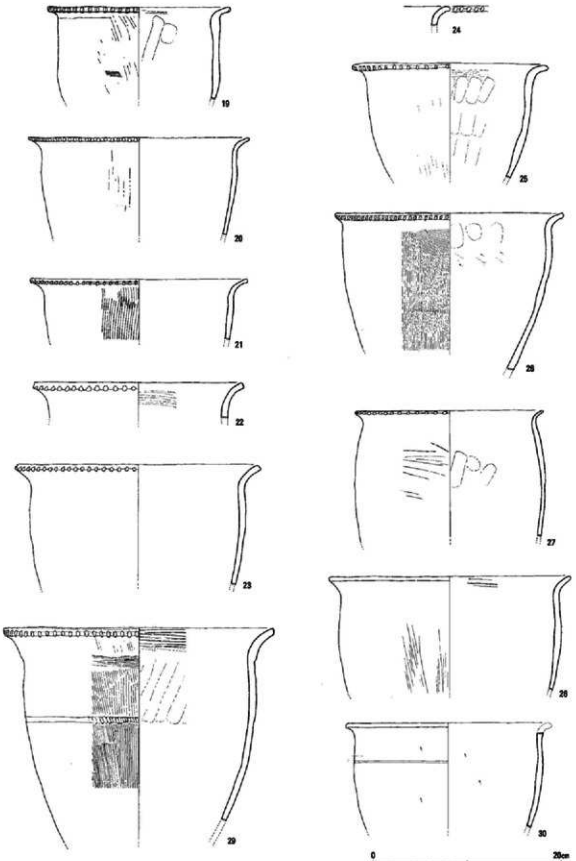
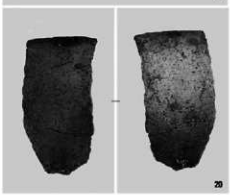


Fig. 20　貯蔵穴SU01の遺物（縮尺1／4）

19


20

21

23

24

Fig. 21　貯蔵穴SU01の遺物

19～32は甕。口縁部の形状、刻み目の有無、体部の張り、器面の調整法、口縁部下方の沈線や凸帯などそれぞれ特徴があるが、図化した点数が15点と少ないことからここではあえて分類していない。19は口径19.4cm、体部はほぼ真っ直ぐに立ち、如意形に外反する口縁部が付く。その屈曲は強く、また短い。口縁端部の断面は丸みがあり、縦の刻み目は入れている。その断面から右方向より深く切り込んだことが分かる。器壁は均一の厚さではなく、特に屈曲部に厚みがある。20は口径23.2cm、体部上半にかすかな膨らみがある。1に比べ如意形口縁部は緩やかに湾曲し長い。端部の刻み目は上下に渡る。器面の調整は、口縁部が横ナデ、体部外面は上下のナデ。内面には炭化物は付着していないが、底部に近いほど黒みを増しており煮炊きの結果であろう。21は口径23cm、如意形口縁の端部が丸く肥厚し、その下方に片寄って刻み目を施す。体部外面は縦ハケ目調整、内面は砂粒露出。22の口縁部は緩やかに湾曲したまま端部を方形断面におさめる。丸みのある刻み目は下端から中位までで上端には達していない。湾曲部内面には粗い横ハケ目が残っている。口径22.4cm。23は口縁部で14cmの大きめの破片。2よりも体部に張りがある。口径26cm、外面のほとんどは黒斑が占める。刻み目は口縁に対して直に刻んでいる。内外面とも丁寧なナデ調整。24は5cm足らずの小破片。刻み目が明瞭であったことから図化した。内面下方に黒斑が見られる。25、26の如意形口縁部は短い。25の口径は20.6cm、刻み目は上端まで達していない。屈曲部内面は粗い横ハケ目後に横ナデ調整を加えている。この下方には縦長の指押さえ痕が横に並んでいる。26は口径24.1cmで正円に近く、ほとんど水平で歪みもなく、波打ってもいない。刻み目は間隔が狭く、わずかに右に傾いている。外面には細かな縦ハケ目が全面に密に施されている。27の体部中位に張りがあり、その最大径は口径19.6cmと同じである。口縁部は薄手の作りで、先端は細くなっている。刻み目は丸みがあり間隔が広い。28は口径25.6cmと大きめの器形で、刻み目を持たない。胎土に小砂粒を含み、堅い焼成である。口縁部は横ナデ調整で、内面に条痕状に調整痕が見られる。29も大きめの器形で口縁部には歪みがあり、29.1cm×28.4cmを測る。如意形口縁部は厚みを加え体部と明らかな段を作っている。さらにここから約6.5cm下方には逆時計回りに工具を押しつけて段を作っている。器面調整は口縁部内面が粗い横ハケ目、体部外面は縦ハケ目で、下半部は数回重ねている。32cmの器高に復元して撮影している。30は3片が接合出来たが口縁部

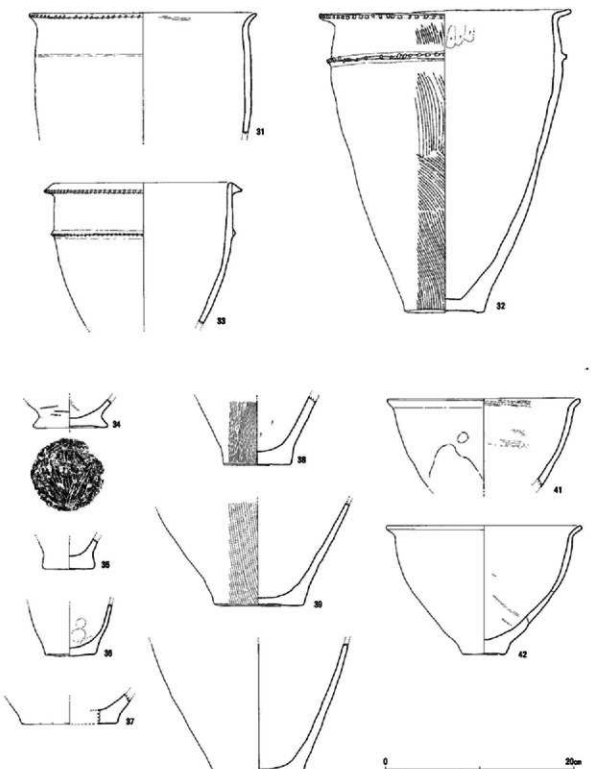


Fig. 22　貯蔵穴SU01の遺物（縮尺1／4）

を欠く。口径は22㎝前後か。体部上方に１条の沈線を巡らせているのが特徴である。器面は内外面とも左上がりのナデ調整。31の口縁部は短い如意形で、刻み目は細く小さい。口径24㎝、口縁部下方約4.5㎝に浅い沈線を１条巡らしている。30と同じような色調、胎土であるが同一個体ではない。32は口径26.8㎝、底径8.5㎝、器高33.3㎝の完形品。底部は周縁部が幅約１㎝の輪状になり、中央がわずかに凹む。体部は砲弾状に立ち上がり、上方でやや内傾してＬ字形に直線的に屈曲する口縁部が付く。体部屈曲部に断面台形凸帯を１本貼り付けているが、水平ではない。口縁部端と凸帯には粗い刻み目を加えている。外面は粗雑な縦ハケ目調整、内底付近は煮炊きのためか黒変している。調査後、接合復元し実測を済ませ、他の遺物と一緒に埋蔵文化財センターに仮収蔵していたが、保管棚が不明になり今回撮影が出来なかった。33も口縁部下方に突帯を１本巡らし、口縁部にも刻み目を入れるなど同じような特徴を持っているが、口縁部の作りや突帯の断面など異なることも多い。他の口縁部が如意形かＬ字形であるのに対し、断面三角形の粘土を貼り付け厚みのある特異な口縁部を作っている。また体部の突帯も同じように断面三角形の粘土紐を貼り付けている。外面にはこの突帯から底部に向かって煤が付着している。口径20.8㎝。34～40は甕の底部。34は突帯文土器の底部で外縁が突出している。底径7.8㎝、外面や外底には条痕が残る。35は底径5.4㎝であることから、小型甕か他の器種の底部であろう。36も体部への移行が開かず膨らみながら延びていることから小型の器種となる。底径5.3㎝。内面に指押さえ痕が見られる。37は小片であるが体部の開きから甕とした。底径10㎝。38～40は同じような傾きで開いている。底径は7.3㎝、9.8㎝、８㎝。37、38の外面は縦ハケ目調整、39は磨耗し調整痕不明。41と42は鉢。41の口径は20.4㎝。口縁部は小さく外反、丸みのある断面となる。外面下半部に黒斑がある。42は口径20.6㎝、底径4.7㎝、器高13.7㎝。41と同じような器形であるが、口縁部の延びや内面の調整が異なる。体部２か所で粘土接合が認められる。胎土に砂粒を多く含み、堅い焼成となっている。

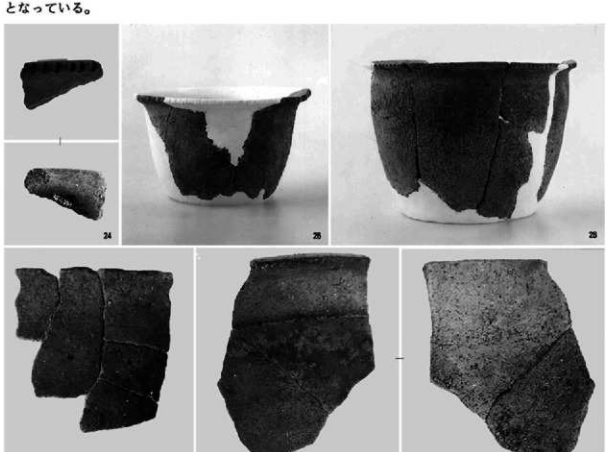


Fig. 23　貯蔵穴SU01の遺物

Fig. 24　貯蔵穴SU01の遺物

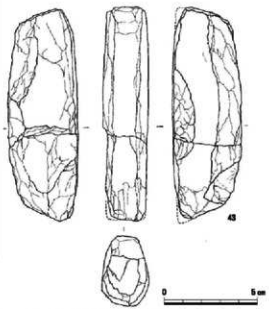


Fig. 25　貯蔵穴SU01の遺物（縮尺1／2）

石器　43は柱状片刃石斧で灰白色の粘板岩を素材としている。長さ11.14cm、断面は台形。厚さ2.35cm。幅3.5cm。刃部、側面、背ともによく研磨されているが、剥離が激しく鋭利さが失われている。この他に図示していないが長さ8.8cm、幅5.4cm、厚さ5.6cmの黒曜石原石が出土した。特別な敲打痕はない。

4．小　結

狭い面積ながら今回の調査によって竪穴住居跡1（＋1）軒、土壙3基、貯蔵穴1基を検出した。本調査地がある突出部は、先述したように台地中央部周辺と並んで最も調査が集中している。この突出部での弥生時代集落を構成する住居跡、貯蔵穴、甕棺墓地の立地関係が明らかになりつつある。竪穴住居跡は第64次、106次、107次、125次、143次で検出され、第16次と合わせると計6軒となる。これらの内5軒は大きく削平され壁が残っていないが、柱穴の配置から円形プランと判断される。出土は少ないが、弥生時代前期後半から中期後半頃と考えられている。検出した住居跡は約50m以上もの間隔があり、一か所に集中していない。計44基の甕棺墓数、さらに青銅鏡を所有、副葬した被葬者の存在を考えると、集落はさらに多くの住居軒数で構成されていたはずである。各住居跡が突出部の中程から南側に散在している事は、逆に一大集落の存在を物語るのかも知れない。

貯蔵穴は、第16次の他に、第121次、177次、106次、213次などで確認されている。ほぼ住居跡の分布と重なり、住居跡に近接した位置、住空間の必要施設だった事を示している。ただ住居跡よりも深く掘り込まれたにしては、検出基数の少なさが気になるが、貯蔵穴の時期が、弥生時代前期後半を中心に限られるのは、貯蔵、保管方法の変化の結果とすれば、妥当な検出基数とも言えよう。

甕棺墓は、第36次、64次、86次、121次、175次で計44基が検出されている。すでにこの甕棺墓地の形成や変遷、そして副葬品についての細かな分析、検討が行われている。それによると、弥生時代前期末に尾根近くに埋葬が始まり、次第に東斜面に下がりながら広がり、後期初頭には副葬品を持つ甕棺墓が尾根線上の高所に隔絶して埋葬されている。墓域は突出部尾根線上から東斜面の東西約60m、南北40m以上の面積を占め、住居跡とは一部重なるものの、集落の北側に寄っている。墓地の変遷や展開を、住居跡でも同じように言及出来るといいのだが、先述したように検出軒数が少なく、まだ弥生時代全時期が揃っていない。有田遺跡群の甕棺墓地はこの他に6か所で知られているが、他所でも同様である。特に台地高所部での環溝の全貌は見えてきたが、依然として住居跡、貯蔵穴、墓地、そして生産基盤の水田跡などと関連づけて集落全体を語れるまでには残念ながら至っていない。

第171次調査

1．調査に至る経緯

第171次調査区は、小田部一丁目104・517に位置し、平成４（1992）年３月４日に地権者の瀬知敬一氏より、住宅および歯科医院の建設に先立って埋蔵文化財の有無確認の事前審査願いが提出された。申請地は、有田遺跡群北東部の台地上にあり遺構の存在が予想されることから、平成５（1993）年３月11日に遺構確認の試掘調査を実施した。その結果、申請地の東側は大きく削平されて遺構は存在しないが、西側には客土下に古墳時代後期の須恵器や鉄滓を包蔵する遺物包含層があり、更に包含層下のローム層上で柱穴などの遺構を検出した。そのため建物の基礎によって遺構の破壊される申請地の西側を発掘調査を実施して記録保存を図ることになった。発掘調査は、平成５（1993）年４月４日に開始し、４月14日にすべての機材を撤収して終了した。

調査組織

調査委託　瀬知敬一

調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第１係
　課　長　折尾　学（平成５年度）　山口譲治（平成17年度）
　係　長　山崎純男（平成５年度）　山崎龍雄（平成17年度）

調査担当　埋蔵文化財課第２係　小林義彦

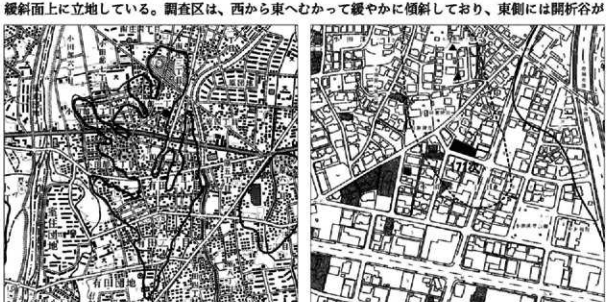
調査庶務　吉田真由美（平成５年度）　鈴木由喜（平成17年度）

発掘調査や資料整理および報告書の作成にあたっては、多くの方々のご理解とご協力をいただいた。従事していただいた人々の労苦に改めて感謝します。

2．調査地の位置と立地（Fig．１・２）

有田遺跡群は、早良平野を北流する室見川の右岸下流域にある有田・小田部の台地上に立地し、その最高所は13mである。この独立台地上には、弥生時代の環濠集落跡や古墳時代の大型建物跡を中心にして旧石器時代から中近世まで各時代の遺構が複合して展開している。

本調査地は、この有田・小田部台地の北東部に位置し、北にむかって八ツ手状にのびる支丘の東側緩斜面上に立地している。調査区は、西から東へむかって緩やかに傾斜しており、東側には開析谷が



Fig．１　第171次調査地の位置（縮尺１／25,000　１／5,000）

深く貫入している。周辺には第162・163次調査区などがあり、古墳時代～中世の竪穴住居跡や溝などが検出されている。

3．遺構と遺物（Fig. 3・4 ）

本調査区内では、40～90cmの厚い客土層下で須恵器や鉄滓を包蔵する約40cmの褐色土層を検出し、この遺物包含層下で遺構の掘り込まれた黄灰色のローム面を確認した。この地山面からは、15基の土壙のほかに溝や柱穴を検出したが、調査区域が狭小なために各遺構の全体的な拡がりや様相など不明な点が多い。

1）土　壙（SK）

土壙は、15基を検出した。これらの土壙は、調査区の全域にわたって拡がっているが西側域に比較的まとまって分布する傾向がある反面、東側はやや稀薄になる。また、プラン的には円～楕円形のものと方形のものに大別されるが、鉄滓塊を出土した1基を除いて機能を推考し得るものは少ない。

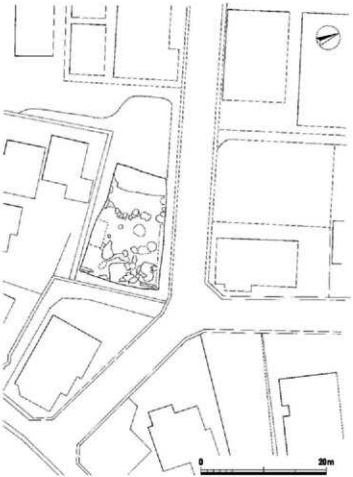


Fig. 2　第171次調査区周辺現況図（1／600）

Fig. 3　調査区全景（南より）

1号土壙　SK-01（Fig. 5・6 ）

1号土壙は、調査区西辺の中央部にある大型の方形土壙で、南壁は17号土壙の埋没後に掘り込まれている。平面形は、西壁が調査区外に拡がるために明らかではないが、一辺が約340cm程の隅丸方形プランになろう。壁面は、深さが約55cmでほぼ垂直に立ち上がる。床面には、基盤層の黄褐色粘土が2～4cmの厚さで貼床状に敷き固められ、中央部は浅く凹レンズ状に窪んでいる。また、南壁際と北西隅には直径が45～50cmと30cmほどのピットが掘り込まれている。規模的にはやや狭小であるが、貼床状をなす床面等を勘案すると住居跡の可能性も考えられなくもない。

覆土中からは、須恵器や土師器の甕のほかに甑の把手や黒曜石片、鉄滓などが出土した。

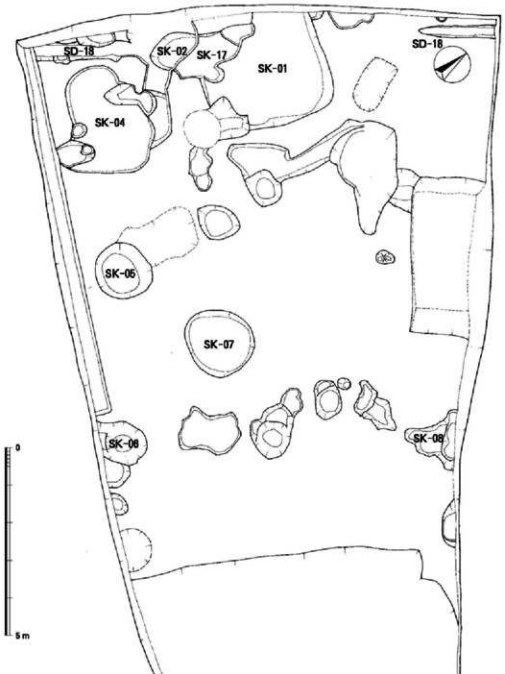


Fig. 4　遺構配置図（1／100）

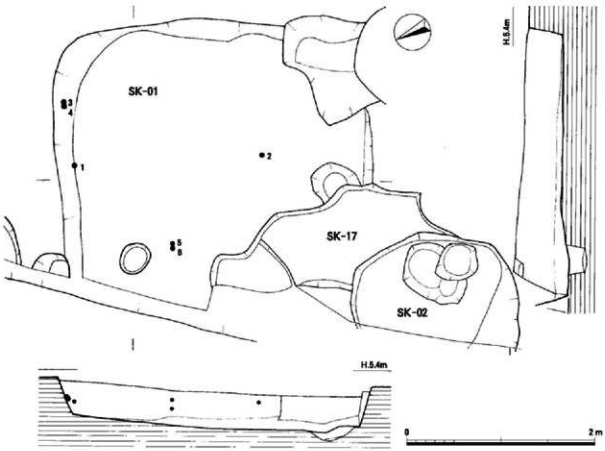


Fig. 5　1号土壙実測図（1／40）

出土遺物（Fig. 19・20）

1は小型丸底壷の底部で、現存高は4.5cmである。内外面ともナデ調整で、内底面は指頭押圧。胎土には細～小砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は内面が褐灰色、外面は明灰褐色で2次焼成による赤変がある。2～6は土師器甕である。2は口縁部が短く外反する甕で、口径は15cm、器高は14.1cmになろう。倒卵形の胴部は肉厚で、丸底ぎみの小さな底部がつく。調整は内底面が押圧ナデ、胴部はヘラケズリ。胎土は良質で小砂粒を含む。色調は外面がにぶい橙色、内面は褐灰色。3は口径が15.8cm、器高は18.6cm。口縁部は短く外反し、球形の胴部は薄く堅緻である。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面がハケ目後にナデ、内面はタテヘラケズリ。胎土には砂粒と雲母微細を多く含み、浅黄橙色。4は口径が14cmで、口縁部は短く外反し、胴部は張りの弱い短球形をなす。口縁部はヨコナデ、胴部は内外ともナデ調整。胎土は砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調は淡褐灰色で外面は二次焼成による赤変がある。5は口径が24.3cmの中型甕で、口縁部は短く「く」

Fig. 6　1号土壙全景（西より）

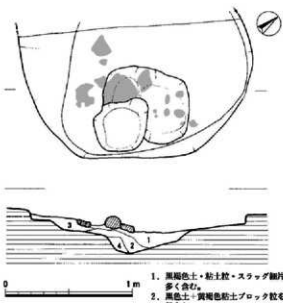


Fig. 7　2号土壙実測図（1/30）

Fig. 8　2号土壙全景（東より）

字状に外反する。調整は、口縁部がヨコナデ。胴部は外面が粗いタテのハケ目で、内面はナデ後にヘラケズリ。胎土は小砂粒と雲母微細を含み焼成は良好。色調は外面が灰黄褐色、内面は褐灰色。6は丸底の胴部で、胎土や調整は5と酷似しており同一個体と考えられる。

2号土壙　SK-02（Fig. 7・8）

2号土壙は、調査区西縁の南寄りにある小型の土壙で、1号土壙の南西隅に接した17号土壙上に位置している。西辺が調査区外に拡がるために全容は明らかでないが直径が180cmほどの円形プランをなそう。底面にはピット状の浅い凹みがあり、南側には平坦面を造り出して2段掘り状の構造をなしている。この浅いピット状の凹みの壁面には加熱による赤変があり、その上面には鉄滓が集中的に拡がっていた。一方、外壁は垂直に立ち上がっている。出土した遺物は鉄滓のみで、底面の状況等を勘案すると鍛冶炉的な機能が想起されよう。

4号土壙　SK-04（Fig. 9・10）

4号土壙は、調査区の南西隅にある大型の土壙で、1号土壙のすぐ南に隣接して位置している。平面形は、長軸が285cm、短軸が200cmを測るやや不整な隅丸長方形プランを呈する。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁高は10～15cmである。底面は中央部が大きく凹レンズ状に窪み、西壁側は2段掘り状に1段高くなっている。覆土は、黒色の強い暗褐色土の単一層で黄褐色粘土ブロックを含んでいる。遺物は、弥生土器や土師器、須恵器の甕の外に鉄滓が出土している。

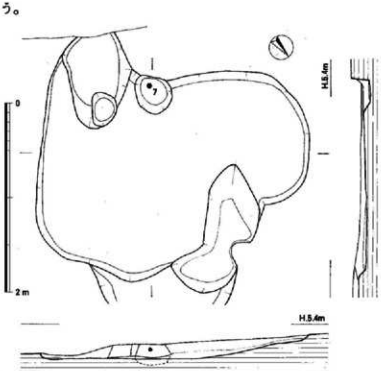


Fig. 9　4号土壙実測図（1/40）

出土遺物（Fig. 19・20）

7は口径が19cmの土師器甕である。口縁部は、小さく直口して短く外反

し、胴部は球形をなそう。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面がタテハケ目、内面は粗いヘラケズリ。胎土は小～粗砂粒と雲母微細を含む、焼成は良好。色調は淡黄橙色。

8は基部端を欠く黒曜石の打製石鏃で、正三角形をなす。基部幅は18㎜、長さは17㎜になろう。

5号土壙　SK-05（Fig. 11・12）

5号土壙は、調査区南壁際の中央部に位置し、東へ1ｍの距離には4号土壙が隣接している。平面形は、東西長が147㎝、南北長が142㎝の円形プランを呈する。深さ65㎝の壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなしている。底面は、浅く窪んだ凹レンズ状をなしている。覆土は、暗茶褐色土の単一層で、遺物は土師器の甕・高坏と須恵器甕・蓋片の外に黒曜石片が出土した。

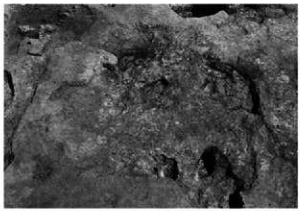


Fig. 10　4号土壙全景（南より）

6号土壙　SK-06（Fig. 11・13）

6号土壙は、調査区の南東縁にある小型の土壙で、北へ約2ｍの距離には7号土壙が位置している。現況は、南壁側が2段掘り状の構造をなす楕円形プランを呈しているが、本来は東西長が110㎝のやや不整な円形プランを呈するものと考えられる。深さが30㎝の壁面は、緩やかに立ち上がり、底面は凹レンズ状に浅く窪んでいる。覆土は、茶～暗茶褐色土の単一層で、遺物は土師器と須恵器の甕片の外に鉄滓が出土した。

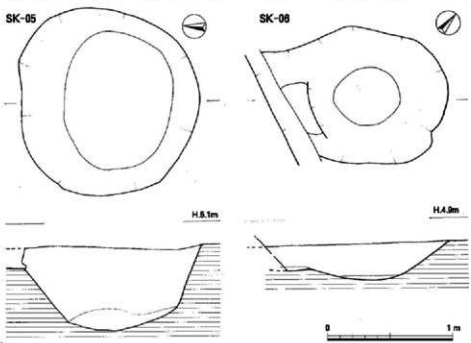


Fig. 11　5号・6号土壙実測図（1／30）

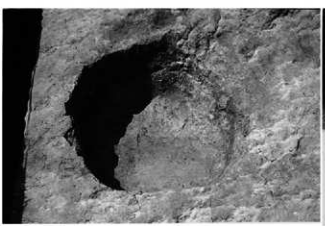


Fig. 12　5号土壙全景（東より）

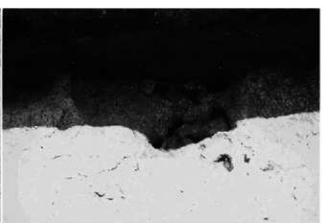


Fig. 13　6号土壙全景（北より）

7号土壙　SK-07（Fig. 14・15）

7号土壙は、調査区の中央部にある大型の土壙で、5号土壙から東へ約1.5mの距離に位置している。平面形は、長軸が186cm、短軸が170cmの卵形に近い楕円形プランをなし、主軸方位をほぼ東西にとる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40～45cmである。底面は、中央部を頂点として壁面に向かって浅く窪んでいる。覆土は上層が濃茶褐色土、下層が暗灰茶褐色土の2層で、中央部に向かって凹レンズ状に堆積している。遺物は、土師器や須恵器の甕・高坏・坏片の外に鉄滓が出土している。

8号土壙　SK-08（Fig. 14・16）

8号土壙は、調査区の北東縁にある土壙で、南へ約4mの距離には7号土壙が位置している。平面形は、北半部が調査区外に拡がっているために明らかではないが、東西長が165cm、南北長が70～80cmの長方形プランをなそう。壁面は急峻に立ち上がるが、底面から15cmほどの高さで屈曲して緩やかに立ち上がる。壁高は25cmである。底面は東壁下がもっとも深く、西壁側は浅い2段掘り状をなしている。南壁側の不整形な突出は8号土壙以前の浅い落ち込みと考えられる。覆土は粘土粒の混入した茶褐色土で、遺物は土師器片がわずかに出土している。

出土遺物（Fig. 20・21）

9は黒曜石の凹基式打製石鏃で、二等辺三角形をなしている。基部幅は12mm、長さは23mmである。

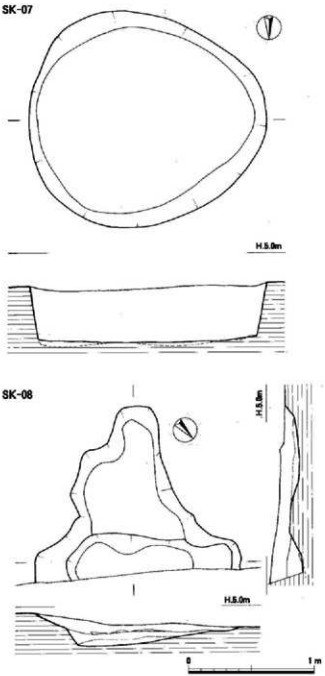


Fig. 14　7号・8号土壙実測図（1／30）

Fig. 15　7号土壙全景（東より）

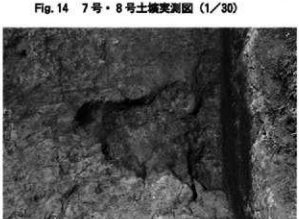


Fig. 16　8号土壙全景（東より）

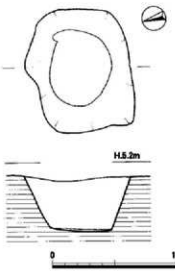


Fig. 17　12号土壙実測図（1／30）

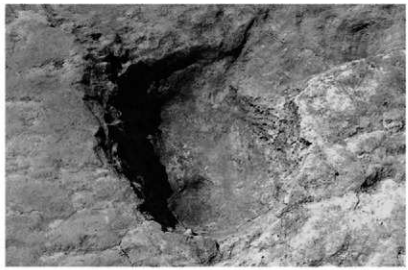


Fig. 18　12号土壙全景（東より）

12号土壙　SK-12（Fig. 17・18）

12号土壙は、調査区の中央部の西側にある小型の土壙で、1号土壙のすぐ東側に位置している。平面形は、長軸が97cm、短軸が83cmのやや不整な長方形プランをなしている。深さが45cmの壁面は急峻に立ち上がり、断面形は逆台形を呈している。底面は平坦であるが、中央部はわずかに凹レンズ状をなしている。覆土は黄茶褐色土で、下層は濃い褐色である。遺物は土師器片と須恵器片の外に鉄滓がわずかに出土した。

出土遺物（Fig. 20・21）

10は、口縁部が短く外反する土師器甕で胴部は張りの弱い球形をなす。器高は16.1cmで、口径は14.2cmになろう。調整は口縁部がヨコナデ。胴部は外面が粗いタテハケ目、内面はヘラケズリ後にナデで仕上げ、平底状の外底面はハケ目、内底面は指頭押圧ナデ。胎土は粗く砂粒と雲母を含み、焼成は良好。色調は外面が赤橙褐色、内面は橙～褐灰色。

17号土壙　SK-17（Fig. 4・19）

17号土壙は、調査区の中央部西縁に位置する土壙である。その大半が1号土壙と2号土壙によって大きく改変されており全容は判然としないが、主軸方位を南北にとる楕円形プランをなすものであろうか。覆土は、黄褐色粘土ブロックを含む褐色土で、遺物は出土していない。

Fig. 19　17号土壙全景（西より）

2）溝（SD）

溝遺構は、調査区の西壁際に沿って1条を検出した。規模的には狭くて浅い小溝的なもので、開削時の目的や機能および土壙等との繋がりについては判然としない。

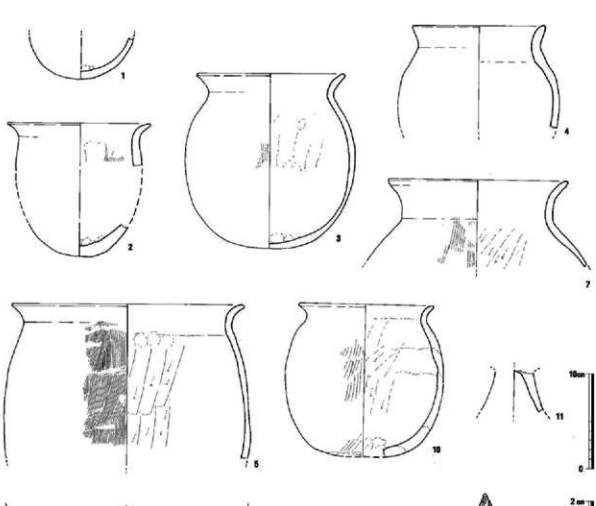


Fig. 20　出土遺物実測図（1／1・1／4）

18号溝　SD-18（Fig. 3・4）

18号溝は、調査区の西壁沿いに位置する南北方向の溝で、中央部は削平されて消失しているが本来は一連の溝として繋がっていたものと考えられる。北側の溝は幅が約35cm、深さは北端が5～7cmで2mほど南に向かって浅くなって消失している。一方、南側の溝は幅が約50cm、深さが9～12cmで北端は2号土壙と1号土壙によって削平されている。壁面は急峻に立ち上がり、断面形は逆台形を呈している。覆土は茶～暗褐色土で、遺物が出土していないために開削時期は明らかでない。

3）包含層出土の遺物

調査区には、建物跡や溝のほかに柱穴が検出された。また、遺構面の上層には褐色土の遺物包含層が堆積していた。この遺物包含層やピットから土師器や須恵器のほかに鉄滓などが出土しているが、包蔵される遺物は少ない。

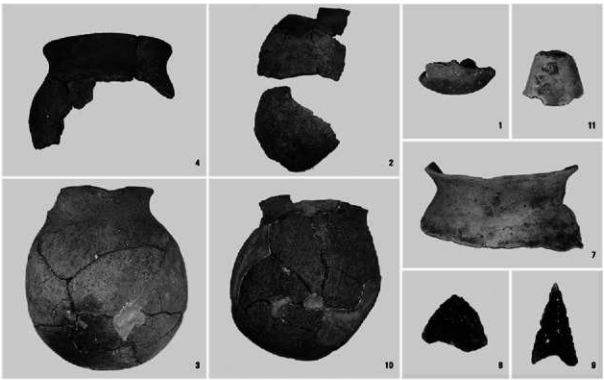


Fig. 21　出土遺物（1／1・1／4）

出土遺物（Fig. 20・21 ）

11は土師器高坏の脚基部である。基部径は 4 cm。脚は短くラッパ状に外反する。外面が丁寧なナデ、内面は押圧ナデ調整。胎土は精良で微細砂と雲母微細を多く含み、焼成は良好。色調は淡褐色。

4．小　結

有田遺跡群の第171次調査では、土壙や溝・柱穴などを検出したが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡など集落を主体的に構成する遺構は検出されなかった。このうち 1 号土壙は消極的ながらも住居跡の可能性を想起させるものである。また、2 号土壙の壙底から壁面には加熱による壁体の赤変があり、覆土には多くの鉄滓が混入していた。構造的に精錬炉とは考えがたく、鍛冶炉的な機能が考えやすい。これらのことは有田遺跡群内でも遺構の拡がりが比較的稀薄であった本調査区周辺において古墳時代～古代にかけての集落域の拡がりと機能および有田・小田部台地における意味を考える上でひとつの成果となるものである。古墳時代～古代の竪穴住居跡や溝などを検出した第162次調査や163次調査など周辺調査の成果を加味して検討することが求められる。

第183次調査

1　調査に至る経緯

平成8年8月8日付けで、松尾重樹氏より福岡市早良区有田2丁目24-16地内における事務所兼倉庫の建設工事について、文化財保護法第57条の2（現93条）に基づく埋蔵文化財事前審査申請（審査番号8-2-229）が福岡市埋蔵文化財課に提出された。申請地周辺は有田遺跡群として周知されている埋蔵文化財包蔵地であり、また周囲のそれまでの調査成果からは申請地にも比較的浅い深度に埋蔵文化財が存在する可能性があり、予定工事が埋蔵文化財に影響を与える可能性が懸念されたため、同年8月20日に現地の試掘調査を行った。その結果、表土直下のGL-20cmという浅い深度で遺構が検出された。予定工事は遺構に影響することが必至であり、埋蔵文化財課と申請者および工事関係者との協議の結果、工事予定範囲について記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を行うことで合意を得た。

発掘調査は平成8年8月26日の重機による表土剥ぎから行った。表土剥ぎについては、申請者の協力により表土掘削土をトラックで敷地外に持ち出すことになったため、調査予定範囲を一度に調査して調査期間の短縮をすることが出来た。調査は平成8年8月30日に終了した。なお整理作業と報告書作成については平成17年度に行っている。

2　調査の組織

調査委託　松尾重樹
調査主体　福岡市教育委員会
　教育長　町田英俊（平成8年度）　植木とみ子（平成17年度）
調査総括　文化財部埋蔵文化財課
　課長　荒巻輝勝（平成8年度）　山口譲治（平成17年度）
　第1係長　橋山邦継（平成8年度）　調査第1係長　山崎龍雄（平成17年度）
調査担当　久住猛雄（平成8年度は大規模事業等担当課、平成17年度は調査第1係）
調査庶務　埋蔵文化財課第1係　内野保基（平成8年度）
　文化財整備課管理係　鈴木由喜（平成17年度）

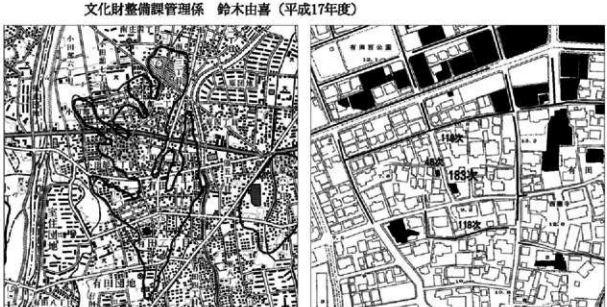


Fig. 1　第183次調査地の位置（1／25,000　1／4,000）

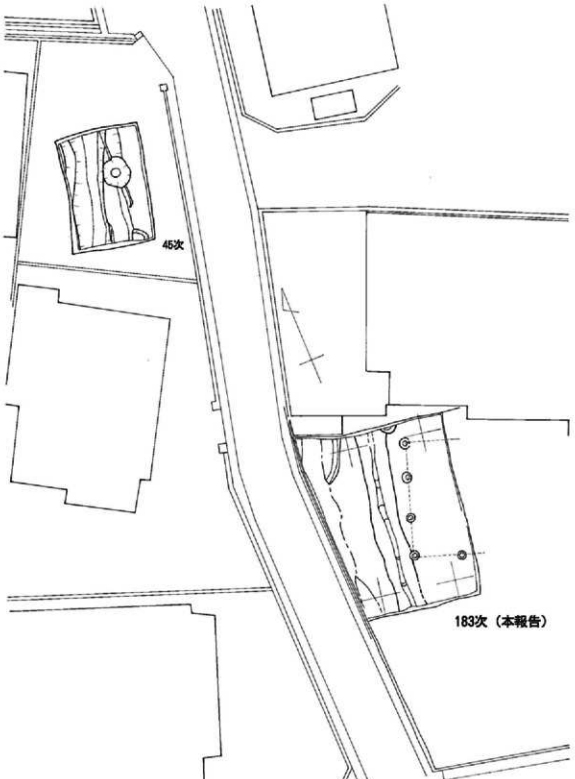


Fig. 2　第183次調査地とその周辺図（1／200）

なお、発掘調査での図面作成は菅波正人（当時埋蔵文化財課第１係）および北村幸子（当時調査補助員）の、整理作業での遺物の図化・分類については上方高広（埋蔵文化財課調査員）の協力を得た。

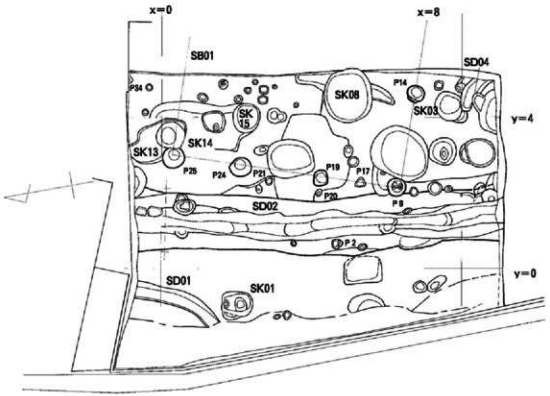


Fig. 3　第183次調査遺構配置図（1／100）

3　調査区の位置と立地

有田遺跡群は早良平野の北端部の八つ手状に複雑に出入りする独立段丘上に位置している。その最高所は標高約13mを測る。調査地は有田遺跡群の南西側に位置し（Fig. 1左）、戦国時代の小田部城推定地の北西100mにあたる。調査地付近は北が高く南に低い地勢であり、付近標高は10.0m前後である。道路をはさんで北西25mでは45次調査が行われており（福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集）、夜臼式系主体の板付Ⅰ式併行期に掘削された環濠の一部と中世（13世紀前後）の溝が検出されている（Fig. 2）。また下水道工事に伴い118次調査が付近の道路敷地内で行われている（Fig. 1右）。

4　調査の記録

(1)　調査の概要（Fig. 3）

遺構は表土・近年の盛土層・攪乱層を除去した旧地表GL-10～30cmの鳥栖ローム層上面で確認した。遺構検出面はほぼ平坦だが、西側の道路方向に向かって若干下がっている（西側道路は台地を切り通して一段低い）。検出した遺構は近世遺構（溝、土坑、埋設土器土坑、柱穴）ないしそれ以降の攪乱が多いが、一部に中世の柱穴がある。中世の柱穴は掘立柱建物に復元できた。総じて遺構の残存状況は悪く、近現代に削平されたとみられる。なお調査面積は66.0㎡である。出土遺物は総量約3箱で、大半は近世以降の陶磁器や土師質・瓦質の土器であるが、若干の中世の土師器や弥生土器などがある。

(2)　検出した主要遺構

SB01（Fig. 4、図版1－2）

調査区東半で検出した掘立柱建物。半分が調査区外東側となる。桁行3間（6.2m）×梁行推定2間（5.0m前後）。柱穴はいずれも比較的小さい円形で覆土は暗褐色土、近世遺構に切られる。P-25よ

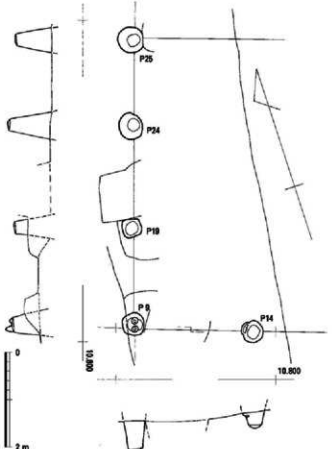


Fig. 4　掘立柱建物SB01（1／80）

り中世（13～14世紀？）頃の土師器皿片が出土し（Fig. 8 -15）、中世の建物であろう。

SD02（Fig. 3・5・6、図版2－3・4）

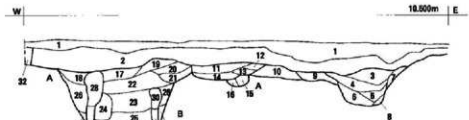
調査区中央で検出した南北溝。幅1.5m前後。断面は上半が緩やかな傾斜で、中央が箱形にやや深くなる。検出面からの深さは40～50cm。褐色土覆土主体。出土遺物から近世以降、近代に下がる可能性がある。

その他、SD01・04なども近世と考えられる。またSK03・13などは近世の土器埋設土坑であるいは便所遺構とも考えられる（図版2－5・6）。SK04は土層（Fig. 5）から木箱があった可能性がある土坑だが（時期は近世）、性格は不明である。

(3)　出土遺物（Fig. 7・8）

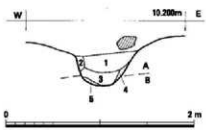
SD02出土遺物（Fig. 7－1～13）

1は小石原・高取焼系の竹徳利か。2は小石原・高取焼系？の小型甕。3は肥前系染付磁器（V期）の碗。17世紀前半～中頃。4は肥前系の京焼風陶器碗。高台は露胎。18世紀か。5は肥前系染付磁器皿。高台畳



1　表土、しまりなし、焼土・小礫など混ざる
2　近代以降の焼土または掘削土、小瓦礫・焼土・炭化物など混ざる
3　7.5YR3/3（＝7.5YR3/3～4/4）土、ややカサカサの土
4　5YR～7.5YR3/2土、ブロック状、しまりややあり
5　7.5YR3/3（～3/2）土、しまりあり
6　7.5YR3/3～5/3土、ややブロック状、しまりあり
7　地山ブロック5YR4/3～7.5YR4/4細かなブロック土、しまりややあり
8　7に近いが、黄色・白色粘質土地山ブロックと5YR4/2土混合
9　5YR4/2～4/3土、ブロック状、明灰褐色粘質土地山ブロック含む、しまりややあり
（一部極撹乱でしまりやや悪い）
10　7.5YR3/2～4/3粘質土、～褐色土、しまりあり、ブロック状
11　7.5YR4/2＋黄白色・明灰褐色土ブロック、ブロック状、しまりややあり
12　白色・黄褐色土ブロック＋7.5YR灰褐色土ブロック
13　7.5YR4/3～4/3粘質土、しまりあり、白色土ブロックあり
14　白色・黄褐色ブロック土＋7.5YR灰褐色土、しまりあり
15　5YR4/2～4/3土、白色土ブロック、褐色粒子少、柱痕？しまりあり
16　黄白色・黄褐色・7.5YR灰褐色土の混合
17　7.5YR3/3土、（根カクラン？）白色土ブロックあり、しまり悪い
18　7.5YR4/2～4/3土、ブロック状、褐色・白色土ブロック・粒子含む、しまりやや悪い
19　7.5YR5/6～4/4土、ブロック状、しまり悪い、褐色粒子含む
20　7.5YR4/3～3/3土、ブロック状、しまりやや悪い、白色・黄色土ブロック含む
21　7.5YR4/3～4/3土＋白色（黄色）ブロック土多く混合、ブロック状、しまりややあり
22　7.5YR3/2～4/2土＋褐色土（7.5YR5/6）＋褐白色土ブロック、しまりやや悪い、ブロック状
23・26　7.5YR（～5YR）3/2～3/2土＋黄褐色・白色土ブロック、混ぬた土、しまり（やや）あり
25・27　白色・黄色土ブロック主＋7.5YR4/2～3/2土、しまり（やや）あり、ブロック状
24　5YR5/6鳥居ローム大ブロック
28　5YR（～7.5YR）4/2～3/2土＋褐褐色ブロック、黒色木質土含む、しまり悪く、撹乱土状
29　7.5YR3/2土＋黒色木質土、しまりやや悪い、ブロック状
30　2.5YR～5 YR3/1土、しまりやや悪い、木質土？（＋褐色土・白色粒子ブロック含む）
31　5YR4/3～3/2粘質土＋黄褐・黄白色土ブロック
32　盛壁土、上部は表土化、7.5YR3/3～4/3、ボソボソ、しまりやや悪い

Fig. 5　SD02南側および調査区南壁土層（1／40）



1　7.5YR4/2～5/3、上部7.5YR4/2～5/2、しまりあり、乾くと強状、黒色粒子（炭？）・赤褐色粒子土含む
2　7.5YR5/3～5/4、やや粘質、しまりあり、ブロック状
3　7.5YR5/3～5/2、しまりあり、やや粘質、橙褐色土・炭化物が少し混ざる
4　鳥栖ローム土＋八女粘土崩落ブロック土＋1の土
5　八女粘土ブロック土
A　鳥栖ローム下部　7.5YR4/6～5/6、しまりあり、粘性ややあり、乾くと強状、下部は八女粘土に崩落
B　八女粘土上部　10YR（～2.5Y）8/1～7/1、しまり強、粘土質、少し砂状に炭化ぶつくが混ると粘土状

Fig. 6　SD02北側土層（1／40）

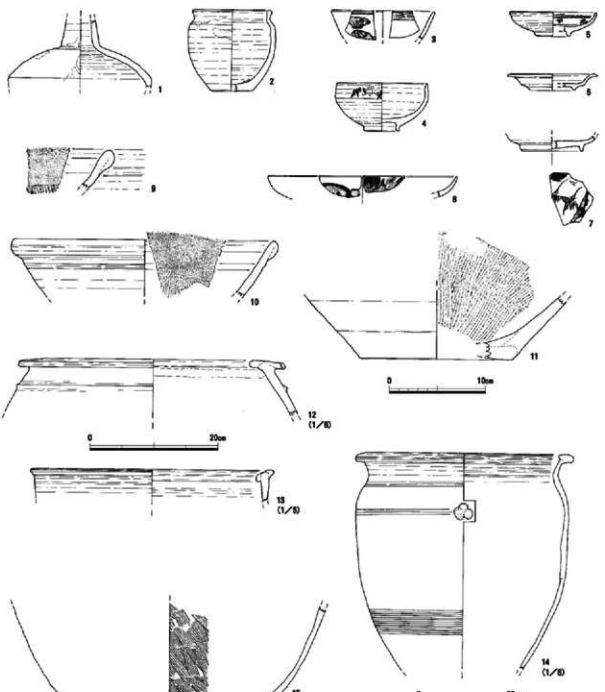


Fig. 7　SD02、SK03、SK13出土遺物（1／4、1／6、1／8）

付は釉ハギ。18世紀末～19世紀前半。6は肥前系染付磁器皿。鮮やかなコバルトブルー発色で19世紀中頃以降（近代）に下がる可能性がある。下層出土。7は肥前系染付磁器皿鉢。高台畳付釉ハギ。18世紀代。8は肥前系染付磁器皿。18世紀代。9は無釉陶器の擂鉢。近世。10・11は不透明鉄釉の陶器擂鉢。近世。12は弥生時代の甕棺で中期中頃（汲田式～須玖式）の丸味を有する系列。口縁部の小片で混入だが、付近に甕棺墓地がある可能性があろう。13は肥前系陶器の大甕（Ⅴ期）。19世紀か。

その他の遺構の遺物（Fig. 7-14・15、Fig. 8）

Fig. 7-14はSK13出土。肥前系の無釉陶器大甕。下半部の摩滅が顕著。体部上半に貼付文。17世紀後半か。15はSK03出土の瓦質土器大甕。近世前半期か。外面が体部・底部とも摩滅する。

Fig. 8-1～5はSK01出土。1は瓦質土器の推定脚付釜。16～17世紀。2は11～12世紀の白磁碗Ⅳ類。3は弥生時代中期前半（須玖Ⅰ式古相）の甕底部。Fig. 8-4はSD01出土。肥前系陶器碗（Ⅳ期）で、17世紀末～18世紀。5はSD02上部東側包含層出土の小石原・高取焼系陶器の乗燭。6はSK13・14出土。肥前系染付磁器（Ⅴ期）の広東形碗。7はSK08出土。肥前系陶器京焼風碗。高台は露胎。18世紀前半か。8～10はSK15出土。8は肥前系波佐見窯（Ⅴ期？）の染付皿。17世紀末～18世紀中頃。9は肥前系白磁（Ⅳ期）の碗。推定同一個体片（非接合）に赤絵あり。18世紀前半～中頃。10は小石原・高取焼系陶器の乗燭。18世紀中頃の灯明具。11はP-20出土の備前焼大甕片。備前Ⅳ期頃で15世紀か。12はP-34出土の肥前系陶器Ⅲ期の京焼風呉須絵什碗。高台は露胎。17世紀後半。13はP-2出土。肥前系色絵磁器碗。見込み文様は赤、外面文様は赤・青・緑。高台畳付釉ハギ。19世紀前半。14はP-17出土。肥前系陶器Ⅳ期の碗。17世紀末～18世紀。15はP-20出土の土師器小皿。底面は糸切り。13世紀頃か。16はP-21出土の鉄製小刀（包丁？）の破片。刃部は欠損。

以上の遺物から、大部分は近世だが、弥生時代と中世にも周囲で遺構の展開があったことが分かる。

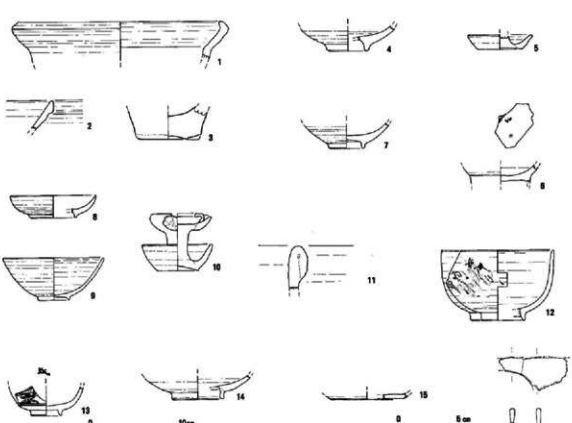


Fig. 8　その他の遺構出土遺物（1／4）

図版　1

1　第183次調査状況全景（北から）

2　調査区東半発掘状況およびSB01検出状況（北から）

図版　2

3　調査区西側～北側完掘状況（南から）

4　調査区南壁（SD02他）土層断面状況（北から）

5　SK03竈出土状況（北西から）

6　SK13竈出土状況（東から）

第191次調査

1　調査に至る経緯

平成10年10月6日付けで、榊 直子氏より福岡市早良区小田部３丁目402－２地内における個人専用住宅の建設工事について、文化財保護法第57条の２（現93条）に基づく埋蔵文化財事前審査申請（審査番号10－２－337）が福岡市埋蔵文化財課に提出された。申請地周辺は有田遺跡群として周知される埋蔵文化財包蔵地であり、周囲のそれまでの調査成果からは申請地にも比較的浅い深度に埋蔵文化財が存在する可能性があり、予定工事が埋蔵文化財に影響を与えることが懸念されたため、同年10月26日に現地の試掘調査を行った。その結果、表土直下のGL－10cmというきわめて浅い深度で遺構が検出された。予定工事は遺構に影響することが必至であり、埋蔵文化財課と申請者および工事関係者との協議の結果、工事予定範囲について記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を行うことで合意を得た。

発掘調査は平成10年12月７日の重機による表土剥ぎから行った。12月10日には全体写真の撮影を行った。調査は平成10年12月17日に重機により埋め戻しを行い終了した。なお整理作業と報告書作成については平成17年度に行っている。

2　調査の組織

調査委託　榊 直子

調査主体　福岡市教育委員会
　教育長　町田英俊（平成10年度）　植木とみ子（平成17年度）

調査総括　文化財部埋蔵文化財課
　課長　柳田純孝（平成10年度）　山口譲治（平成17年度）
　第１係長　二宮忠司（平成10年度）　調査第１係長　山崎龍雄（平成17年度）

調査担当　久住猛雄（平成10年度は埋蔵文化財課第１係、平成17年度は調査第１係）

調査庶務　文化財整備課管理係　木原淳二（平成10年度）　鈴木由喜（平成17年度）

なお、整理作業および遺物の図化・分類については上方高広（埋蔵文化財課調査員）の協力を得た。

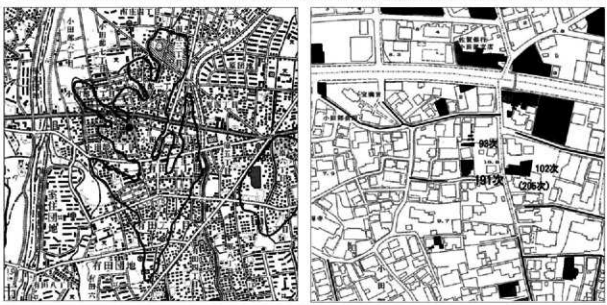


Fig. 1　第191次調査地の位置（1／25,000　1／4,000）

3　調査区の位置と立地

有田遺跡群は早良平野の北端部の八つ手状に複雑に出入りする独立段丘上に位置している。その最高所は標高約13mを測る。調査地は有田遺跡群の中央やや北側の段丘中央部に位置する（Fig. 1左）。周囲では北に接した敷地で住宅建設工事の基礎部分について93次調査がなされている（Fig. 1右）。また東側35mにある南北道路を挟んだ東側では、102次（福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集）および205次調査（平成17年度報告書作成予定）が行われている。102次調査では6～7世紀の大型建物（倉庫か）と三本柵列が検出され、その南側の205次調査では大型建物群と柵列の続きと弥生時代中期前半頃の甕棺墓地が検出されている。調査地付近はおおむね平坦な地形だが、わずかに東が高く西に低い地勢であり、付近標高は10.5m前後である。

4　調査の記録

(1)　調査の概要（Fig. 3、図版1－1）

表土・近年の盛土層を除去したGL－10～20cmのきわめて浅い深度で烏栖ローム地山上面となり、この面で遺構を検出した。遺構密度は比較的薄いが、土坑・柱穴を検出した。検出遺構の多くは近世ないしそれ以降と見られるが（明らかに近世後半期以降のものはFig. 3では下端を表現していない）、覆土の土色や質（暗褐色～黒褐色のしまりある覆土）および出土遺物から古代～中世と考えられるものもある。柱穴は総じて小規模だが、一部は掘立柱建物が復元できた。調査面積は169.5㎡である。

Fig. 2　第191次調査地とその周辺図（1／300）

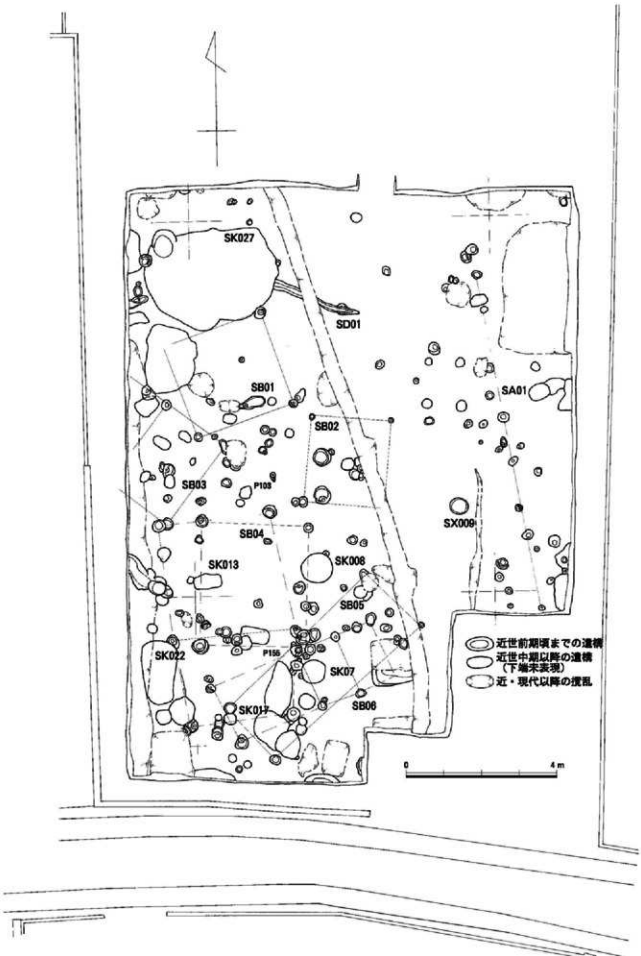


Fig. 3　第191次調査遺構配置図（1／100）

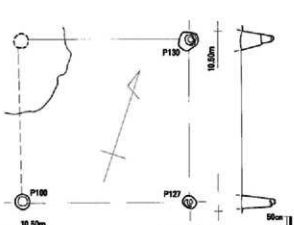


Fig. 4　掘立柱建物SB01（平面＝1／60　軸断面＝1／40）

Fig. 5　掘立柱建物SB03（平面＝1／60　軸断面＝1／40）

(2)　検出した主要遺構

掘立柱建物（Fig. 4～9）

遺構については検出時に各覆土の色と質をメモに残し、整理課程でそれらを参照しながら遺構の時期や掘立柱建物の復元を行っている。以下の建物は現地で復元できず多くは図上復元であるが、平面的に掘立柱建物となる可能性が考えられるだけでなく、覆土が類似するもので構成したもので、復元が妥当である蓋然性が高いと考える。

SB01（Fig. 4）

調査区北西側。1×1間。南北1.74m×東西1.80m。N（磁北）－20°－W。南西側は攪乱で柱穴不明。柱穴の覆土はいずれも黒褐色土で古代か。

SB03（Fig. 5）

調査区西側。1×1間。長軸1.74m×短軸1.29m。N－51°－W。西側は調査区外で柱穴未確認。柱穴の覆土はいずれも黒褐色土で古代か。

SB02（Fig. 6）

調査区中央。1×1間。南北1.55m×東西1.42m。N－6°－E。南東側は攪乱で柱穴不明。柱穴の覆土はいずれも黒褐色土で古代か。

SB04（Fig. 7）

調査区南西側。1×1間。南北2.2m×東西1.96m。N－2°－E。柱穴の覆土は暗褐色土、茶褐色土、灰茶褐色土で中世ないし近世か。

SB05（Fig. 8）

調査区南側。1×2間ないし西側に延びる場合は1×3間。前者の場合は南北1.10m×東西1.42m。N（磁北）－67°－E。北東側は攪乱で柱穴不明。柱穴の覆土は1×2間の場合はいずれも黒褐色土だが（この場合古代か）、1×3間の復元の場合は西側の2柱穴が茶褐色系でやや疑問あり。

SB06（Fig. 9）

調査区南側。細長い1×2間。長軸3.52m×短軸13.2m。N－39°－E。長軸南辺中央の柱穴が不明だが遺構の残存状況からは削平であろう。柱穴の覆土はいずれも黒褐色土で古代か。

その他の遺構（土壙など）

SX009（Fig. 10、図版1－4）

調査区南東側で検出した径46cm前後の浅い土壙。10cm前後の深さしか遺存しないが、底面が焼土化している。出土遺物も無く時期は不明だが、削平された竪穴住居に伴う地床炉である可能性がある。

SK022（Fig. 11、図版1－2・3）

調査区南西側で検出した土壙。西側を地境に沿った南北の近現代攪乱溝に切られる。深さ108cmで底面はほぼ平坦。土層を見ると八女粘土主体の地山土で一気に埋め戻した状況であり、片側が広い長

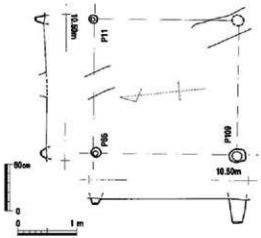


Fig. 6　掘立柱建物SB02(平面＝1／60　縦断面＝1／40)

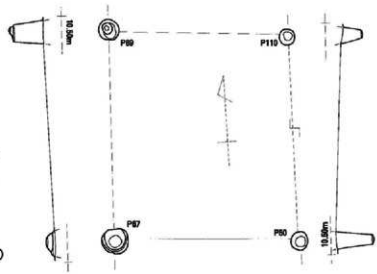


Fig. 7　掘立柱建物SB04（平面＝1／60　縦断面＝1／40）

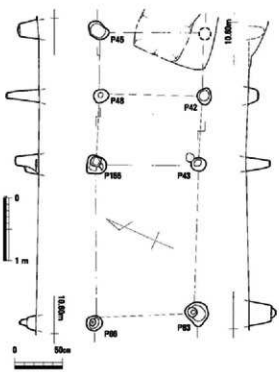


Fig. 8　掘立柱建物SB05（平面=1／60　縦断面=1／40）

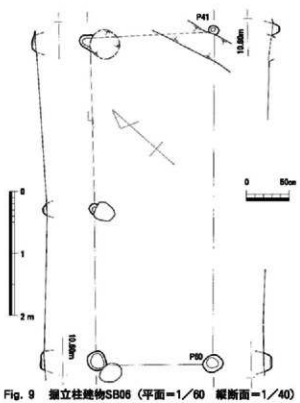


Fig. 9　掘立柱建物SB06（平面＝1／60　縦断面＝1／40）

台形のプランなどから土壙墓である可能性がある。南側下層に落ち込んだ陶管片から18世紀頃か。

SD01（Fig. 3）

調査区北側で検出した東西に走る細く浅い溝状遺構。西側を攪乱（SK027）に切られる。茶褐色の覆土で中世～近世の可能性。黒曜石石鏃片を出土。

SA01（Fig. 3）

調査区東側で検出した柵列になる可能性がある柱穴列。ただし柱穴覆土には黒褐色のものと茶褐色のものがありやや疑わしい部分もある。N－10°－W。

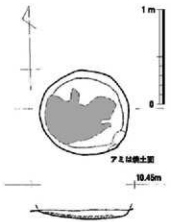


Fig. 10　炉址？SX009（1／20）

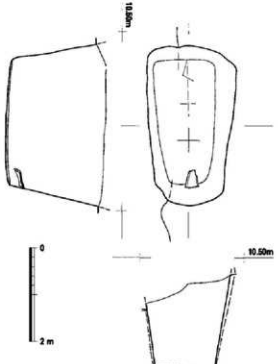


Fig. 11　土坑SK022（1／40）

その他、SK027、SK007、SK017、SK022などは近世でも後半期以降の土壙とみられる。なおSK027は底面の一部が焼土化しており、用途不明だが焼土壙か。

(3)　出土遺物（Fig. 12）

1、3～5はSK022出土。1は高取焼系陶器の陶管。土壙南側の最下層出土。外面平行タタキ→ナデ。橙色系の胎土に赤褐色釉。18世紀前半か。3は肥前系青磁Ⅳ期の香炉。高台釉ハギ。内面無釉。灰白色胎土に明緑灰色～灰白色不透明釉。18世紀中頃～19世紀。4は陶器の蓋。橙色系胎土に明赤褐色不透明釉。やや軟質。5は11～12世紀の中国製白磁碗Ⅳ類。

2・13・14・18はSK027出土。2は肥前系染付磁器皿。高台畳付釉ケズリ、内底見込み蛇の目釉ハギ。灰白色透明釉。波佐見窯Ⅴ期（18世紀中頃）か。13は肥前系染付磁器の紅皿。高台畳付釉ハギ。灰白色透明釉。19世紀前半～中頃。14は肥前系陶器Ⅳ期？の皿（小碗）。高台露胎。灰白色胎土に灰白色不透明釉。

7・8・15はSK007出土。7は土師質土器の火鉢口縁部か。にぶい橙色～褐灰色（表面変色？）。8は土師質土器の七輪。外面はロクロナデ、内面は接合面剥離でキザミが表面になる。にぶい橙色、剥離部は褐灰色。7・8は近世のものだろう。15は肥前系染付磁器碗。高台畳付釉ハギ。見込みに三足付ハマ痕跡。明緑灰色透明釉。19世紀中頃。

6はSK013出土。肥前系陶器Ⅳ期の京焼風碗。高台畳付釉ハギ。灰白色胎土に浅黄橙色透明釉。9・10はSK015出土。9は小石原・高取焼系陶器の徳利。胴部が3箇所凹む。内面に釉ダレ。外底は露胎。灰褐色～にぶい橙色胎土にオリーブ褐色不透明釉（鉄釉）。10は陶器の蓋。下面は露胎、外底は糸切り。浅黄橙色胎土に灰白色不透明釉。なおSK015からは明らかに明治期に入る型紙文様の肥前系染付磁器碗が2点出土している。11はSK017出土。小石原・高取焼系陶器の徳利（竹徳利か）。外面のロクロナデは頸部で沈線状。内面は頸部シボリ。褐灰色～明褐色胎土に暗赤褐色不透明釉（鉄釉）。口縁部に淡黄色不透明釉上ガケ。

12はSK023出土の砥石。残存長79㎜、幅75㎜、厚み17.5㎜。上下端部は欠損。両側とも使い減りが著しく、両面に針研ぎ痕あり。左右端面は擦切り。粒子が細かく、層状節理がみられる灰白色の泥岩か。16・17はSK008出土。16は肥前系白磁皿。波佐見窯系と思われ19世紀か。内底見込み釉ハギ、高台畳付釉ハギ。明緑灰色釉。17は肥前系陶器Ⅳ期の碗。灰黄褐色胎土に黒褐色不透明釉（鉄釉）。17

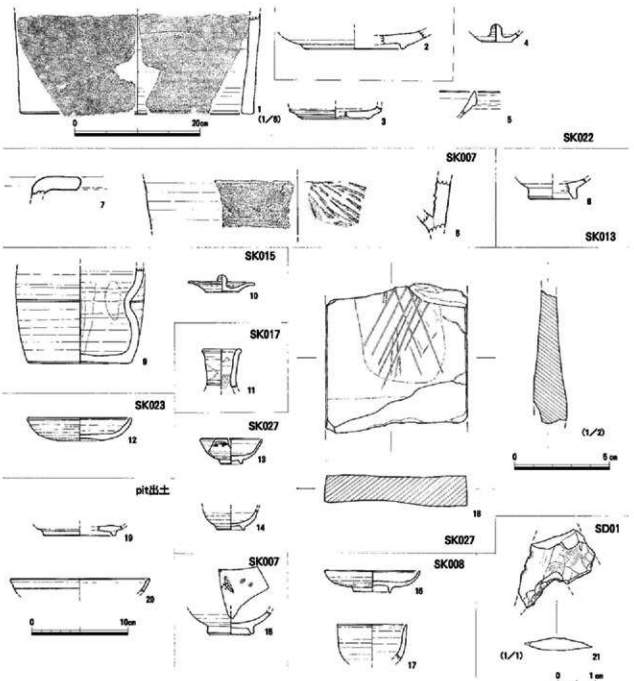


Fig. 12　第191次調査出土遺物（1／4　一部1／1、1／2、1／6）

世紀末～18世紀後半。

19はP-155出土。須恵器の高台付坏。体部外面底部付近は回転ヘラケズリ、他はヨコナデまたはロクロナデ。暗灰色（外面）～青灰色（内面）、器壁は灰白色気味。8世紀中頃～後半か。20はP-103出土。肥前系染付磁器の皿。灰白色透明釉。外面に横線状の青文様。18世紀か。21はSD01出土。黒曜石製の石鏃で欠損部分多い。残存長21㎜、残存幅20㎜。厚みは3.5㎜。弥生時代前期か。

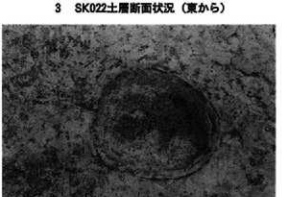
以上のように出土遺物の多くは近世に所属するが、一部に古代から中世前半があり、柱穴が黒褐色土系の掘立柱建物の時期を示す可能性がある。少なくとも近世以前の遺構の展開が認められるだろう。

図版　1

1　第191次調査状況全景（北から）

2　SK022完掘状況（北から）

3　SK022土層断面状況（東から）



4　SX009（炉址？）検出状況（北から）

第198次調査

1　調査にいたる経緯

平成12年4月10日付けで、白鳥寛氏より福岡市早良区南庄3丁目205-5地内における埋蔵文化財事前審査申請書（審査番号12-2-27）が福岡市埋蔵文化財課あてに提出された。それを受けて同年6月12日に試掘調査を行った結果、ピット等の遺構が検出されたため、工事によって破壊を受ける建物建築部分の発掘調査を実施した。発掘調査は平成12年6月26日に開始し、途中埋め戻しに付いての協議を経て7月27日に終了した。埋め戻しではタンピングランマーによる転圧を行った。調査面積は45㎡である。

調査組織

調査委託　白鳥寛

調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第1係
課長 山崎純男（12年度）　山口譲治（17年度）
第1係長 山口譲治（12年度）　山崎龍雄（17年度）

調査担当　池田祐司

調査庶務　文化財部文化財整備課管理係

2 調査地の位置と立地

調査地点は小田部丘陵北端部の最頂部北側に位置する。標高7.5mを測り、西側は60mほどで丘陵の落ちになり、北側は緩やかに傾斜している。周辺の頂部付近では弥生時代から古墳時代の集落が確認され、北側の丘陵斜面では古墳時代前期の周溝墓が群を成すことがこれまでの調査で明らかになっている。周辺の調査については有田・小田部27（市報512集）、同38集（735集）を参照されたい。

3　調査の記録

(1) 調査の概要

調査区の遺構面は地表下20cmほどの鳥栖ローム上面で竪穴式住居跡1軒とピットを検出した。遺構面は北側が下がり比高差20cmを測る。

Fig. 1　第196次調査地の位置（1／25,000　1／5,000）

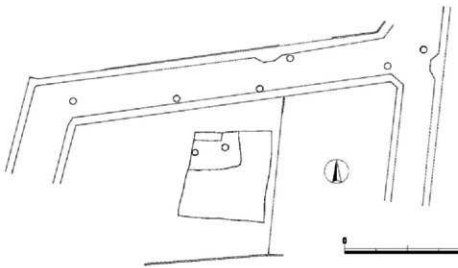


Fig. 2　調査区位置図（1／300）

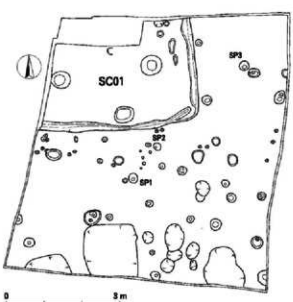


Fig. 3　遺構配置図（1／100）

(2)　竪穴式住居（SC）

SC01（Fig. 4）　調査区北西側で検出した。調査区外に広がり、北西端の住居跡中央は攪乱を受ける。調査区内で東西420㎝、南北300㎝を測り、SP 4、5を支柱穴とすると、4本柱で一辺480㎝ほどの方形プランが復元できる。深さは最大で30㎝が残存する。壁の内側には幅15㎝、深さ5㎝ほどの側溝が巡る。SP 4、5は径55、52㎝の平面円形で深さ50㎝を測り、径15㎝ほどの柱痕跡を確認した。覆土はしまりのない暗褐色粘質土で均一である。床面には厚さ1から8㎝ほどの貼床をし、これを除去した面には深さ6㎝ほどのくぼみが見られる。南側中央壁際には平面不整円形52×42㎝、深さ14㎝のピットSP 6があり須恵器の高坏が出土している。遺構の時期は須恵器から6世紀後半と考えられる。

出土遺物（Fig. 5）　1から10が出土し、1、10がSP 6から出土した以外は覆土中からの出土である。1は須恵器の高坏脚部で外面に篦目を施し、端部および内面は回転なで調整である。胎土に細砂粒を含み暗灰色を呈す。2から4は土師器である。2は口縁部外面に叩き痕が見られ、内面は削り状の調整で胎土に砂粒をほとんど含まず、細かな気泡が多い。3は丸底壺になると思われる。器面は荒れる。4は碗状の器形か。5は口縁部が若干ふくらむ土師質の口縁部である。6から9は弥生時代中期の土器で混じり込みである。6、7は鮫形口縁の甕で中期前半のものである。残りが悪い。8、9は中期前半、中頃の甕の底部と考えられる。外面に刷毛目調整が見られる。10は滑石製の円盤で面取りが成される。150ｇを量る。他は土師器と弥生土器の小片で弥生土器の方が多い。

(3)　ピット（SP）

調査区の南半にピットを検出したが径20㎝以下の小振りのものがほとんどで建物を構成することはない。暗褐色のしまりがない粘質土を覆土とする。そのうち3個から遺物が出土した。

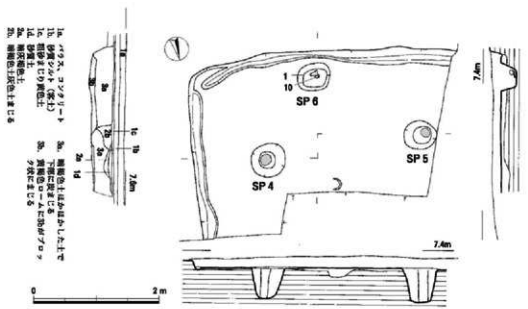


Fig. 4　SC01実測図（1／60）

出土遺物　11はSP１出土。小さく外反する如意形口縁の甕で、口唇部には細く浅い刻み目を施す。外面には口縁下に木口痕と細かな縦方向の刷毛目がみられ、その上からなで調整を施す。内面は斜方向の刷毛目が見られる。胎土には多くの細砂粒を含む。他は弥生土器と考えられる小片である。

(4)　その他の遺物

12は弥生中期初頭の甕の底部で外面刷毛目調整で、胎土に砂粒を多く含む。13は頁岩製の石包丁で器面に縦、横方向の擦痕が見られ、刃部は両刃で斜方向の深い擦痕がある。このほか黒曜石の削片が１点出土している。

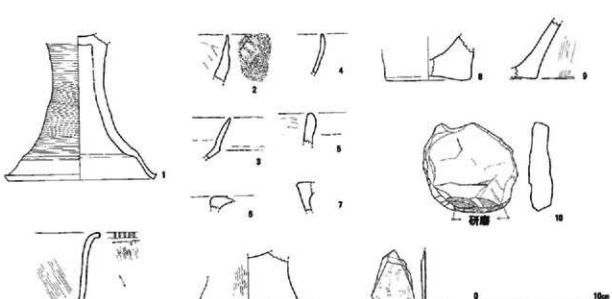


Fig. 5　出土遺物実測図（1／3）

(1) SC01（北から）

(2) SP6（北から）

(3) 作業風景

第199次調査

1　調査にいたる経緯

平成12年6月7日付けで、坂口正敏氏より福岡市早良区有田2丁目20-8地内における埋蔵文化財事前審査申請書（審査番号12-2-178）が福岡市教育委員会あて提出された。それを受けて同年8月8日に試掘調査を行った結果、竪穴住居等の遺構が検出されたため、工事によって破壊を受ける幅50cmのブロック擁壁部分（1区）と出入り口部分20㎡（2区）の発掘調査を行った。発掘調査は小面積のため、国庫補助金で実施した。平成12年9月1日から1区の調査を行い、その後2区の調査にかかった。調査区は小面積ではあったが遺構が複雑に切り合っており、同年9月12日に終了した。また整理・報告は平成17年度に行った。

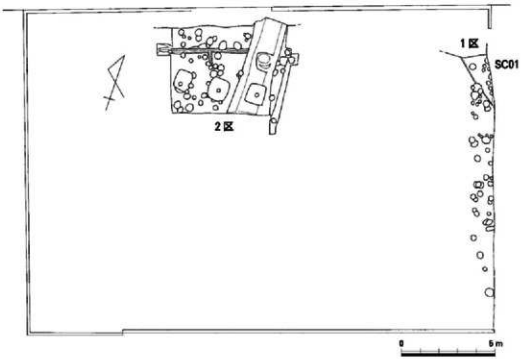
調査組織

調査委託　坂口正敏
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課調査第1係
　課長　山崎純男（12年度）　山口譲治（17年度）
　調査第1係長　山口譲治（12年度）　山崎龍雄（17年度）
調査担当　米倉秀紀
調査庶務　文化財部文化財整備課管理係

2　調査地の位置と周辺の調査

調査地は八つ手状に広がる有田台地の最高所（標高約13m）をやや西に下った標高11m前後の緩斜面上に立地している。北側・東側はこれまで数多くの調査が行われており、弥生時代の環溝・古墳時代の集落群、飛鳥時代の大型建物群・奈良時代の郡衙・戦国期の城跡など重要以降が発見されている。ただし調査区の南側・西側は調査例がほとんどなく、特に飛鳥・奈良時代の大型建物群の広がりを考える上で限界があった。

Fig. 2　第199次調査地の位置（1／25,000　1／5,000）



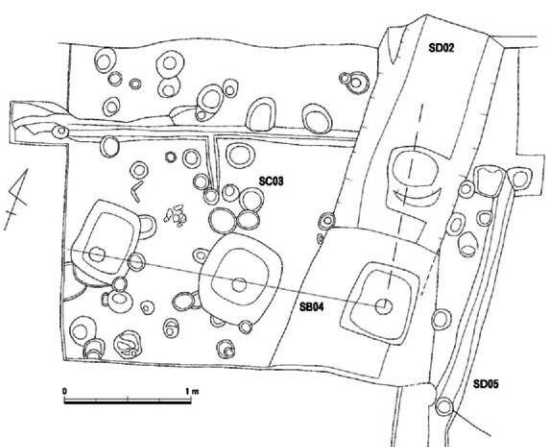


Fig. 2　遺構配置図（1／200　1／60）

3　遺構と遺物

調査区内では10～20cmの薄い表土の下で遺構面である橙色のローム層を確認した。1区でピット群と竪穴住居とピット群、2区で住居・ピット・溝・大型建物及び中世の包含層を検出したが、調査面積が限定されていたため、各遺構の全体の様相は分からない点が多い。

竪穴住居（SC）

SC01（Fig. 2、図版1）

1区調査区北西隅で一辺のみを検出した。一辺の検出長は約3m、残存壁高は10～13cmを測る。住居の全形は不明で、住居に伴う柱穴もわからない。遺物は土師器が少量出土しただけである。

SC03（Fig. 2、図版2）

2区のほぼ大半の面積を占めるが、壁は北側の一辺を検出しただけである。住居の上ほぼ全面に薄い中世の包含層がかぶっている。東壁はSD01によって破壊され、西・南壁は調査区外にある。検出した北壁長は約5mを測る。壁の西端がやや曲りかけている。壁に沿って幅約20cm、床面からの深さ8cm前後の溝が掘られている。北壁の中央付近から南に向けて同規模の溝が長さ70cm掘られている。この溝が壁の中央とすると住居の規模は6m前後になる。柱穴は判然としないが、有田遺跡の他地点の住居を参考にすると2本柱になるものと思われ、調査区南西隅のピットが可能性がある。住居床面には炭化材が数カ所あり、焼土粒も多く、住居東側に焼土が固まって認められた。床面でほぼ完形の土師器甕が1点、小型丸底壷が1点出土したほか、住居全体で弥生土器や中世土器を含むコンテナ2箱の土器が出土した。

出土遺物（Fig. 3、図版4）

1・2・7は土師器の甕である。1は復元口径13.2cmを測る。外面は目の細かいハケ目で、内面はヘラケズリである。図の最下部と頸部付近を除く胴部に煤が付着している。2は小型の甕か。ただし煤は付着しておらず小型丸底壷とすべきか。復元口径12.4cmを測る。7は床面直上で出土した完形品である。全体はやや歪んでおり、口径約17.8cm、器高27.5cmを測る。外面はハケ目調整であるが、条線が深くて一見条痕のようである。ハケ目の一単位は4本か5本と思われる。内面は斜方向のヘラケズリである。底部外面は赤変し、胴部下部から最大径付近に煤が付着している。3～5は土師器小型丸底壷。3点とも摩滅が激しく、調整は残りが悪い。これらの他にも別個体の小型丸底壷の小破片がある。6は高坏で、赤色顔料を塗布している。

住居内からは古墳時代遺物以外にもやや多めの弥生時代の遺物とごく少量の古代・中世遺物が出土している。8～11は弥生土器である。8は突帯文土器で、両面条痕を施している。9～11は底部片である。12は底部ヘラ切りの土師器皿である。13は漆黒黒曜石製打製石鏃。片側には自然面が残り、主要剥離面側の周縁調整は不十分で、先端部も尖っていないため、未製品ではないかと考えられる。現存長25.5mm、幅22.3mm、厚さ7.1mmを測る。14も漆黒黒曜石製打製石鏃。片脚全部と反対の脚先端部を欠失する。周縁調整はあまりていねいではない。長さ22.1mm、厚さ3.8mmを測る。15は住居の主柱穴と思われる調査区南西角のピット202で出土した。自然面を残す漆黒黒曜石製の剥片で、使用痕かと思われる微細剥離がある。他の黒曜石よりパティナが進んでおり、縄文時代以前の可能性がある。長さ40.7mm、幅31.2mm、厚さ10.5mmを測る。

溝状遺構（SD）

SD02（Fig. 4、図版2）

幅約1.4m、深さ0.9m前後の溝である。この溝の北側延長線上には第188次調査のSD02があり、さらにその北側の第55次調査につながり、早良郡衙Ⅱ期の一部を形成している溝である。溝の断面形は逆

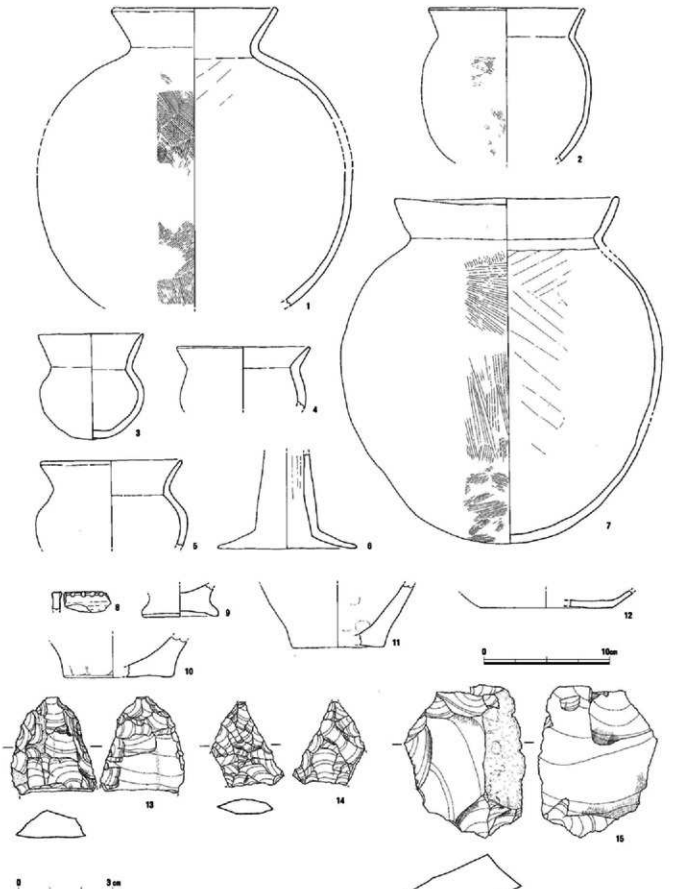


Fig. 3　SC03出土遺物実測図（1／1、1／3）

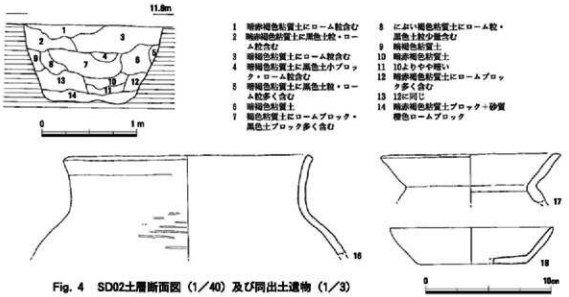


Fig. 4　SD02土層断面図（1／40）及び同出土遺物（1／3）

台形で、埋土は各種混合土から成る不自然な土層で人工的に埋め立てたものと思われる。溝を埋めた後にSB04を築いている。

出土遺物（Fig. 4、図版4）

遺物は少なく、土師器・須恵器などの細片が少量出土しただけである。16は土師器の甕である。直立気味の口縁部で、胴部外面に平行タタキを施している。復元口径19.7cmを測る。17は土師器甕で、復元口径14.3cmを測る。18は土師器坏で、口径12.9cm、器高2.9cmを測る。

SD05

ＳＤ０２の東側を平行して走る小溝である。北側へは続かない。溝幅25～40cm、深さ８～14cmで断面形は台形である。土師器・須恵器の細片少量が出土した。

掘立柱建物（SB）

SB04（Fig. 6、図版3）

遺構検出時には西側の柱穴２基のみを検出していたが、その後SD02に切り合う柱穴を確認。さらに調査最終日にその東側延長上を確認したが柱穴は検出できず、また３基の柱穴と直角に南側でも柱穴は確認できなかった。３基の柱穴の北側のSD02内の一部が柱穴状に深くなり、３基の柱穴と同レベルであることから、この部分が柱穴の可能性が考えられるが、その北側には柱穴状のものは認められないため、続きがわからない。仮に一列３基の柱穴とその北側の柱穴状の落ち込みを同じもので、さらにその北側の柱穴を溝との切り合いで見落としたとしても、溝底のレベルは柱穴の底のレベルより30cm近く高く、可能性は少ない。従って現時点で確実なのは東西方向に並ぶ３基の柱穴のみである。柱穴は一辺１～1.2mの方形で、残存する深さ90cmを測る。柱穴埋土中には径20cm前後の柱痕跡が認められる。柱痕跡の大きさが小さいことは、有田遺跡の他の類例から見ると側柱建物と考えられる。建物の方位はN-10°-W、柱間の距離は２m前後を測る。

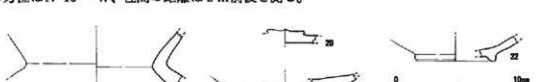


Fig. 5　その他の遺物（1／3）

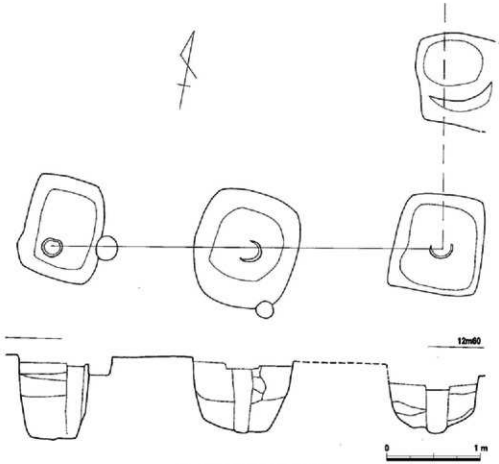


Fig. 6　SB04実測図（1／40）

柱穴内及び柱痕跡内からは土師器・須恵器の細片が浅いコンテナ半分弱ほど出土したが、弥生土器や古墳時代の土師器の細片以外で明確に時期が確定できる遺物はなく、建物の時期の特定は困難であるが、柱穴3がSD02を埋めた後に構築されていることからSD02以降である。

出土遺物（Fig. 5）

18は須恵器の甕で、全面浅黄橙色を呈し焼成が悪く、調整は不明である。

ピット出土遺物（Fig. 5）

19はピット111出土。須恵器坏蓋の把手である。20はピット129出土の土師器の皿で糸切り底である。21はピットC出土の瓦器碗である。

4　まとめ

今回の一番大きな意義は、今まで知られていなかった地点での大型建物の発見である。これまでの調査で早良郡衙と考えられる遺構群を見ると、6世紀代と思われるいわゆる3本柱建物群の廃絶後の恐らく7世紀後半代に、東側と西側を南北方向の溝によって挟まれた郡庁と倉庫群、その東に別のコの字状の側柱建物群（東方建物群）が建設される（Ⅰ期）。これらの遺構群の北側には、両側に大きな溝を掘った東西方向の官道と思われるものがある。倉庫群及び東方建物群は少なくとも1回は建て直しされている。その後、郡衙は全面的に作り替えられ、三方ないしは四方を溝に囲まれた側柱建物群が建築されている（Ⅱ期）。この建物群と確実に同一時期と考えられる建物群はまだ明らかではなく、あるいは郡衙ではないかもしれないが、Ⅰ期建物群に後続することは確実である。時期的には、前者は郡庁の調査者は7世紀第3四半期の建設を考えている。後者は溝の出土遺物が8世紀後半でも

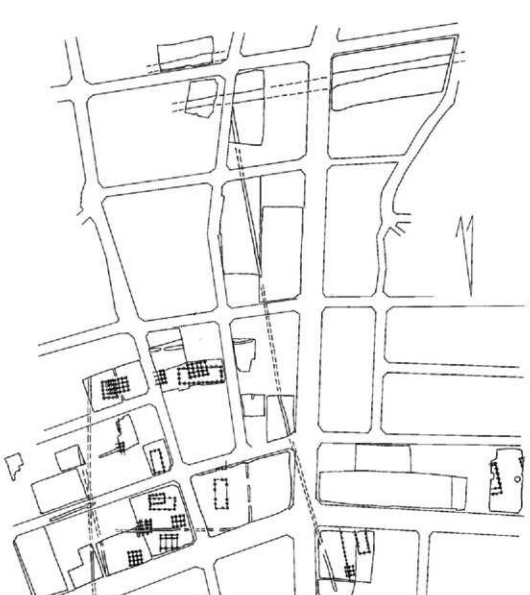


Fig. 7　早良郡衙全体配置図（1／2,000）

中頃に近い土器以降のものを含まないことから、その前後の時期の廃絶が考えられる。この時期が正しければ、Ⅰ期の建設からⅡ期の廃絶まで概ね100年前後存続期間が考えられる。

さらにこれらの建物群とは方向を異にする建物群が数棟あるが、多くは時期がよくわからない。唯一第187次調査の総柱建物が、柱の抜け跡から8世紀末～9世紀初め前後の土器が出土していることから、平安時代初期頃に廃絶した建物であり、Ⅱ期建物群の後にも建物が存続していたことが判明している。このほかにも、台地の東側などに大型建物群が散在している。

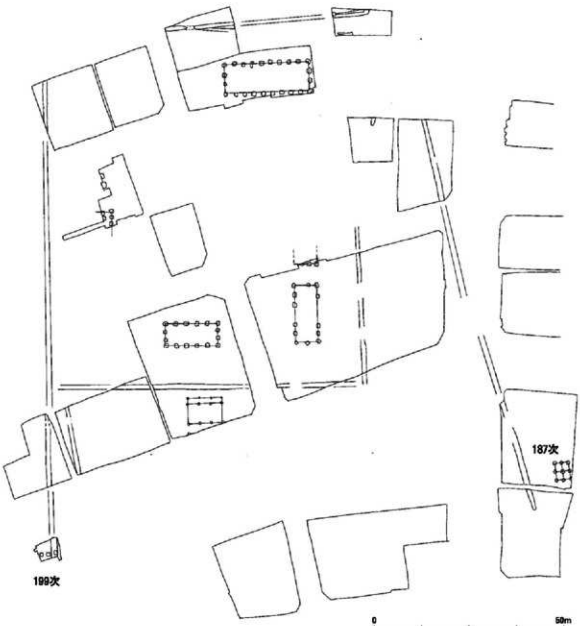


Fig. 8　平良郡衙Ⅱ期及びⅡ期以降全体配置図（1／1,000）

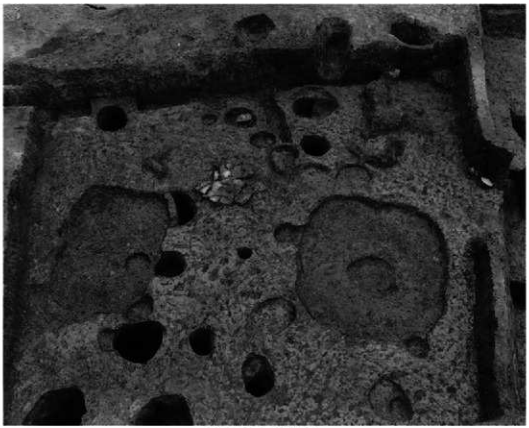
今回の建物は全形は、まったく不明であるが、柱穴の規模は郡衙の建物群と比べて遜色ない。柱穴の大きさ（一辺１ｍ強）の割には柱の大きさ（20㎝前後）が小さく、Ⅰ期・Ⅱ期の建物群から考えれば側柱建物と考えられる。この建物はⅡ期の溝（SD01）を人工的に埋めた後に建築されており、この溝の廃棄後すぐに建築されたものと見て大過ないであろう。つまり８世紀中頃に近い後半代中の建築が想定され、あるいは187次調査の総柱建物と同一時期の可能性も考えられる。今後今までの遺構も含めて再検討が必要であろう。

図版　1

1区全体写真（南から）

2区全体写真（西から）

図版　2



SC03、SB04（南から）

SD02（南から）

図版　3

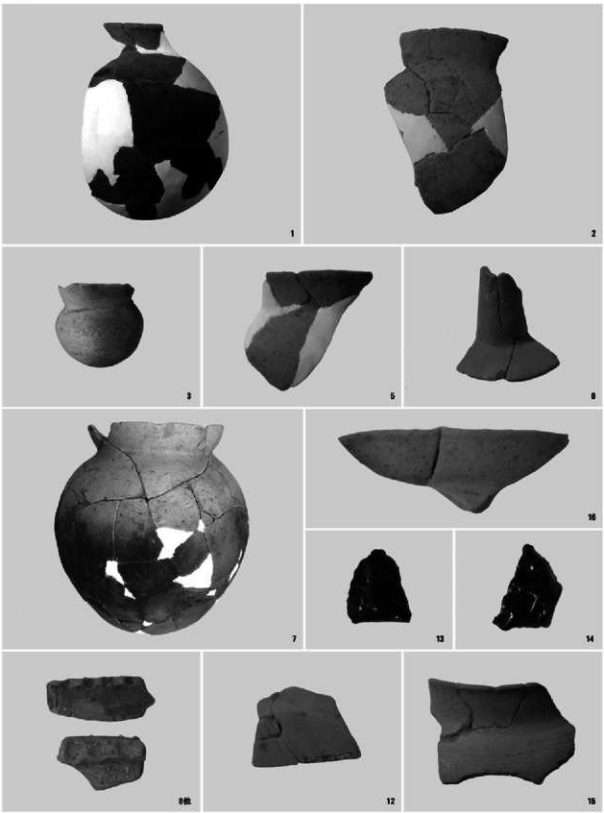
SD02土層断面

SB04柱穴土層断面 1

SB04柱穴土層断面 2

SB04柱穴土層断面 3

図版　4



第199次調査出土遺物

第200次調査

1　調査に至る経緯

平成12年７月12日付けで、岡部貞義氏より福岡市早良区有田1丁目８番14号地内 229.22㎡における埋蔵文化財事前審査申請書（審査番号12-２-273）が福岡市教育委員会あて提出された。それを受け福岡市埋蔵文化財課は同年８月８日に試掘調査を行い、遺構・遺物を確認した。表土から遺構面であるロームまでの深さは約20cm。予定建物の基礎は布基礎で現表土面から30cm掘削するため調査を実施することとなった。申請地内では弥生時代前期のV字溝があることが予想されていたが、現地で協議の際に、掘削するのが布基礎部分で遺構面から10cm程度であることと、杭等は打たないことから、深くて大きい遺構については、上部10cm以下については原則として調査しないこととした。具体的には弥生時代のV字溝であるSD01については全体を10cm程度下げた後、１カ所にトレンチを入れるにとどめ、その大部分は調査を行わず現況保存している。

調査組織

調査委託　岡部貞義
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課調査第１係
　課長　山崎純男（平成12年度）　山口譲治（平成17年度）
　調査第１係長　山口譲治（平成12年度）　山崎龍雄（平成17年度）
調査担当　米倉秀紀
調査庶務　福岡市教育委員会文化財部文化財整備課管理係

2　調査地の位置と周辺の調査

調査地は有田遺跡の最高所を北東にわずかに下った標高11m付近の緩斜面上に立地する。周辺の調査例は多く、南側隣接地の第７次調査では当調査区につながる弥生時代前期と中世後半期の溝が検出されている。また７次調査では律令期の布掘建物も発見されている。

Fig. 1　第200次調査地の位置（1／25,000　1／5,000）

本調査区では溝以外の遺構は東側半分で浅い小ピットが約40基検出されたが、西半は皆無である。本来東向き緩斜面のため、西半はピットがなくなるほど完全に削平されているものと思われる。本来は周辺の状況等から、古代の建物や弥生・古墳時代の竪穴住居があってしかるべき地点である。

3　遺構と遺物

検出した遺構は弥生時代のV字溝1条と、中世後半期の溝、土壙1基とピットである。中世後半期の溝はSD02～05までの番号を振ったが、本来同一のものと思われる。

SD01（Fig. 3、図版2）

弥生時代前期の環溝である。前述のように、建築予定建物の基礎の深さとの関係上、溝全体は10cm程度しか掘れず、トレンチを1カ所入れたのみである。現況の溝幅約2.2m、深さ1.3mを測る。断面形はV字である。埋土は汚れたロームを主体とするレンズ状の自然堆積で、トレンチでは人工的な埋土は確認できなかった。また上部の4～6層とその下の層で堆積の方向が異なり、10層が黒色粘質土を主体とすることから、10・11層の上面で一時期安定期があったものと思われる。

この溝は他の調査区で続きが検出されており、短径80m前後、長径は推定で100m以上の楕円形を呈していると思われる。他地点の状況では、下部から板付II式土器が出土し、上層からは弥生時代終末の土器や初期須恵器などが出土しており、堆積の状況からも自然に徐々に埋もれていったものと考えられる。本地点は弥生時代前期以外の遺物が出土しておらず、他の遺構の状況からも上部はかなり

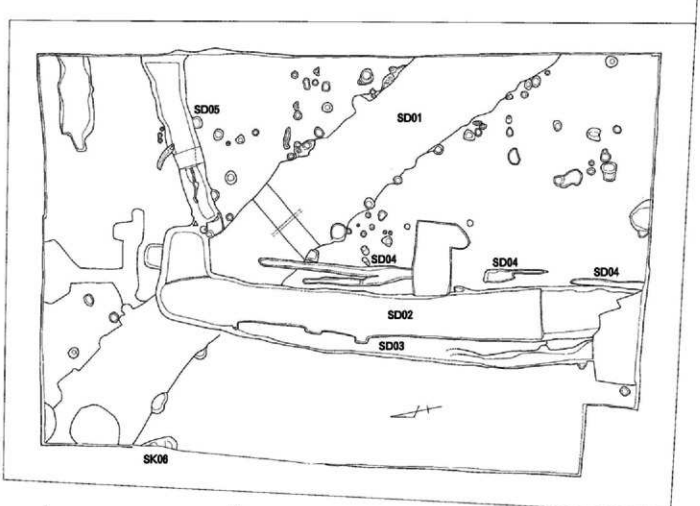


Fig. 2　遺構配置図（1／100）

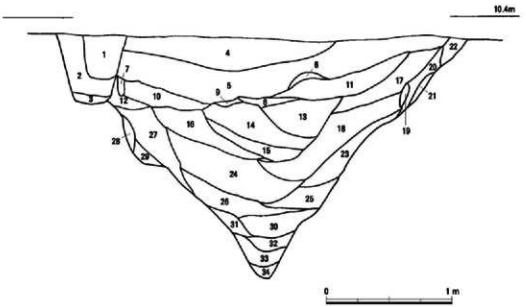
削平されているものと思われる。

出土遺物（Fig. 4、図版２）

全体10cmの掘削と２本のトレンチから浅コンテナ１箱弱の遺物が出土した。SD02と接するあたりの溝中央の最上部での土器がまとまって出土した。出土した土器はすべて前期後半頃のものである。１はSD02との切り合い近くの溝最上層からまとまって出土した甕である。頸部に２条の突帯を持ち、口唇部と下の突帯に刻目を施している。口径24cmを測る。外面に縦方向のハケ目、内面は摩滅のため不明だが、口縁部に若干横方向のハケ目が残る。２も甕で外面に縦ハケ、内面に横ハケを施している。上層出土。３も甕か。両面とも指押さえで仕上げている。上層出土。４・５は甕の底部で、４は底径7.2cmを測る。上層出土。５も上層出土で、底部径８cmを測る。６は高坏で上層出土。突帯の下に調整の工具跡がついている。７は肥厚する壺の口縁部片で、復元口径34.6cmを測る。内面に横ハケが残る。中層出土。８も壺の口縁部片で下層出土。９は壺底部で、下層出土。10は上層出土。11はSD04の出土遺物であるが、本来はSD01に伴うものと考えられるため、ここで採り上げた。口縁部を各小壺の略完形品で、推定口径６cm前後、推定器高９cm前後を測る。内面は指押さえとナデ、外面はヘラミガキで仕上げている。

SD02～SD05

前述のように本来は一つの溝であったものと思われる。SD02は南北方向に伸びる溝で、最大幅1.4m、もっとも深い部分で深さ27cmを測る、広くて浅い溝である。北側は調査区内で終わっているが、



1　黒褐色粘質土に橙色ローム粒多量と白色八女粘土少量含む
2　１のローム粒がブロック状となり多く含む
3　橙色ロームブロックに黒褐色粘質土ブロック少量含む
4　黒褐色粘質土に橙色ローム粒多く含む
5　４より黒くローム粒少ない。炭化物少量含む
6　橙色ロームブロック
7　褐色粘質土
8　褐色粘質土に白色八女粘土ブロック多く含む
9　暗褐色粘質土。炭化物含む
10　黒色粘質土に橙色ローム粒少量含む
11　10に同じ
12　暗褐色粘質土に橙色ローム粒多く含む
13　黒褐色粘質土に橙色ローム粒多量と白色八女粘土ブロック少量含む
14　13のローム粒がブロックとなり少量含む
15　黄橙色から橙色ロームブロックに黒褐色土ブロック少量含む
16　黒褐色粘質土に橙色ローム粒多く含む
17　暗褐色粘質土に橙色ローム粒多く含む
18　黒褐色粘質土に橙色ローム粒多く含む
19　黄橙色ロームブロック
20　黒褐色粘質土に橙色ローム粒多く含む
21　橙色ロームブロックに黒褐色土少量含む
22　暗色粘質土に橙色ローム粒多く含む
23　暗褐色粘質土に橙色ローム粒多量、白色八女粘土ブロック少量含む
24　暗色粘質土に橙色ローム粒多く含む
25　24よりローム粒多い
26　24・25よりさらにローム粒多い
27　にぶい黄褐色粘質土に橙色ローム粒多量、八女粘土ブロック少量含む

Fig. 3　SD01土層断面図（1／20）

東側に１m強折れ曲がっている。SD03はSD02の西側の溝であるが、SD02と一体化している。SD04はこの溝の西側にあり並行してとぎれとぎれに走る狭い溝で、ともに深さ10cm内外である。いずれも覆土は茶色系の土で、出土遺物は自然石を除くとコンテナ半分に満たない。細片ばかりで実測に適する遺物はなく、弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・土師器皿などが出土している。SD05はSD04の北端の折れ曲がった部分の南端につくように掘られている。角度はSD02とはややずれている。幅80cm前後、深さ約20cmを測る。覆土はSD02と同じである。出土遺物は小ビニール１袋程度の土器細片が出土しただけである。

出土遺物（Fig. 5）

12は須恵器の壷で、SD02上層出土。13は須恵器の鉢か。外面は指によるケズリであろうか。内面はロクロによる指ナデである。14は須恵質の土器で鉢か。灰白色を呈している。外面はケズリ気味のナデ、内面は横方向のロクロによるケズリである。15は玄武岩製磨製石斧で、本来はSD01に伴うも

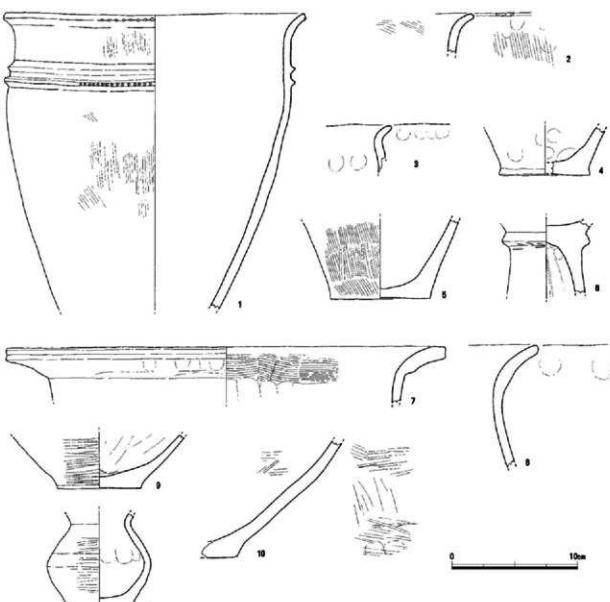


Fig. 4　SD01出土遺物（1／3）

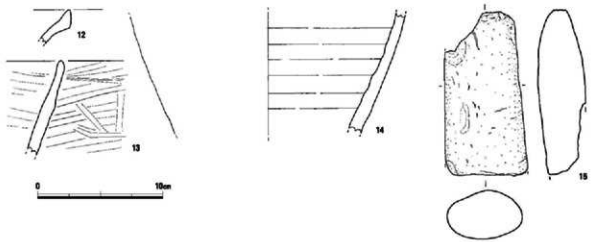


Fig. 5　SD02出土遺物（1／3）

のであろうか。刃部を欠失し、全面敲打痕が明瞭で、一部を除いて磨いた形跡はあまり認められない。刃部欠失後の再利用は認められない。

土壙SK06（Fig. 6）

調査区の北西端で検出した。大半は調査区外に続く。覆土は黒褐色である。二段掘りで、深い部分は約30cmの深さである。全体の削平を考えれば1m近い深さになるものと思われる。出土遺物はなく、一見落とし穴のようである。

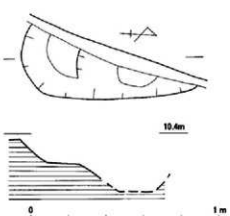


Fig. 6　SK06実測図（1／20）

4．まとめ

本調査区は西側で1m近い削平を受けていると考えられるため、時期不明の小ピットと土壙1基以外は弥生時代の溝1条と中世後半と考えられる溝群及び土壙1基を検出したのみである。ここでは弥生時代の溝について若干触れたい。

この溝（SD01）の続きは第6次・7次調査と下水道工事に伴う調査で確認されており、短径80m前後、長径は不明だが60m以上はある楕円形の環溝であると考えられる。有田遺跡では台地最高所にある弥生時代前期前半の環溝が有名である。その規模は約300×200mと大型のものであるが、今もって環溝内から確実に該期のものと思われる遺構を見いだし得ない。さらに特異なのはこの溝は人工的に埋め戻されていることである。第187次調査の成果では、溝の下部は自然堆積であったが、上部半分はブロック状の厚い土層から成っており、埋め戻したものと推察された。第77次調査では、溝の中程に夜臼系土器の大小の甕の完形品が各1個体出土しているが、これは埋め戻し直前の土器の可能性も考えられる。

前期前半初頭の環溝を埋め戻した時期は不明であるが、この溝の次の時代に掘られたのが当調査区で検出した環溝である。この環溝とは別に、第134次調査区で板付Ⅱ式の時期と思われる溝が見つかっている。溝の規模は幅1.3m、深さ0.8mと当調査区の溝に比べるとひとまわり小さい。この溝の続き

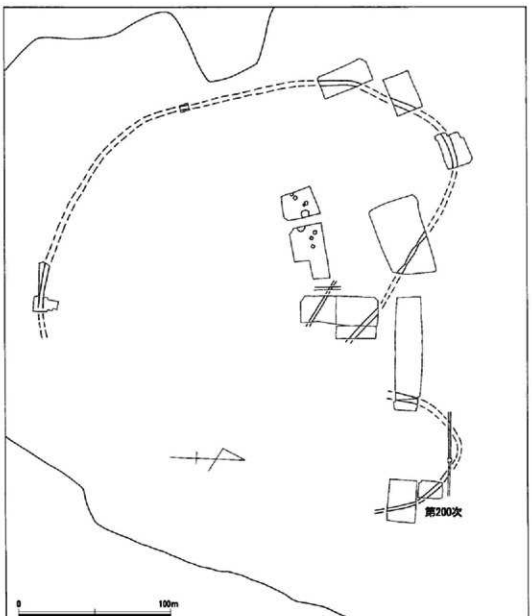


Fig. 7　有田遺跡群弥生時代前期環濠配置図（1／250）

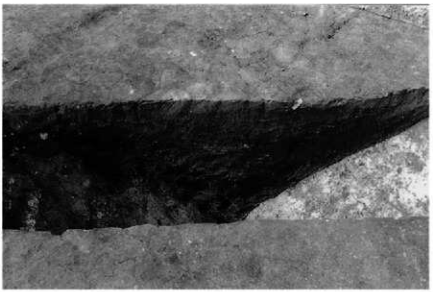
はわからないため、環濠がどうか不明だが、134次の西側にある第78次・100次調査区では板付Ⅱ式土器の時期と考えられる竪穴住居２軒、土壙・貯蔵穴６基が検出されており、前期前半の環濠ではなく、134次の溝に伴う可能性が高いことを考えれば、78・100次調査区を囲む環濠になる可能性が考えられる。この状況は第100次調査の報告書ですでに述べたことであるが、その後の調査でもこの前期前半の大型環濠から前期後半の２本の環濠に分かれた理由、あるいは大型環濠を埋め戻した理由は不明のままである。今後の調査で明らかになることを期待したい。

図版　1

調査区南半全体写真（北から）

調査区北半全体写真

図版　2



上　SD01土層断面
左　SD01遺物出土状況
右　SD02土層断面

出土遺物

第206次調査

1　調査にいたる経緯

平成15年３月３日付けで、柴田芳秀氏より福岡市早良区南庄３丁目72番３地内における埋蔵文化財事前審査申請書（審査番号14-２-840）が福岡市埋蔵文化財課あてに提出された。それを受けて平成15年３月18日に試掘調査を行った結果、ピット等の遺構が検出されたため、地盤改良工事によって破壊を受ける建物建築部分の発掘調査を実施した。発掘調査は平成15年４月７日に開始し、４月10日に終了した。調査面積は66㎡である。

調査委託　柴田芳秀
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第１係
課　長　山崎純男
第１係長　力武卓治
調査担当　池田祐司
調査庶務　文化財部文化財整備課管理係

2調査地の位置と立地

有田遺跡群の北端部に位置し、北側に広がる低地との境付近に位置する。現在では北側に緩やかに傾斜する斜面で標高５ｍを測る。旧地形では浅い谷部にあたり、周囲で遺構は確認されていない。50mほど西側の丘陵部では周溝墓等の弥生時代から古墳時代の墳墓群が確認されている。

3　調査の記録

調査地点はFig. ５のように140cmほどの客土がなされ、旧耕作土と考えられる２から４層を除去した５層青灰色粘質土（八女粘土層）上面

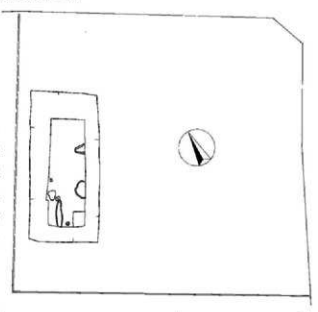


Fig. 2　調査区位置図（1／300）

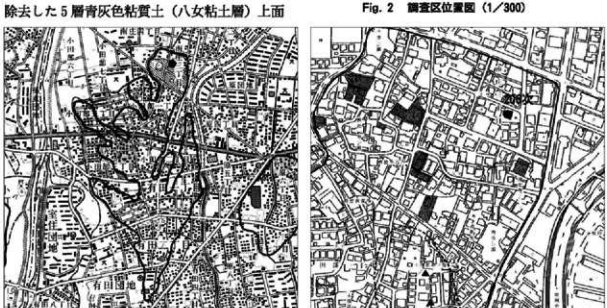


Fig. 1　第206次調査地の位置図（１／25,000　１／5,000）

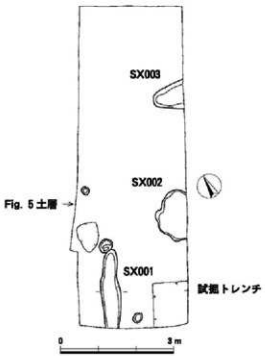


Fig. 3　遺構配置図（1／100）

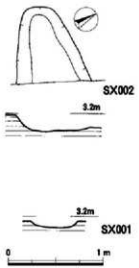


Fig. 4　遺構実測図（1／40）

Fig. 5　調査区土層（1／40）

が遺構面となる。遺構面は南側がわずかに下がり比高差は5㎝ほどである。検出した遺構は浅いくぼみ状のピットと溝状のくぼみである。SX001は溝状のくぼみで南北方向に走り幅40㎝、深さ7㎝を測る。SX002はくぼみ状のピットで南北130㎝、深さ7㎝を測る。SX003は東側が調査区外に出る溝状のくぼみで東西80㎝を確認し幅80㎝、深さ11㎝を測る。以上3つの遺構の覆土は灰褐色の砂混じりの粘質土で遺物は含まない。

試掘時には客土上部のきれいな砂から古式土師器、輸入中世陶磁器、土師器、近世国産陶磁器の破片が出土している。客土は建物解体後のごく最近のものらしいが採取地は不明である。また、試掘時にはっきりとした井戸状の遺構を検出しているが東側の調査区外に位置する。

Fig. 6　調査区全景（南西から）

Fig. 7　SX002

第210次調査

1　調査に至る経緯

平成16年３月12日、森崎柳成氏より、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対し、福岡市早良区有田１丁目12－9地内における専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受け埋蔵文化財課では、同申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群に含まれ、基礎構造が埋蔵文化財へ影響があると予想されたため、同年４月13日に試掘調査を実施し遺構を検出した。

この結果、申請地のうち新築部分の67.5㎡については工事に伴い、遺構の破壊が回避できないため、記録保存のための発掘調査を福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課が平成16年４月30日から５月21日まで実施した。整理報告業務は、平成17年度に行った。調査面積は41.0㎡である。

調査の組織

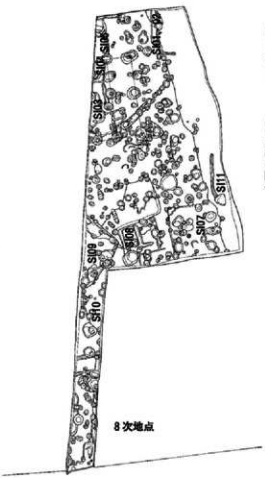
調査委託　森崎　柳成
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課調査第１係
　課　　長　山口譲治
　調査第１係長　田中壽夫（前任）　山崎龍雄（現任）
　担　　当　松浦一之介
庶務担当　文化財部文化財整備課管理係

2　調査地の位置と立地

有田遺跡群は、早良平野の北側ほぼ中央部に位置し、南北約1.8㎞、東西約0.8㎞の独立洪積台地と、その裾部に広がる沖積地からなる旧石器時代から現代に至る複合遺跡である。台地は八手状に開析され谷部が複雑に出入りしている。古墳の墳丘を除く最高所は、標高13m程度を測り、ここから東西南北にむかって緩やかに傾斜している。

今回の調査地点は、有田遺跡群の西側端部付近に位置し、旧状は標高10m程度を測り、金屑川に向かって緩やかに傾斜する台地傾斜面である。現況は宅地である。

Fig. 1　第210次調査地の位置図（1／25,000　1／5,000）



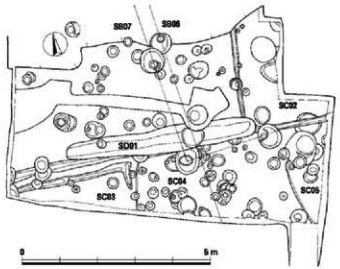


Fig 3．調査区全景（南から）

Fig 4．SC02　検出状況（南から）

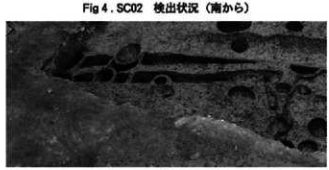


Fig 5．SC03　検出状況（南から）

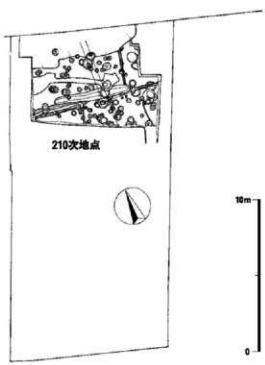


Fig. 2　遺構配置図（1／100）

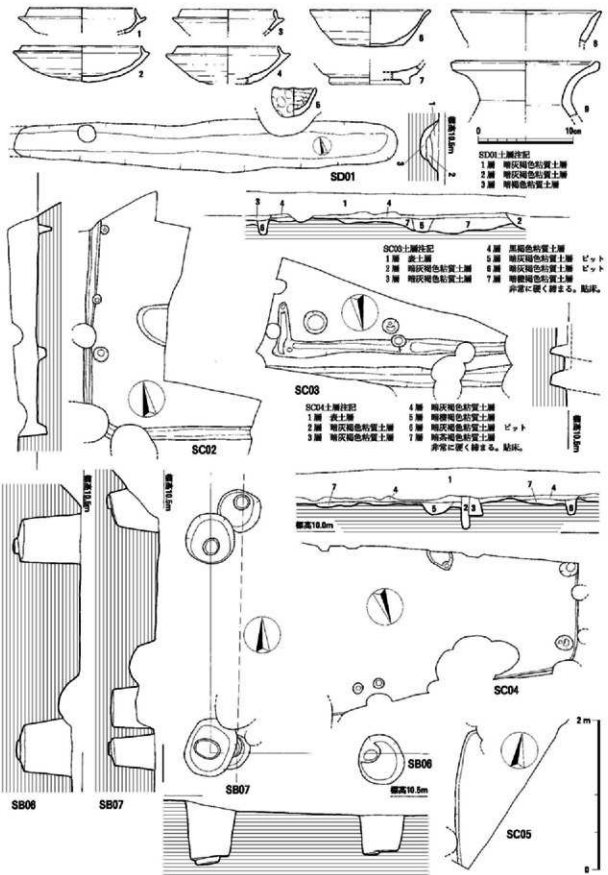


Fig. 6　遺物、遺構実測図（1／40　1／50）

3　遺構と遺物

調査区内では、25～30cmの表土層を除去した橙褐色ローム層で遺構面を確認した。遺構の内容は、古墳時代の竪穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物の一部、溝、ピットなどである。

(1)　竪穴住居跡（SC）

SC02（Fig. 2、6）

調査区北東端部でその南西隅角と南辺、西辺の一部を検出した。隅丸長方形もしくは方形と考えられる。SD01、SB06に切られる。壁に沿って、幅15cm、床面からの深さ10cm程度の壁溝が巡る。壁溝に沿って径10～20cm程度の小ピットが検出された。上屋や壁体に関係するものか。

出土遺物

2は口径12.6cm、受部径14.4cm、器高3.8cmを測る須恵器坏身で、床面直上から出土。立ち上がり短く内傾。5は土師質の手捏土器で、口径4.5cm、器高3.1cmを測る。床面直上から出土。底部丸底で内・外器面ともに指頭圧痕がみられる。8は土師器甕の口縁部片で、口径15.8cmに復元。

SC03（Fig. 2、6）

調査区南西端部で壁溝と考えられる溝の一部を検出した。隅丸長方形もしくは方形と考えられる。SD01に切られる。壁溝は幅15～20cm、床面からの深さ15cm程度を測り、二重に平行して検出されたことや、壁面の土層観察等から建て替えられたと推定される。

SC04（Fig. 2、6）

調査区南側で北西隅角と北辺、西辺の一部を検出した。隅丸長方形もしくは方形と考えられる。SD01、SB06、076切られる。

SC05（Fig. 2、6）

調査区南東側で北西隅角と西辺のごく一部を検出した。隅丸長方形もしくは方形と考えられる。

(2)　掘立柱建物跡（SB）

SB06（Fig. 2、6）

柱穴3基を検出したのみで、規模は不明。SD01に切られ、SB07を切る。各柱穴は直径70～80cmの円形で、柱痕部分は柱穴基底面より一段下がる。柱穴間の芯々距離は南北270cm、東西215cm。

出土遺物

6は口径12.8cm、底径7.0cmに復元される土師器坏。7は底径8.0cmに復元される須恵器坏片。

SB07（Fig. 2、6）

柱穴2基を検出したのみで、規模は不明。各柱穴は直径50～55cmの円形で、柱痕部分は柱穴基底面より一段下がる。柱穴間の芯々距離330cm。

(3)　溝（SD）

SD01（Fig. 2、6）

調査区中央で検出した。検出面での幅60cm、深さ25cm程度を測り、断面が薙鉾形を呈する。SB06、07、SC02、03、04を切る。西側から東側に向かって緩やかに傾斜する。

4　まとめ

出土遺物から、竪穴住居跡SC02の年代は7世紀前半代と考えられる。その他の竪穴住居跡については、出土遺物が少なく時期は不明である。掘立柱建物跡SB06は8世紀前半代と推定される。また切り合い関係からSB07はそれより前出するが、建物主軸がほぼ揃うことや柱穴の位置から、建て替えと考えられる。

第215次調査

1　調査に至る経緯

平成16年11月5日、長勝幸氏より、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対し、福岡市早良区小田部5丁目60番の一部地内における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受け埋蔵文化財課では、同申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群に含まれ、隣接地の試掘成果から基礎構造が埋蔵文化財へ影響があると判断された。

申請地のうち新築部分の68.5㎡については工事に伴い、遺構の破壊が回避できないため、記録保存のための発掘調査を福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課が平成16年12月1日から12月9日まで実施した。整理報告業務は、平成17年度に行った。調査面積は48.0㎡である。

調査の組織

調査委託　森崎　柳成

調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課調査第1係

課　　長　山口譲治

調査第1係長　田中壽夫（前任）　山崎龍雄（現任）

担　　当　松浦一之介

庶務担当　文化財部文化財整備課管理係

2　調査地の位置と立地

有田遺跡群は、早良平野の北側ほぼ中央部に位置し、南北約1.7㎞、東西約0.8㎞の独立洪積台地と、その裾部に広がる沖積地からなる旧石器時代から現代に至る複合遺跡である。台地は八手状に開析され谷部が複雑に出入りしている。古墳の墳丘を除く最高所は、標高13m程度を測り、ここから東西南北にむかって緩やかに傾斜している。

今回の調査地点は、有田遺跡群の北側に位置する。旧状は標高11m程度を測り、北西に向かって延びる台地鞍部上であった。現況は宅地である。

Fig. 1　第215次調査地の位置図（1／25,000　1／5,000）

3　遺構と遺物

重機で表土を除去した後、人力による遺構検出作業と掘削を行った。遺構面は、現地表面から約20cm程度掘削した標高10.3m付近の鳥栖ローム層上面で検出した。検出した遺構は、ピット数個、土壙1基のみである。遺構面は大きく削平されており、遺存状況は良好でない。本調査区の西側に隣接する第214次調査地点では掘立柱建物跡が検出され、建物の一部が本調査地点に延びると予想し、精査したが、検出されなかった。出土遺物は弥生土器片、土師器片、須恵器片など僅少である。

(1)　土壙

SK01

調査区の北側で検出した。上面は大きく削平され、また数個の撹乱や耕運機の爪などに切られており規模は不明確だが、幅100cm×長さ150cm程度の隅丸長方形を呈すると考えられる。

出土遺物

2、3は土師器壷の口縁部細片である。4は同じく土師器壷の頸部片である。6は口径12.0cmに復元される土師器壷の口縁部片である。内器面に指頭圧痕が認められる。胎土はやや粗い。

(2)　その他の出土遺物

1は弥生土器蓋の小片である。5は須恵器高台付坏の小片である。7は弥生土器甕の底部片で、底径6.4cmに復元される。いずれも遺構検出面とピットの出土遺物である。

4　まとめ

第214次調査区から延びると予想された掘立柱建物は検出されなかったが、遺構面のレベルは第214次調査区とほぼ差がなく、建物が本調査区に延びない可能性が高いと考えられる。検出する遺構の帰属時期は、出土遺物が僅少で決定しがたいが、概ね古墳時代から古代であると推定される。

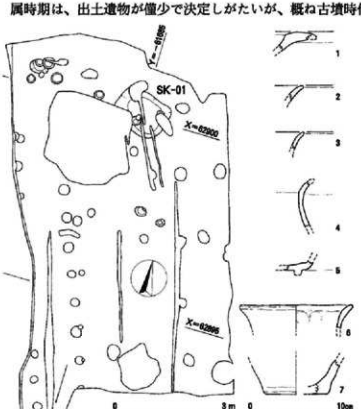


Fig. 2　遺構配置図及び出土遺物実測図（1／100　1／4）

Fig. 3　調査区全景（南から）

Fig. 4　SK01　検出状況（西から）

報告書抄録 1

ふりがな	ありた・こたべ41
書名	有田小田部
副書名	
巻次	41
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	870
編著者名	力武卓治・小林義彦・米倉秀紀・池田祐司・久住猛雄・松浦一之介
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
発行年月日	2006年 3 月31日

ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第 9 次	ふくおかけんふくおかしさわらくこたべ1ちょうめ 福岡県福岡市早良区小田部 1 丁目	40132	0309	33 33 58	130 20 08	19780529- 19780630	135	個人専用 住宅建設
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第10次	ふくおかけんふくおかしさわらくこたべ2ちょうめ 福岡県福岡市早良区小田部 2 丁目	40132	0309	33 33 46	130 20 22	19780530- 19780614	200	個人専用 住宅建設
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第11次	ふくおかけんふくおかしさわらくこたべ3ちょうめ 福岡県福岡市早良区小田部 3 丁目	40132	0309	33 33 54	130 20 07	19780526- 19780602	67	個人専用 住宅建設

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有田遺跡群 第 9 次	集落	古墳時代・古代	竪穴住居 1	須恵器＋土師器	
有田遺跡群 第10次	集落	古墳時代・古代	土壙 3	須恵器＋土師器	
有田遺跡群 第11次	集落	弥生時代・古代	ピット	弥生土器＋磨製石鏃 ＋土師器	

要　約	第 9 次調査では方形の竪穴住居 1 軒とピットを検出した。調査区全体が大きく削平されていたため、竪穴住居は主柱穴とベッド状遺構の痕跡が残っているだけであった。出土遺物は多く、古式の須恵器坏・甕、土師器の高坏・小型丸底壺・甕などが出土した。5 世紀後半前後の住居である。 第10次調査は有田台地の東側突出部にある。調査では不定形の土壙群やピットを検出した。出土遺物は古代の須恵器・土師器が中心である。 第11次調査は約70㎡の小さな調査区で、検出した遺構は不整形土壙 2 基とピットである。出土遺物は少ないが、磨製石鏃が 1 点出土した。

ふりがな	ありた・こたべ41
書名	有田小田部
副書名	
巻次	41
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	870
編著名	力武卓治・小林義彦・米倉秀紀・池田祐司・久住猛雄・松浦一之介
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第12次	ふくおかけんふくおかしさわらありた1ちょうめ 福岡県福岡市早良区有田1丁目	40132	0309	33 33 36	130 20 07	19780606- 19780629	304	個人専用 住宅建設
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第13次	ふくおかけんふくおかしさわらくこたべ2ちょうめ 福岡県福岡市早良区小田部2丁目	40132	0309	33 33 46	130 20 22	19780614- 19780616	60	個人専用 住宅建設
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第14次	ふくおかけんふくおかしさわらくこたべ3ちょうめ 福岡県福岡市早良区小田部3丁目	40132	0309	33 33 45	130 20 05	19780802- 19780821	372	個人専用 住宅建設

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有田遺跡群 第12次	集落	古代	掘立柱建物6＋竪穴住居1	土師器＋須恵器	
有田遺跡群 第13次	集落	不明	ピット	なし	
有田遺跡群 第14次	集落	中世・近世	井戸2＋土壙	陶磁器＋土師器＋須恵器＋石鍛	

要　約	第12次調査は有田台地最高所の西側の台地落ち際近くにある。調査では掘立柱建物6棟、竪穴住居1軒を検出した。このうち大型の建物1棟は中央に炉を持っている。炉は別の建物中央にもあり、平地式住居もしくは何らかの工房の可能性を持っている。出土遺物は8世紀の遺物が中心である。 第13次調査は狭隘な調査区で、検出した遺構もピットのみで出土遺物もなかった。 第14次調査では井戸・土壙・溝・ピットを検出した。井戸の井筒は板材と角材で立方体に組んでいる。江戸時代後期の井戸である。土壙も同時期の物である。当該期の遺物では陶磁器・和鏡・銅銭・瓦・擂臼などが出土し、このほかに中世の陶磁器・土器、瓦などが出土した。

ふりがな	ありた・こたべ41
書名	有田小田部
副書名	
巻次	41
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	870
編著者名	力武卓治・小林義彦・米倉秀紀・池田祐司・久住猛雄・松浦一之介
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第16次	ふくおかけんふくおかしさわらくこたべ1ちょうめ 福岡県福岡市早良区小田部3丁目	40132	0309	33 33 57	130 19 56	19781129- 19781209	163	個人専用 住宅建設
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第171次	ふくおかけんふくおかしさわらくこたべ1ちょうめ 福岡県福岡市早良区小田部1丁目	40132	0309	33 33 58	130 20 17	19930404- 19930414	250	個人専用 住宅建設
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第183次	ふくおかけんふくおかしさわらくありた2ちょうめ 福岡県福岡市早良区有田2丁目	40132	0309	33 33 32	130 20 11	19960826- 19960830	66	倉庫等

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有田遺跡群 第16次	集落	弥生時代前期	竪穴住居2＋土壙3＋貯蔵穴1	弥生土器＋磨製石斧＋砥石＋土錘＋紡錘車	
有田遺跡群 第171次	集落	古代	土壙15＋溝1＋包含層	土師器＋石鏃	
有田遺跡群 第183次	集落	中世・近世	掘立柱建物1＋溝1＋土壙群	陶磁器	

要約	
	第16次調査は有田台地の最西北部に位置する。2軒の竪穴住居は円形と方形。円形竪穴住居は柱穴のみで壁は残っていない。貯蔵穴も上部の大半は削平されていたが、内部から多くの弥生時代前期後半土器群が出土した。 第171次調査では土壙15基、溝1条と包含層を検出した。土壙の用途は不明なものが多いが、1号土壙は住居の可能性があり、2号土壙は壁面が焼けており、鉄滓がはいっていることから、鍛冶炉の可能性も考えられる。出土遺物の多くは古代の土師器である。 第183次調査では掘立柱建物1棟、溝3条と多くの土壙群である。建物は規模不明で中世か。溝は近代以降。土壙の大半も近世以降と思われる。

報告書抄録 4

ふりがな	ありた・こたべ41
書名	有田小田部
副書名	
巻次	41
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	870
編著者名	力武卓治・小林義彦・米倉秀紀・池田祐司・久住猛雄・松浦一之介
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第191次	ふくおかけんふくおかしさわらくこたべ3ちょうめ 福岡県福岡市早良区小田部3丁目	40132	0309	33 33 51	130 20 19	19981207- 19981217	169	個人専用住宅建設
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第198次	ふくおかけんふくおかしさわらくみなみしょう3ちょうめ 福岡県福岡市早良区南庄3丁目	40132	0309	33 34 09	130 20 14	20000626- 20000727	45	個人専用住宅建設
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第199次	ふくおかけんふくおかしさわらくありた2ちょうめ 福岡県福岡市早良区有田2丁目	40132	0309	33 33 35	130 20 10	20000901- 20000912	45	土地切り下げ

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有田遺跡群 第191次	集落	近世	掘立柱建物6＋櫓1＋溝1＋土壙群	陶磁器＋石鏃	
有田遺跡群 第198次	集落	古墳時代	竪穴住居1	須恵器＋土師器＋弥生土器＋滑石製円盤	
有田遺跡群 第199次	集落	古墳時代・奈良時代	竪穴住居・掘立柱建物・溝	須恵器・土師器	早良郡衙の一部

要　約	第191次調査で検出した建物はいずれも小型のものである。溝は調査区を貫く浅い細いもの。櫓は5間分を検出。土壙群の多くは近世のものと思われる。出土遺物は近世の陶磁器群と石鏃1点である。 第198次調査では古墳時代住居1軒を検出した。時期は6世紀後半である。他に前期から中期の弥生土器などが出土した。 第199次調査は、古墳時代では前期の竪穴住居2軒の一部のみ。古代は8世紀中頃に埋められた溝1条とその溝を埋めて建築した大型掘立柱建物1棟を検出した。溝は早良郡衙Ⅱ期に属する溝で、建物は今まで有田遺跡であまり検出されていない8世紀後半代と考えられる大型建物である。

報告書抄録 5

ふりがな	ありた・こたべ41
書名	有田小田部
副書名	
巻次	41
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	870
編著者名	力武卓治・小林義彦・米倉秀紀・池田祐司・久住猛雄・松浦一之介
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第200次	ふくおかけんふくおかしさわらくありた2ちょうめ 福岡県福岡市早良区有田2丁目	40132	0309	33 33 38	130 20 20	20000918- 20001004	169	個人専用 住宅建設
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第206次	ふくおかけんふくおかしさわらくみなみしょう3ちょうめ 福岡県福岡市早良区南庄3丁目	40132	0309	33 34 09	130 20 21	20030407- 20030410	66	個人専用 住宅建設

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有田遺跡群 第200次	集落	弥生時代前期・ 中世後半	溝	弥生土器・石器・陶磁器	
有田遺跡群 第206次	集落	中世	（客土中から遺物）	陶磁器＋土師器	

要　約	第200次調査で検出した遺構は弥生時代前期の溝1条と中世の溝1条である。弥生時代前期溝は板付Ⅱ式時代の環溝の一部であるが、今回はトレンチ調査のみである。中世の溝は戦国期小田部城の濠の一部である。 第206次調査は有田遺跡の北端部で、北側の低地との境にある。検出したのは溝状のくぼみとピットのみで、遺物は試掘時に中世輸入陶磁器・土師器・近世国産陶磁器が出土したが、客土からの出土である。調査区外では試掘時に井戸が検出されている。

報告書抄録 6

ふりがな	ありた・こたべ41
書名	有田小田部
副書名	
巻次	41
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	870
編著者名	力武卓治・小林義彦・米倉秀紀・池田祐司・久住猛雄・松浦一之介
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第210次	ふくおかけんふくおかしさわらくありた1ちょうめ 福岡県福岡市早良区有田1丁目	40132	0309	33 33 41	130 20 22	20040430- 20040521	41	個人専用 住宅建設
ありたいせきぐん 有田遺跡群 第215次	ふくおかけんふくおかしさわらくこたべ5ちょうめ 福岡県福岡市早良区小田部5丁目	40132	0309	33 33 56	130 20 08	20041201- 20041209	69	個人専用 住宅建設

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有田遺跡群 第210次	集落	古墳時代後期	竪穴住居4＋掘立柱建物2＋溝1	須恵器＋土師器	
有田遺跡群 第215次	集落	古墳時代	土壙	須恵器＋土師器	

要　約	第210次調査で竪穴住居と考えられる遺構を4軒検出したが、いずれもごく一部の検出で規模等は明らかではないが、古墳時代後期のものと考えられる。掘立柱建物はこの調査区の南側で検出されている大型建物に関連するものか。 第215次調査周辺は全体的に削平が著しく、この調査区でも土壙1基のみの検出である。古墳時代後期であろうか。

有田・小田部　41

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第870集

2006年（平成18年）３月31日発行

発　行　福岡市教育委員会
〒810-8620　福岡市中央区天神１丁目８番１号
電話　092－711－4667

印　刷　ビーアンドディービジネス株式会社
〒813-0062　福岡市東区松島４丁目６番８号
電話　092－621－1130

The Report of The Research
of Burial Cultural Properties
Fukuoka City Vol 870

Arita－Kotabe Site 41

Fukuoka City

31 March, 2006

Fukuoka City Board of Education